浅川扇状地遺跡群

吉田古屋敷遺跡(5)

北長野駅前Ａ－２地区市街地再開発事業にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、古くから人々の足跡が刻まれています。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも土地に埋蔵されている遺跡や遺物は、当時の人々の暮らしぶりを生々しく現在の私達に伝えてくれます。

本書で報告しております吉田古屋敷遺跡は、長野市北部の広大な浅川扇状地遺跡群に含まれており、これまでに縄文時代中期以降、ほぼ連続した人々の生活の痕跡が確認されています。今回、北長野駅前Ａ－２地区の市街地再開発事業にともない、失われる埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。調査では弥生時代から平安時代の住居跡が43軒確認されており、吉田地区が原始・古代から居住に適した環境であったことがうかがえます。

ここに長野市の埋蔵文化財第120集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。調査では人々が営んだ痕跡である貴重な遺構・遺物が多数確認されています。その成果は連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

長野市教育委員会
教育長　立岩　睦秀

例　言

1　本書は、長野市吉田における開発事業「北長野駅前Ａ－２地区市街地再開発事業」に伴う発掘調査報告書である。

2　調査は、北長野駅前Ａ－２地区市街地再開発組合理事長清水偉男と長野市長鷲沢正一との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。

3　発掘調査地は、長野市吉田三丁目811－2ほかに所在する。

4　発掘調査は、平成18年11月24日から平成19年7月11日にかけて行い、調査面積は1,720㎡である。

5　遺構の測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。

6　遺構図は、調査区全体図を1：500、各調査区を1：300、各遺構図を1：80もしくは1：100、カマド微細図を1：30もしくは1：40、ＳＢ25の土器出土状態図は1：10の縮尺で掲載した。
なお、遺構図中のスクリーントーンは が焼土面、 が炭化物を表している。

7　遺物図は、土器が1：4、土器片および拓影図が1：3、石器・石製品が1：1・1：2、もしくは1：3・2：3の縮尺で掲載した。なお、弥生土器・土師器・中世陶器は断面を白抜き、須恵器は断面を黒塗りで表している。
また、 は黒色土器の黒色処理部を、 は赤色塗彩された土器の赤彩部をそれぞれ表している。

8　本文および掲載図中には、遺構の略号を用いた。ＳＢは竪穴住居址、ＳＤは溝跡、ＳＫは土坑、ＳＸは性格不明遺構を表している。

9　発掘調査の経過において、遺構番号に幾つかの欠番が生じたが、整理作業の便宜上、本報告でもそのまま欠番としている。具体的には、ＳＢ16、ＳＢ34、ＳＢ36の竪穴住居址３軒である。

10　本書の執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章　第１節…… 宿野
第Ⅰ章　第２節～第Ⅲ章　第２節…… 柴田
第Ⅲ章　第３節１～４項…… 柴田・小池
第Ⅲ章　第３節５項（１）－１ …… 向山
第Ⅲ章　第３節５項（１）－２～（３）…… 小池
第Ⅳ章…… 小池

11　遺跡から出土した遺物は、遺跡の略記号「ＡＹＦＡ２」を用いて注記を行い、遺構図版類と共に長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

序・例言・目次

第Ⅰ章　調査の経過……1
　第１節　調査に至る経過
　第２節　調査体制
　第３節　調査日誌

第Ⅱ章　調査地周辺の環境……6
　第１節　地理的環境
　第２節　考古学的環境

第Ⅲ章　調査の成果……11
　第１節　調査概要
　第２節　遺構と遺物
　　１．弥生時代の遺構と遺物……16
　　２．古墳時代の遺構と遺物……30
　　３．古代の遺構と遺物……99
　　４．中世以降の遺構と遺物……115
　　５．遺構覆土混入および遺構外出土遺物……116

第Ⅳ章　結語……134

写真図版……141

報告書抄録・シリーズ・奥付

挿 図 目 次

図１　調査地位置図…… 1
図２　調査地周辺遺跡地図…… 7
図３　吉田地区発掘調査地点位置図…… 8
図４　調査区全体図…… 12
図５　調査区平面図…… 13
図６　調査区平面図(Ⅱ区Ⅲ区)…… 15
図７　Ⅰ区ＳＢ２…… 16
図８　ＳＢ２出土遺物…… 16
図９　Ⅰ区ＳＢ３…… 17
図１０　ＳＢ３出土遺物…… 18
図１１　ＳＢ３出土石鏃・石鏃未製品(流紋岩製)…… 18
図１２　Ⅰ区ＳＢ９…… 19
図１３　Ⅰ区ＳＢ10…… 19
図１４　ＳＢ10出土遺物…… 19
図１５　ＳＢ10出土遺物…… 20
図１６　Ⅰ区ＳＢ12…… 21
図１７　ＳＢ12出土遺物…… 21
図１８　Ⅰ区ＳＢ22…… 22
図１９　ＳＢ22出土遺物…… 22
図２０　Ⅱ区ＳＢ24…… 23
図２１　ＳＢ24出土遺物…… 23
図２２　Ⅲ区ＳＢ37…… 24
図２３　ＳＢ37出土遺物…… 25
図２４　Ⅲ区ＳＢ24…… 26
図２５　ＳＢ42出土遺物…… 27
図２６　Ⅰ区ＳＫ６…… 27
図２７　ＳＫ６出土遺物…… 28
図２８　Ⅲ区ＳＫ12…… 28
図２９　ＳＫ12出土遺物…… 28
図３０　Ⅰ区ＳＢ１…… 30
図３１　ＳＢ１カマド微細図…… 31
図３２　ＳＢ１出土遺物…… 32
図３３　Ⅰ区ＳＢ４…… 33
図３４　ＳＢ４出土遺物…… 33
図３５　Ⅰ区ＳＢ５…… 34
図３６　ＳＢ５出土遺物…… 35
図３７　ＳＢ５カマド微細図…… 35
図３８　ＳＢ６出土遺物…… 35
図３９　Ⅰ区ＳＢ６…… 35
図４０　Ⅰ区ＳＢ７…… 36
図４１　ＳＢ７カマド微細図…… 37
図４２　ＳＢ７出土遺物…… 37
図４３　Ⅰ区ＳＢ８…… 38
図４４　ＳＢ８出土遺物…… 38
図４５　Ⅰ区ＳＢ133…… 39
図４６　ＳＢ13カマド微細図…… 39
図４７　ＳＢ13出土遺物…… 40
図４８　Ⅰ区ＳＢ14…… 41
図４９　ＳＢ14出土遺物…… 41
図５０　Ⅰ区ＳＢ18…… 42
図５１　ＳＢ18出土遺物…… 42
図５２　Ⅰ区ＳＢ19…… 43
図５３　ＳＢ19カマド微細図…… 44
図５４　ＳＢ19出土遺物…… 44
図５５　Ⅰ区ＳＢ20…… 45
図５６　ＳＢ20出土遺物…… 45
図５７　Ⅰ区ＳＢ21…… 46
図５８　ＳＢ21出土遺物…… 46
図５９　Ⅱ区ＳＢ23…… 46
図６０　ＳＢ23出土遺物…… 46
図６１　Ⅱ区ＳＢ25…… 47
図６２　ＳＢ25カマド微細図…… 48
図６３　ＳＢ25カマド・カマド西脇遺物出土状態微細図…… 49
図６４　ＳＢ25北西隅土器集中区遺物出土状態微細図および土偶配列復元概念図・ 52
図６５　ＳＢ25北東隅土器集中区遺物出土状態微細図…… 55
図６６　ＳＢ25南東隅土器集中区遺物出土状態微細図…… 57
図６７　ＳＢ25出土遺物①…… 58
図６８　ＳＢ25出土遺物②…… 59
図６９　ＳＢ25出土遺物③…… 60
図７０　Ⅱ区ＳＢ26…… 63
図７１　ＳＢ26カマド微細図…… 64

図７２　ＳＢ26出土遺物 …… 66
図７３　Ⅱ区ＳＢ77 …… 67
図７４　ＳＢ27カマド微細図 …… 68
図７５　ＳＢ27出土遺物 …… 69
図７６　Ⅱ区ＳＢ２８ …… 70
図７７　ＳＢ28カマド微細図 …… 71
図７８　ＳＢ28出土遺物 …… 73
図７９　Ⅱ区ＳＢ30 …… 74
図８０　Ⅱ区ＳＢ31 …… 74
図８１　ＳＢ31カマド微細図 …… 74
図８２　ＳＢ31出土遺物 …… 75
図８３　Ⅲ区ＳＢ33 …… 76
図８４　ＳＢ33カマド微細図 …… 77
図８５　ＳＢ33出土遺物① …… 79
図８６　ＳＢ33出土遺物② …… 80
図８７　Ⅲ区ＳＢ35 …… 82
図８８　ＳＢ35出土遺物 …… 83
図８９　Ⅲ区ＳＢ38 …… 83
図９０　ＳＢ38出土遺物 …… 85
図９１　Ⅲ区ＳＢ39 …… 86
図９２　Ⅲ区ＳＢ40 …… 86
図９３　ＳＢ40出土遺物 …… 88
図９４　Ⅲ区ＳＢ41 …… 88
図９５　ＳＢ41カマド微細図 …… 89
図９６　ＳＢ41出土遺物 …… 90
図９７　Ⅲ区ＳＢ43 …… 92
図９８　ＳＢ43出土遺物 …… 93
図９９　Ⅲ区ＳＢ44 …… 93
図 100　ＳＢ44完掘状態 …… 93
図 101　Ⅲ区ＳＢ45 …… 94
図 102　ＳＢ45カマド …… 94
図 103　ＳＢ45出土遺物 …… 95
図 104　Ⅲ地区ＳＢ46 …… 96
図 105　Ⅱ区ＳＫ10 …… 97
図 106　ＳＫ10出土遺物 …… 97
図 107　Ⅰ区ＳＢ11 …… 99
図 108　ＳＢ11カマド微細部 …… 100
図 109　ＳＢ11出土遺物 …… 100
図 110　Ⅰ区ＳＢ15 …… 101
図 111　ＳＢ15出土遺物 …… 101
図 112　Ⅰ区ＳＢ17 …… 101
図 113　ＳＢ17カマド微細図 …… 102
図 114　ＳＢ17出土遺物 …… 103
図 115　Ⅱ区ＳＢ29 …… 104
図 116　ＳＢ29出土遺物 …… 105
図 117　Ⅲ区ＳＢ32 …… 105
図 118　ＳＢ32出土遺物 …… 105
図 119　ＳＤ２出土遺物 …… 106
図 120　Ⅰ区ＳＤ２遺構図 …… 107
図 121　Ⅱ区ＳＤ４ …… 108
図 122　ＳＤ４出土遺物 …… 108
図 123　Ⅲ区ＳＤ10 …… 108
図 124　ＳＤ10出土遺物 …… 109
図 125　Ⅰ区ＳＸ３・ＳＫ７遺構図 …… 110
図 126　ＳＸ３・ＳＫ７出土遺物 …… 111
図 127　Ⅱ区ＳＸ６・ＳＸ７・ＳＤ８ …… 112
図 128　ＳＸ６・ＳＸ７・ＳＤ８出土遺物 …… 114
図 129　ＳＸ４出土遺跡 …… 115
図 130　縄文時代の土器・土製品① …… 118
図 131　縄文時代の土器・土製品② …… 119
図 132　縄文時代の土器・土製品③ …… 120
図 133　弥生時代の土器・土製品（壺） …… 122
図 134　弥生時代の土器・土製品（甕） …… 124
図 135　弥生時代の土器・土製品（その他の器種） …… 125
図 136　古墳時代以降の土器・土製品① …… 127
図 137　古墳時代以降の土器・土製品② …… 128
図 138　石器・石製品・その他の遺物① …… 131
図 139　石器・石製品・その他の遺物② …… 132
図 140　時期別遺跡立地返還図 …… 135

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

調査地は長野市北東部の吉田地区に位置し、ＪＲ北長野駅北側から長野電鉄信濃吉田駅周辺の旧小字「古屋敷」にあたる。調査地周辺では、近年大規模商業施設や集合住宅の建設、辰巳隧道の開通など北長野駅を中心とした再開発が進められている。

平成16年10月５日に長野市都市整備部まちづくり推進課より、市街地再開発事業にともなう埋蔵文化財包蔵地の照会がなされ、開発行為区域が「浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡」の範囲内であり埋蔵文化財包蔵の可能性が極めて高い旨を回答した。北長野Ａ－２地区市街地再開発組合が設立後は、組合事務局と長野市において埋蔵文化財記録保存のための保護協議を重ね、平成18年９月１日付で「埋蔵文化財発掘調査協定」を締結する。その後、事業着手にともない協定に基づく「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。

調査は市街地再開発事業による新設建物（建物棟・立体駐車場）の建設予定範囲を対象としたが、既存建物の解体工事・新規建物の建築工事と並行して行うため、調査範囲を３区分して実施することとした。平成18年11月24日から12月27日までは、第Ⅰ区として建物棟建設予定地東部の約600㎡の調査を行い、平成19年３月９日から４月５日までは第Ⅱ区として建物棟建設予定地西部の約720㎡を行った。また同年５月28日から７月11日まで第Ⅲ区として駐車場建設予定地の約400㎡の調査を行い、述べ約1,720㎡、107日間にわたる現地での発掘調査を完了した。なお、調査は２年度にわたるため、単年度ごとに委託契約を締結している。

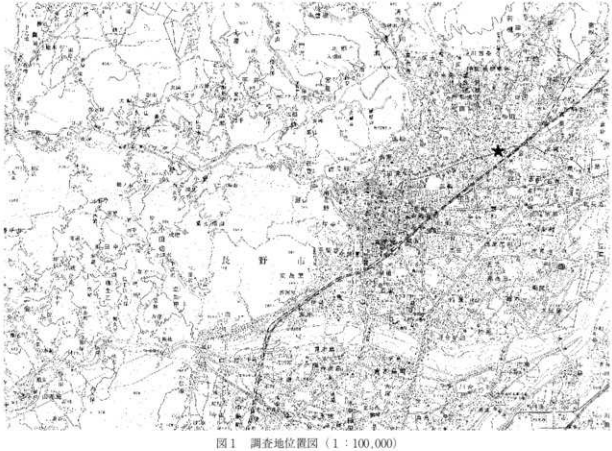


図１　調査地位置図（１：100,000）

第２節　調査体制

調査主体者　長野市教育委員会教育長　立岩　睦秀
総括管理者　文化財課長　北村　真一郎（～H18）・雨宮　一雄（H19～）
総括責任者　局主幹
兼埋蔵文化財センター所長　矢口　忠良（～H18）・青木　和明（H19～）
（庶務担当）係長　宮沢　和雄
職員　吉村　久江
事務員　塚田　容子（～H18）
（調査担当）係長　青木　和明（調査員）（～H18）
主査　風間　栄一・小林　和子
主事　宿野　隆史（調査員）
専門員　遠藤　恵実子（調査員・遺物写真）・長瀬　出・山野井　智子
石丸　敦史（～H18）小出　泰弘（～H18）・森田　利枝（～H18）
山岸　千晃・小池　勝典（調査員・編集）
柴田　洋孝（調査員・編集）・向山　純子（編集）（H19～）
佐々木　麻由子（遺物写真）（H19～）
石材鑑定　長野市立博物館学芸員　畠山　幸司（茶臼山自然史館）
発掘作業員　上原律江・金子多恵子・倉島邦子・後藤一雄・塩入洋子・清水昭光・田村秀之・寺島直利
中嶋昭二郎・宮澤周子・山口勝己・和田五男
整理調査員　青木善子・池田寛子・多羅沢美恵子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子・矢口栄子
整理作業員　倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子
遺構測量　株式会社写真測図研究所

発掘調査の実施にあたっては､北長野駅前Ａ－２地区市街地再開発組合の皆様に多大なご協力を賜った。また、本報告書作成にあたっては、笹沢浩、綿田弘実の両氏に多大なるご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

発掘作業員集合写真

第３節　調査日誌（抄）

［Ⅰ区］　調査日数34日

平成18年度

11月24日㈮～　調査区北半表土剥ぎ開始。
11月27日㈪　発掘作業員による調査開始。遺構検出作業を行う。
11月28日㈫～　遺構の掘り下げを開始。
12月５日㈫　調査区北半全体清掃後、写真撮影を行う。
12月６日㈬　遺構測量委託。
12月７日㈭　結線作業。
12月８日㈮～　調査区南半表土剥ぎ開始。
12月11日㈪～　遺構の掘り下げを開始。
12月18日㈪　降雪のため、午前中作業中止。
12月25日㈪　発掘区全体清掃。午前中空撮。午後に各遺構の写真撮影を行う。
12月26日㈫　遺構測量委託。
12月27日㈬～　大雨により調査区が水没。排水作業を行う。
１月９日㈫　Ⅱ区の試掘を行う。
１月10日㈬～　発掘区清掃・排水作業。
１月12日㈮　現地説明会準備（テント設営、発掘区全体清掃）。
１月13日㈯　午後、現地説明会を行う。300人を超える見学者来跡。
１月15日㈪　現地説明会の片づけを行い、Ⅰ区における全ての作業を終了する。

Ⅰ区調査前風景

Ⅰ区表土剥ぎおよび遺構検出作業

Ⅰ区発掘作業風景

現地説明会風景

［Ⅱ区］　調査日数28日

平成18年度

3月9日(金)～　調査区東半表土剥ぎ開始。

3月12日(月)　発掘作業員による調査を開始するが、降雪のため午前中にて作業中止。重機による表土剥ぎは引き続き行う。

3月13日(火)～　遺構掘り下げ開始。

3月20日(火)　午後、発掘区全体清掃。写真撮影を行う。

3月22日(木)　調査区東半の遺構測量委託。調査区西半表土剥ぎ開始。

3月23日(金)　調査区東半の結線作業を行う。調査区西半の遺構掘り下げを開始。

3月28日(水)　午前中、遺構測量委託。ＳＢ25の土器取上げ、写真撮影を行い、調査区東半での作業を終了。

3月29日(木)　調査区西半北側の表土剥ぎ開始。写真撮影を行う。

平成19年度

4月3日(火)　降雨のため遺構が水没。排水作業と清掃作業を行い、写真撮影を行う。

4月4日(水)　午前中、遺構測量委託。午後、結線作業を行う。

4月5日(木)　発掘区清掃作業後、写真撮影を行う。片づけを行い、Ⅱ区における全ての作業を終了する。

Ⅱ区表土剥ぎ作業風景

Ⅱ区東側発掘調査風景

Ⅱ区西側発掘調査風景

Ⅱ区測量風景

［Ⅲ区］　調査日数45日

平成19年度

5月28日(月)～　調査区西半の表土剥ぎ開始。
5月30日(水)～　発掘作業員による調査を開始。遺構検出作業、掘り下げ作業を行う。
5月31日(木)　降雨のため午前中にて作業終了。
6月７日(木)　調査区西半南側の写真撮影を行う。
6月８日(金)　調査区西半南側の遺構測量委託。結線作業を行う。午後、雷雨により現場作業中止。
6月11日(月)　調査区西半北側の排水作業を行う。
6月13日(水)～　調査区東側の表土剥ぎ開始。
6月18日(月)　遺構検出・掘り下げを開始。
6月20日(水)　体験発掘（吉田小学校６年１組30名）
6月21日(木)　体験発掘（吉田小学校６年４組30名・２組30名）
6月22日(金)　雨天のため現場作業中止。作業員は遺物洗浄作業を行う。
6月25日(月)　現場水没のため、排水作業を行う。作業員は遺物洗浄作業を行う。排水後、調査区清掃。
6月27日(水)　遺構測量委託。
6月28日(木)　体験発掘（吉田小学校６年３組30名）結線作業を行う。
6月29日(金)　雨天のため現場作業中止。
7月２日(月)　雨天のため現場作業中止。
7月３日(火)　現場水没のため、排水・清掃作業を行う。
7月10日(火)　午前中、遺構掘り下げ・各遺構の写真撮影と、発掘区の清掃および写真撮影を行う。午後、遺構測量委託。
7月11日(水)　結線作業を行う。荷物の片づけを行い、Ⅲ区における全ての作業、及び北長野Ａ－２地区における発掘作業を完了する。

Ⅲ区発掘調査風景

体験発掘風景

体験発掘風景

Ⅲ区測量風景

第Ⅱ章　調査地周辺の環境

第１節　地理的環境

吉田古屋敷遺跡が所在する吉田地区は、浅川扇状地の中央部から扇端部に位置する（図２）。その浅川扇状地は、長野市北西部に位置する飯綱山（1,197m）を水源とする浅川の堆積作用によって形成された扇状地である。浅川東条を扇頂に、南は城東・西和田で裾花川扇状地と接し、扇端は東方に伸びて金箱・富竹付近で千曲川氾濫源の後背湿地に接している。扇頂側の勾配は1,000分の25あり、扇状地は南東方向に傾斜している。扇端側では1,000分の15と勾配が緩くなり、吉田古屋敷遺跡が所在している吉田三丁目付近から勾配の緩みが始まる。また、浅川も吉田付近で上流域から中流域に移り、流水方向を南東から北東に進路を変えて、豊野で千曲川に合流する。

吉田地区には旧北国街道（現県道長野豊野線）が通っており、商業・宿場の町として発展。その後も、信越本線・長野電鉄の開通などにより交通網が整備され、人口が増加し、長野市近郊の住宅地に変貌した。それに合わせて、マンション建設や東急ライフの建設、北長野通り（旧ＳＢＣ通り東端）の拡幅、辰巳隧道の開通など、北長野駅を中心とした再開発が行われるようになった。現在も、マンション建設や北長野駅周辺の宅地化が進んでいる。

第２節　考古学的環境

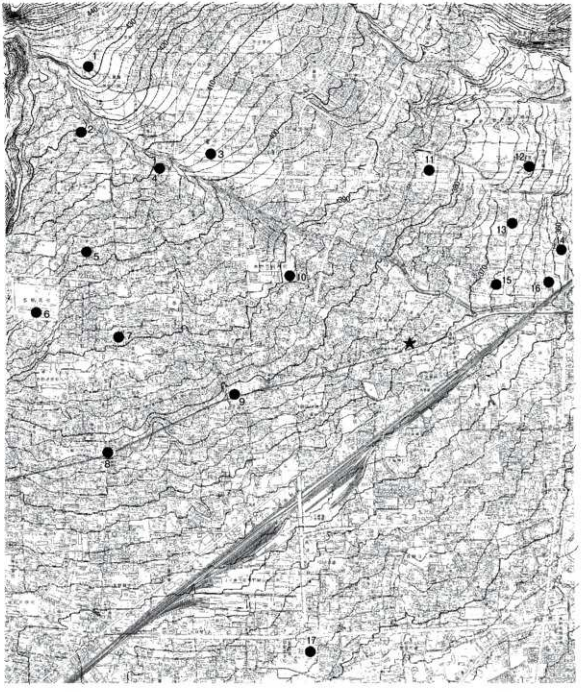
［浅川扇状地域］（図２）

浅川扇状地には旧石器時代の遺構は確認されておらず、人々の活動の痕跡を確認できるのは縄文時代前期になってからである。松ノ木田遺跡は、浅川左岸に沿う微高地に立地し、微高地先端からから上部に向かって前期・中期・後期の各段階において継続的に集落が営まれたと想定される。縄文時代前期の住居址が18軒、中期の敷石住居址などが２軒、後期の敷石住居址などが確認されている。その他の遺跡としては、浅川右岸沿いの浅川端遺跡から前期前葉の住居址１軒、土坑１基が検出されている。後述するが、吉田地区の吉田古屋敷遺跡、吉田四ツ屋遺跡でも縄文時代中期・後期の遺構が確認されている。

弥生時代から浅川扇状地の本格的な集落域の形成が始まったと考えられる。主要な遺跡は檀田遺跡群、浅川端遺跡、本村東沖遺跡、二ツ宮遺跡、本堀遺跡などがある。二ツ宮遺跡、本堀遺跡からは中期後半の住居址・溝・土坑が検出されている。集落遺跡としては、後期を主体とする本村東沖遺跡、後期初頭の吉田式土器の標識遺跡である吉田高校グランド遺跡などが挙げられ、該期の集落形態を示す好例と言える。また、扇央部付近にあたる三輪遺跡や吉田地区の各遺跡内には、中期から後期にかけての住居址がまばらに存在している。このことから、扇央部は弥生時代中期から後期の集落域のはずれ、もしくは小規模な集落が展開していたと考えられる。

古墳時代の遺構は浅川扇状地の多くの遺跡で確認されているが、前期の遺構は少なく、主体となるのは中期から後期にかけての遺構で、浅川端遺跡、本村東沖遺跡、下宇木遺跡、三輪遺跡、桐原宮西遺跡、吉田地区においては古墳時代後期を主体としている。なかでも、本村東沖遺跡は大型住居址の集中・古式須恵器の大量保有・子持勾玉といった祭祀遺物の出土など、当該期の中心的集落であったことを窺わせる。また、吉田地区においても、吉田四ツ屋遺跡の墳丘墓の存在や、吉田古屋敷遺跡（Ａ－２地区地点）でみられた大型住居の存在を考えると、吉田地区にもある程度の規模を持つ集落域が形成されていた可能性が指摘できる。

奈良・平安時代にかけては、比較的継続して遺構が確認されているが、大規模な集落が展開されていたとは認



1：松ノ木田遺跡　2：湯谷古墳群　3：檜田遺跡　4：浅川端遺跡　5・6：本村東沖遺跡　7：下宇木遺跡
8：三輪遺跡　9：桐原宮西遺跡　10：吉田高校グランド遺跡　11：稲添遺跡　12：柳田遺跡　13：本堀遺跡
14：二ツ宮遺跡　15：樋爪遺跡　16：権現堂遺跡　17：平林東沖遺跡　星印：吉田古屋敷遺跡（本調査地点）

図２　調査地周辺遺跡地図（等高線：大正15年測量　昭和27年修正）（１：20,000）

められない。吉田地区でも奈良時代以降の遺構や遺物の出土は見られるが、相対的な検出量は少ない。扇端部の平林東沖遺跡では、該期の竪穴住居・掘立柱建物跡に加えて、ウシ埋納土坑や卜骨が出土したことから、祭祀的性格を含んだ遺跡であるとみられている。また、浅川左岸の稲添遺跡からは瓦塔が出土し、さらに北に位置する牟礼バイパスＣ・Ｄ地点出土の瓦類や、駒沢新町遺跡出土の懸仏鋳型などは、浅川扇状地の古代仏教文化を考える上で重要な遺物である。

［吉田地区］（図３）

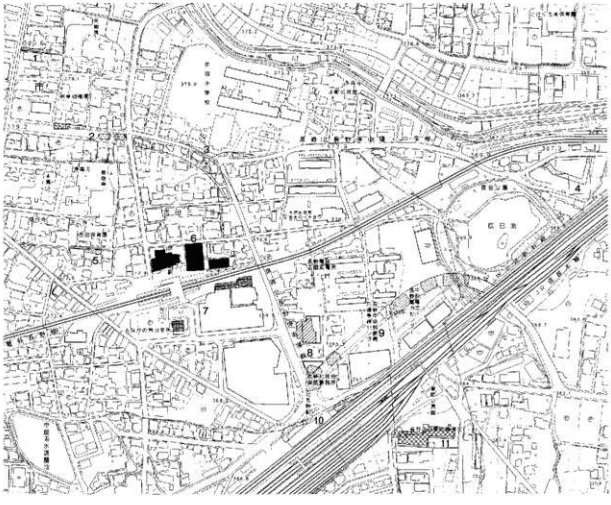
吉田地区においては本調査区を含め、計11ヶ所で発掘調査が行われている。以下、その概要について述べる。

１　吉田町東遺跡―宅地造成地点―

平成６年度に約200㎡の発掘調査を実施。弥生時代後期住居址２軒、同後期末から古墳時代初頭の大溝址２条、平安時代の住居址２軒を確認した。２条の大溝は同一遺構と考えられ、一辺14mの方形区画を呈するものと思われる。検出面や撹乱層から縄文時代中期の土器片が多量に出土しており、該期の遺構の存在が推測されている。

２　吉田町東遺跡―北長野通り地点―

平成６年度に約600㎡の発掘調査を実施。Ａ～Ｄ区の調査区を設定している。住居址は弥生時代後期１軒、奈良時代３軒を確認。この他に溝址、土坑、浅川の旧流路と思われる河川跡も確認している。奈良時代の住居址で確認されたカマドは、住居廃絶時に破壊行動が行われたものと思われ、構築石材が散乱していた。また、付近からは長胴甕が伏せられた状態で出土している。



１：吉田町東遺跡（宅地造成地点）　２・３：吉田町東遺跡（北長野通り・北長野（停）中保線地点）　４辰見池遺跡
５～９：吉田古屋敷遺跡（ドリームコートセブン新築工事地点・Ａ－２地区再開発地点・Ｂ－１地区再開発地点・ポレスターステーションシティ建設地点・市道吉田朝陽線地点）　10：浅川遺跡群（新幹線地点）　11：吉田四ツ屋遺跡

図３　吉田地区発掘調査地点位置図（１：5,000）

3　吉田町東遺跡―北長野通り・北長野（停）中俣線地点―

平成14～16年度にかけて約1,150㎡の発掘調査を実施。北長野通り地点は平成14・15年度にＡ～Ｊ区の10区画を、北長野（停）中俣線地点は平成15・16年度にⅢ－Ａ～Ｃ区の３区画を設定し発掘調査を行った。住居址は弥生時代中期３軒、同後期３軒、同時期不明１軒、古墳時代後期10軒、奈良時代６軒、平安時代22軒を確認。この他に平安期の掘立柱建物跡１棟、井戸・土抗４基を確認している。調査から、弥生時代後期には集落が一端途絶え、古墳時代後期になって再び集落が形成され、平安時代まで続いていくことが見て取れる。また、カマドを検出した住居からは、古墳時代の一部を除いて住居廃棄とカマド破壊行動の連動性が想定されている。

4　辰巳池遺跡―アルピコ建設㈱吉田宅地造成地点―

平成15年度に約500㎡の発掘調査を実施。住居址は古墳時代前期１軒、奈良時代２軒、平安時代７軒の計10軒、土坑は弥生時代中期１基、平安時代２基の計３基、溝址は平安時代のものを４条確認した。これらの他に小穴を検出した。また、縄文時代中期後半の土器も出土している。遺跡の性格としては浅川縁辺の小集落跡と考えられる。

5　吉田古屋敷遺跡―ドリームコート新築工事地点―

平成18年度に約130㎡の発掘調査を実施。古墳時代後期の住居址を３軒、性格不明遺構を１基と小穴群を確認した。狭い調査区ながらも古墳時代後期の住居址が確認されたことは、吉田地区西方の居住域の広がりを検討する上で重要である。

7　吉田古屋敷遺跡―北長野駅前Ｂ－１地区市街地再開発事業地点―

平成７年度に約750㎡の発掘調査を実施。Ａ・Ｂの２区画を設定。縄文時代後期前葉敷石住居址１軒・同中葉集石土坑１基・同時期不明の溝址２条、弥生時代中期住居址２軒・同中期環状溝址１基、同後期住居址１軒と木棺墓１基、古墳時代後期住居址５軒、奈良時代住居址１軒、中世溝址などを確認した。特記遺物として、奈良時代の住居址から銅製丸鞆が出土している。

8　吉田古屋敷遺跡―ボレスターステーションシティ北長野建設地点―

平成15年度に約200㎡の発掘調査を実施。調査地は全体的に撹乱が見られたが、弥生時代中期の住居址３軒・土坑１基、平安時代の合口甕棺墓を含む埋葬土坑２基を確認した。弥生時代中期の土坑は甕が正位の状態で置かれ、別個体の土器を蓋にしているものであったが、性格は不明である。平安時代の甕棺墓からは小児の歯が出土している。この他に縄文時代後期の土器が出土している。

9　吉田古屋敷遺跡―ＪＲ吉田東町踏切除去（市道吉田朝陽線）事業地点―

平成７年度から11年度にかけて約2,400㎡の発掘調査を実施。年度ごとにＡ～Ｆ区と区分けされており、縄文時代中期の住居址２軒・土坑10基・溝址１条、後期の敷石住居址（柄鏡式敷石住居址とみられている）１軒・土坑９基を確認。弥生時代の遺構は中期の住居址３軒、後期の住居址５軒・木棺墓１基・土器棺墓１基・土坑10基・大溝１条を確認した。木棺墓からはガラス臼玉・小玉、水晶丸玉が出土している。古墳時代の遺構は、前期とみられる溝址（環濠？）１条・性格不明溝址（方形周溝墓？）１基・土坑１基が確認された。平安時代以降の遺構や遺物は確認されたが、住居址などの居住遺構は確認されなかった。その中でも１基の土抗墓が確認され、仰臥屈

葬状態の埋葬人骨を検出している。

10　浅川扇状地遺跡群―北陸新幹線建設地点―

平成５年度に財長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。ＪＲ北長野駅周辺（W11・12区）からは縄文時代中期後半の加曽利Ｅ系の埋甕が数個検出され、屋外埋葬が想定されている。他にも弥生時代後期の合口壺棺墓が出土している。

11　吉田四ツ屋遺跡―グランドハイツ北長野開発事業地点―

平成７年度に約1,300㎡の発掘調査を実施。縄文時代後期の住居址２軒、弥生時代中期の住居址４軒・同後期の住居址２軒・土器棺墓１基、古墳時代前期の住居址２軒・墳丘墓２基、平安時代の住居址６軒・溝址５条の他多くの土坑や小穴を確認した。土器棺墓からはガラス小玉・管玉が出土している。墳丘墓（ＳＺ１）は前方後方形の周溝が巡るものと想定され、周溝の北側からは土器がまとまって出土している。もう一つの墳丘墓（ＳＺ２）からは、壺形埴輪と想定される口縁部分の破片が出土している。

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査概要

今回の調査は、北長野駅前Ａ－２地区市街地再開発事業のマンション建設に伴う発掘調査であったが、旧建物の店舗・工場、駐車場、民家の解体が重なっていたため、全面発掘はできず、発掘区を三つ（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区）にわけて調査をすることになった（図４）。Ⅰ区とⅡ区がマンション本体部分にあたり、Ⅲ区はマンションに付随する立体駐車場に相当する部分である。発掘調査の実施対象面積は2,500㎡以上であったが、建物基礎などの関係から実質的な調査面積は約1,720㎡であった。確認された遺構の総数は、竪穴式住居址43軒（弥生時代９軒・古墳時代29軒・古代５軒）、土坑12基、溝址13条、性格不明遺構９基であった。以下、調査区ごとに概略を述べる。

［Ⅰ区］（図５）

平成18年度11月24日から同年度１月15日まで調査が行われた。既存建物の解体が平行したため２回に分けて表土剥ぎを実施。調査面積は約600㎡である。確認された遺構は、住居址21軒（弥生時代６軒・古墳時代12軒・古代３軒）、土坑９基、溝址３条、性格不明遺構５基、多数の小穴であった。調査区の中央は、昭和初期に掘削された水路の跡によって遺構が破壊され、調査区の南半分はその水路の影響から土壌のグライ化が著しく、遺構の確認には特に時間を要した。

住居址の大半は古墳時代に属するものであり、カマドが良好に残っている住居が多数を占めた。ＳＢ７のカマド内からは、潰れた甕の口縁部に坏が蓋のようにして設置されている例も見受けられた。弥生時代の住居では、ＳＢ３の壁溝から石器の剥片が大量に出土し、石鏃の製品・未製品も出土している。このことから、ＳＢ３の住居内で石器が製作されていた可能性が指摘される。Ⅰ区で特記すべきは、ＳＸ３（３号性格不明遺構）の底面から縄文時代後期に属するとみられる翡翠製の垂飾が１点出土した点である。長野市内で縄文時代の所産と考えられる翡翠製品の出土はさほど多くなく、周辺地域では長野市若穂、宮崎遺跡の５号トレンチから出土した縄文時代晩期の翡翠製垂玉（長野市教育委員会1988）等、数例に限られる。

［Ⅱ区］（図６）

平成18年度３月９日から平成19年度４月５日まで調査が行われた。Ⅱ区の北側には建物があったため試掘を行った結果、遺構が破壊されていることが判明。また、Ⅰ区の水路跡が西側に延び、Ⅱ区の南側を破壊していると判断された。このため、調査規模を縮小し、調査面積は720㎡となった。こちらもⅠ区と同様に、工事との兼ね合いから２回に分けて表土剥ぎを実施。調査区の各所に近現代の廃棄坑や、性格不明の撹乱坑などが点在していた。確認された遺構は、住居址９軒（弥生時代１軒・古墳時代７軒・古代１軒）、土坑２基、溝址５条、性格不明遺構４基であった。三区画の中で、最も遺構の数が少ない理由としては、調査区を横切る旧河川（浅川の支流の可能性もある）によって居住域を形成することができなかったためと考えられる。また、住居址９軒のうち、弥生時代の住居はわずか１軒のみであることから、Ⅱ区が弥生時代中期におけるの居住域の端部に相当するとも考えられる。

Ⅱ区のなかでも一際目を引くのがＳＢ25である。住居の北西壁際に整然と並べられた土器類・玉類・鉄製品の出土は、あきらかに住居内で祭事をおこなった形跡とみられるからである。このように、規則性をもって土器を

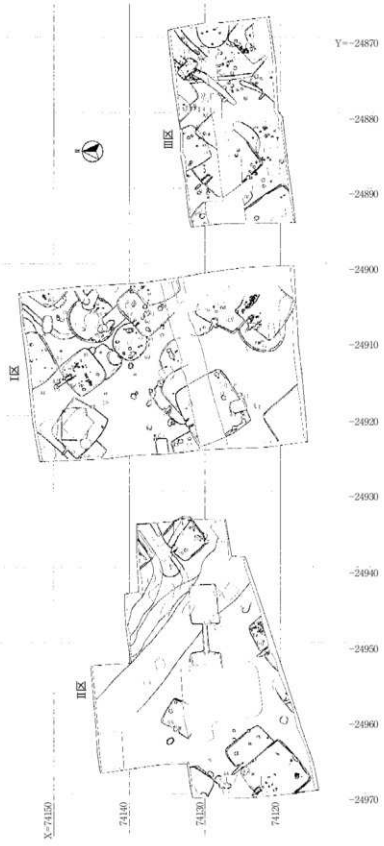
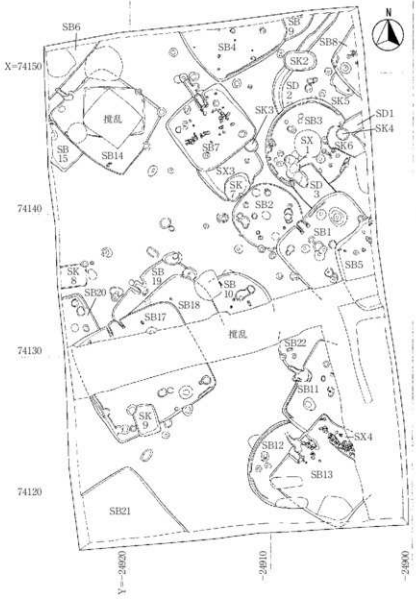


図4　調査区全体図（1：500）

調査地周辺空撮写真（西から）

Ⅰ区完掘状態（南東から）



Ⅰ区

図５　調査区平面図（１区）（１：300）

配列する事例は、長野市では小鳥・柳原遺跡群水内坐一元神社遺跡―鞍山二小鳥団地二期工事地点―Ｃ区ＳＸ１（性格不明遺構）と、篠ノ井遺跡群―主要地方道長野上田線　塩崎バイパス　国庫補助事業地点―ＸⅡ区ＳＺ003（篠ノ井・高畑３号墳）の周溝内等で確認されている。本調査区のＳＢ25を含めたこれらの例は、いずれも遺構の性格は異なるが、何らかの意図をもって土器を規則的に並べるという行為が、善光寺平の一帯で広がりをみせていたことを示す資料であることには間違いない。

［Ⅲ区］（図６）

平成19年度５月28日から同年度７月11日まで発掘調査が行われた。Ⅰ・Ⅱ区同様に、工事との兼ね合いから二回に分けて表土剥ぎを実施。調査区の中央西側には、以前建っていた工場の基礎と思われるコンクリートブロックがあり、遺構を破壊し調査区を南北に分断する形になっていた。調査面積は400㎡と三区画の中では一番小さいが、遺構の密集度は高い。確認された遺構は、住居址13軒（弥生時代２軒・古墳時代10軒・古代１軒）、土坑１基、溝址４条、多数の小穴であった。こちらでも古墳時代の住居が主体で、弥生時代、奈良・平安時代の住居址はわずかである。中でもＳＢ33は一辺約８ｍの大型住居で、カマド周りに残る多量の土器と、本調査区内で唯一遺存しているトンネル状の煙道は良好な資料である。また、２軒しかない弥生時代中期の住居のうち、ＳＢ37の床面から小型の壺がほぼ完全な状態で出土している。

Ⅱ区東側完掘状態（南東から）

Ⅱ区西側完掘状態（南東から）

Ⅲ区南西側完掘状態（東から）

Ⅲ区東側および北西側完掘状態（東から）

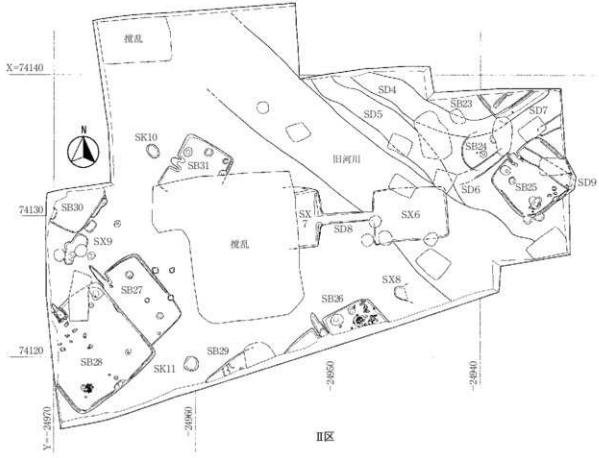


図6　調査区平面図（Ⅱ区・Ⅲ区）（1：300）

第２節　遺構と遺物

１．弥生時代の遺構と遺物

Ⅰ区～Ⅲ区を通して、弥生時代に属すると判断された遺構は、竪穴住居址が９軒、土坑が２基である。竪穴住居址は、住居の一部のみが調査されたものも含めて、いずれも平面形が正円形に近いものと想定される。住居の規模は、直径４～５ｍ程のものがほとんどであるが、直径３ｍ未満に復元されるものも存在する。床面は黄色土を用いた貼り床が施されており、複数の炉の址が確認されたものもある。出土した遺物の様相から、これらはいずれも弥生時代中期、栗林式期の所産と判断される。なお、ＳＢ３は石器製作の痕跡が認められ、特筆される。

①竪穴住居

２号住居（ＳＢ２）

【遺構】Ⅰ区のほぼ中央に位置し、直径3.6～4.0mの円形を呈する住居である。北西の一部と南東側はそれぞれ後世のＳＫ７とＳＢ１によって破壊されている。

遺構検出面から床面までの深さは、12cmほどの浅い掘り込みで、床面は全体的に堅く締まった黄色の貼床であった。床面からは明確な炉跡とみられる焼土は認められず、住居中央部のｐｉｔ周囲に、わずかに炭の広がりがみられるだけだった。他の同時期の住居址に比べ、規模が小型で掘り込みも浅いことから、居住施設というよりは短期間の仮小屋的な建物であった可能性も考えられる。なお、遺物の出土は僅少で、詳細な年代観を述べることは困難であるが、ＳＢ３と切り合うことなくほぼ隣接して位置していることから、同時期に営まれた可能性もある。その場合、ＳＢ３に付随する施設としての機能を有していた可能性も想定される。

【遺物】出土遺物の中で個体となったものはなく、破片のみであった。１・２は壺の破片である。１はヘラ描横線文の下部に、ヘラ描山形文が施されている。２はヘラ描横線文の上下に細かいＬＲ縄文が施されている。３は甕の胴部片で、縦方向の櫛描羽状文を施した後、羽状文の上端部付近に連続する横方向の刻み（刺突文）が施されている。

土器小片のみの出土であり、本遺構の明確な時期を決定する良好な資料とは言い難いが、本遺構が円形プランであることと、土器片の様相から、本遺構は弥生時代中期・栗林式期の古段階～中段階の所産である可能性を指摘することができる。

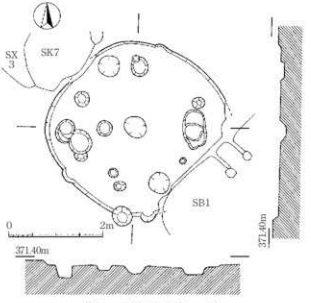


図７　Ⅰ区ＳＢ２（１：80）

ＳＢ２完掘状態（南東から）

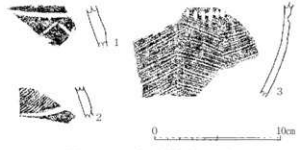


図８　ＳＢ２出土遺物（１：３）

3号住居（ＳＢ３）

【遺構】Ⅰ区北東に位置し、直径4.8～5.0mの円形を呈する住居である。住居の東側と南側は後世の溝や土坑、性格不明の掘り込みなどによって破壊を受け、住居中央部も昭和初期に掘削されたとされる石組みの井戸によって破壊されていた。

遺構検出面から床面までの深さは約５cm～30cmと高低差があるが、地形自体が北に向かって上っているため、このような差が生じたものと考えられる。床面は全体的に硬い黄色の貼床で、炉とみられる焼土痕が５ヶ所半円形に点在していた。住居北東の床面直上からは、甕（図10－１）が１点潰れた状態で出土している。

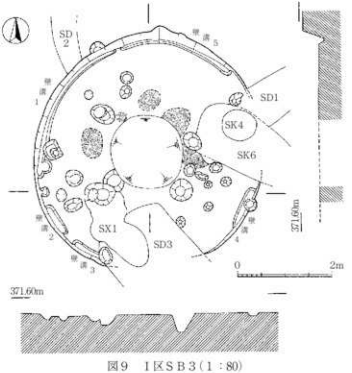


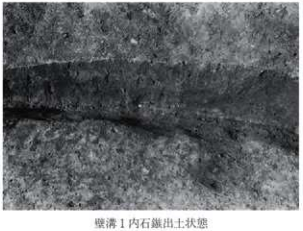
図９　Ⅰ区ＳＢ３（１：80）

なお、住居南西の壁溝内からは大量の石器剥片類（p.133表９参照）と共に、石鏃の未製品（図11－２・３）が数点出土している。また、北西の壁溝内からも石鏃（同－１）が１点出土した。これらの剥片類と石鏃は同一石材（流紋岩）によるものであり、剥片類の中には石核と接合するものも認められた（口絵写真参照）。このような様相から、この住居址においては石鏃などの石器類が製作されていたものと考えられる。

【遺物】遺物には壺・甕・紡錘車・石器がみられるが、壺は個体になるものがなく破片のみであった。１の甕は唯一個体として検出できたものである。口縁部は面取りされ、縄文が施文されている。胴部上半には横羽状文がみられ、下半はミガキが施されているようだが、摩耗の

ＳＢ３完掘状態（南東から）

ＳＢ３土器出土状態


壁溝１内石鏃出土状態

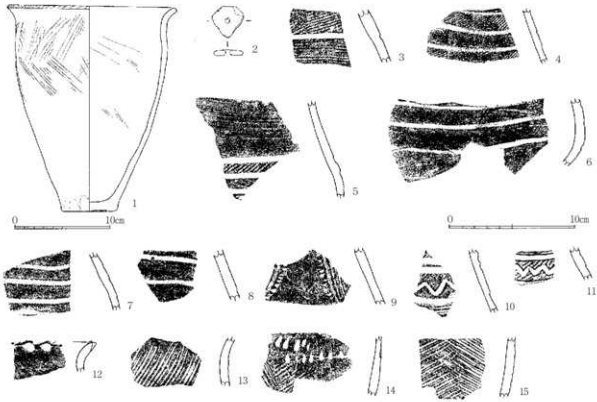


図10　ＳＢ３出土遺物（１：４・１：３）

ため不明。底部には指ナデが見られる。内面はハケ調整と思われるが、こちらも摩耗のため詳細は不明である。

２は土製の紡錘車で、土器片からの転用とみられる。現状は台形を呈するが、元々は円形であったものと推測される。

３～11は壺の頸部から胴部の破片である。３はヘラ描横線文の上部に縄文が施され、下部にはハケメがみられる。４は地文にＬＲの縄文を施した後、３条のヘラ描横線文で区画し、区画内の一部は縄文を磨り消している。５は３条のヘラ描横線文を施した後、内部に縄文を充填する。６は胴部片で、３条のヘラ描横線文および赤彩が施される。７はヘラ描横線文のみが認められる。８は２条のヘラ描横線と、赤彩が施される。９は垂下文の一部が確認できる。10・11は頸部片で、２条のヘラ描横線と山形文が施文されている。

12～15は甕の破片である。12は口縁部で、口唇部に縄文を施文後、ヘラ状工具による刻みで波状を呈している。13には横方向の櫛描羽状文が施される。14は櫛描羽状文ののち連続する刺突（刻み）が施される。刺突は始点と終点の両方が認められる。15も同様に縦方向の櫛描羽状文が施され、内面は丁寧に磨かれている。

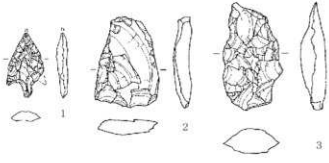


図11　ＳＢ３出土石鏃・石鏃未製品（流紋岩製）（２：３）

ＳＢ３出土石鏃・石鏃未製品（流紋岩製）

出土した石器は流紋岩製の石鏃とその未製品である。１は有茎鏃で、返しの一部が欠損しているが、遺存状態

は良好である。2・3は石鏃の未製品と考えられる。なお、この他にも、石鏃や石鏃の未製品が計3点（図138－8・14・18）出土しているが、出土した多量の剥片とは石材が異なる。したがって、剥片と同じ流紋岩製のものが、本住居址において製作された可能性が高いと判断される。

以上より、本住居址は弥生時代中期、栗林式期の古～中段階に属するものと考えられる。

9号住居（ＳＢ9）

【遺構】Ⅰ区北壁際に位置しているが、大部分は調査区外である。西半分はＳＢ４によって破壊されているが、本来の住居の形態は円形であると想定される。

遺構検出面から床面までは約15cmで、全体的に堅く締まった黄色の貼床が確認できた。床面からは調査区壁際にｐｉｔを検出したが、遺物の出土は僅少であった。なお、ＳＢ４との重複部分にはわずかに炉跡とみられる焼土が確認された。

【遺物】出土遺物は紡錘車・壺（破片）・甕（破片）であった。1は土製の紡錘車で、2・3は壺の破片である。2はヘラ描で重三角文を施し、3は地文の縄文施文後に、2条のヘラ描横線文と山形文を配する。4は甕の口縁部で、口唇部に縄文が施文される。5は甕の胴部片で、櫛描羽状文の後に刺突文が施される。

本住居址は弥生時代中期栗林式期の中段階前後の所産と考えられる。

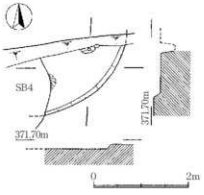


図12　Ⅰ区ＳＢ９（1：80）

ＳＢ９完掘状態（南から）

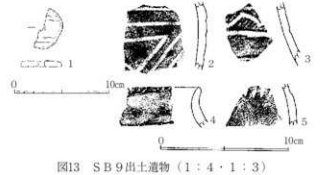


図13　ＳＢ９出土遺物（1：4・1：3）

10号住居（ＳＢ10）

【遺構】Ⅰ区のほぼ中央に位置し、直径約4.7mと想定される円形の住居。水路により破壊されていたが、一部水路の底面に変色した貼床が残っていた。

遺構検出面から床面までは約35cmで、全面で硬く締まった黄色の貼床を検出した。床面には不整形のｐｉｔが確認できたが、これが柱穴になり得るかは不明である。また、炉とみられる焼土痕も確認できなかった。水路際の床面直上からは、胴部上半～下半までの壺（図15－1）と、底部が穿孔された壺ないし甕（同－4）が、潰れた状態で出土している。

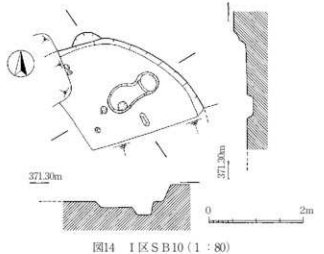


図14　Ⅰ区ＳＢ10（1：80）

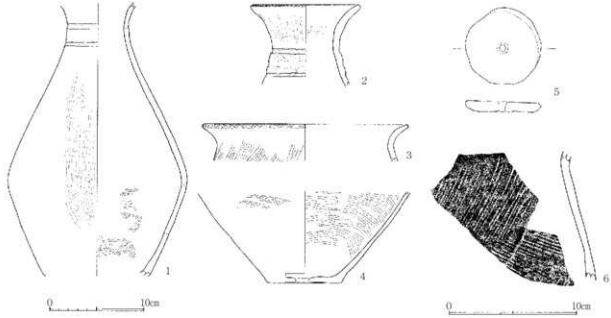


図15　ＳＢ10出土遺物（１：４・１：３）

【遺物】１の壺は床面直上から出土したもので、口縁部と底部が欠損している。頸部にはヘラ描きによる２条の横線が施されるが、この他に外面には装飾的な文様は認められない。全体的にタテヘラミガキが施され、一部に赤彩痕も確認できるが、範囲は不明である。内面はハケ調整の後にナデが施される。２は壺の口縁部から頸部にかけてで、頸部には貼り付け凸帯および、３条のヘラ描横線文がみられる。口唇部には縄文が施文される。外面は、口縁部にヨコハケ→タテヘラミガキの順で調整され、頸部はタテハケ→ヨコヘラミガキの順で調整されている。内面はヨコヘラミガキによる調整である。

ＳＢ10完掘状態（南東から）

ＳＢ10遺物出土状態

３は甕の口縁部で、胴部から底部は欠損している。口唇部には縄文と工具による押圧痕が、外面には櫛描の斜行線文が施される。内面はハケ→ヘラミガキの調整を受ける。４は壺、もしくは甕の底部とみられるが、器種ははっきりしない。底部には焼成後の穿孔が認められる。近隣の例としては、同じ吉田古屋敷遺跡（ボレスターステーションシティ地点）のＳＢ２とＳＫ２より、焼成後底部穿孔の鉢と甕が出土している。５は土製の紡錘車で、壺の底部片を転用しているとみられる。底部外面は無文で、直径約８cmと大きめである。６は甕の胴部片で、櫛描羽状文が施されている。

以上より、本住居址は弥生時代中期、栗林式期の新段階古相前後に属するものと考えられる。

12号住居（ＳＢ12）

【遺構】Ⅰ区南東側に位置し、直径約5.2mと想定される円形の住居である。住居の東半分はＳＢ11・13によって大きく破壊され、南側は一部撹乱坑の影響も受けている。

遺構検出面から床面までは約20cmで、全体的に硬く締まった貼床を検出し、炉とみられる焼土痕は２ヶ所で確認できた。壁際には壁溝が巡り、柱穴の一部と考えられるｐｉｔも確認された。

【遺物】１・２は本住居址から出土したが、該期の遺物ではないため、隣接するＳＢ13からの混入品とみられる。１は内黒の高坏で、内外面にミガキ調整を受ける。２は内黒の鉢で、内外面共にヨコヘラミガキが施される。

３～９は壺の破片である。３は頸部で、１条の凸帯が貼り付けられ、凸帯には縄文が施される。４は垂下文がみられる。５・７は胴部で、地文の縄文とヘラ描横線文が施される。６は、２条のヘラ描横線文の間に櫛描横線文がみられ、９は同様の施文に加えて櫛描短斜線文も施される。８は２条の横線文のみである。10・11は甕の胴部片で櫛描羽状文が施される。11は刺突文も加わり、刺突内面には布の痕跡もみられる。

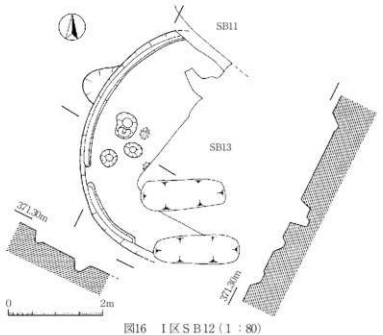


図16　Ⅰ区ＳＢ12（1：80）

ＳＢ12完掘状態（南東から）

以上より、本住居址は弥生時代中期、栗林式期の中段階前後に属する可能性が高い。

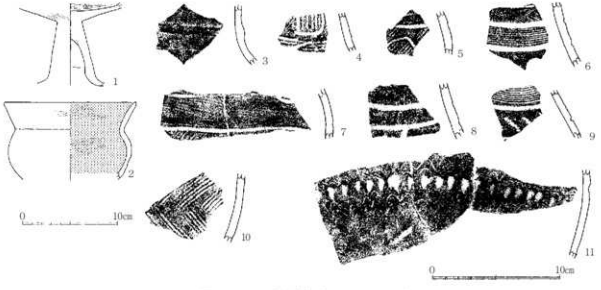


図17　ＳＢ12出土遺物（1：4・1：3）

22号住居（ＳＢ22）

【遺構】Ⅰ区中央東に位置する、円形プランの住居址と想定される。しかし、その大半は水路とＳＢ11によって破壊されているため、正確な規模は不明である。

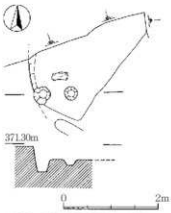


図18　Ⅰ区ＳＢ22（1：80）

ＳＢ22完掘状態（北から）

遺構検出面から床面までは約25㎝で、黄色の硬く締まった貼床を検出した。ただし、床面から目立った土器の出土は認められず、２基のｐｉｔと床面直上から一個の礫が出土したに留まる。

【遺物】出土遺物で個体になるものはみられなかった。１は土製の紡錘車で、表面にヘラ描連弧文がみられる。２～７は壺の破片である。２は２条のヘラ描横線文と、その上下に櫛描横線文が施されている。３は、地文にＬＲの縄文を施した後、ヘラ描横線文を施文し、横線間の縄文を磨り消している。４は地文の縄文および１条の横線文と、ヘラ描の装飾がみられる。５は胴部片で、ヘラ描の横線文と櫛描文・縄文が複合して施文されている。６は肩部片で、垂下文が施される。７はヘラ描の装飾と縄文が施されるが、全体的な文様帯は掴めない。

以上より、本住居址は弥生時代中期、栗林式期の中段階前後に属するものと考えられる。

図19　ＳＢ22出土遺物（1：4・1：3）

24号住居（ＳＢ24）

【遺構】Ⅱ区北東部に位置する。直径約３ｍの円形を呈する竪穴式住居と想定されるが、北側はＳＤ４、南側はＳＤ６、東側は撹乱坑によってそれぞれ破壊されており、詳しい全体像を把握することはできなかった。検出面から床面までは約８㎝で、床面は鮮やかな黄色土による貼り床が施されていた。住居中央部やや南寄りと北東側に、それぞれ直径50㎝程の小穴が認められたが、この他に明確なｐｉｔは確認されなかった。本調査区内における他の弥生時代中期の住居址に比べて、床面積がひとまわり小型であることからも、主要な柱材以外は床面に直接柱を立てるという、比較的簡易な構造であった可能性が指摘される。なお、住居址中央部やや東寄り付近から

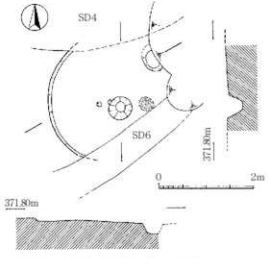


図20　Ⅱ区ＳＢ24（１：80）

ＳＢ24完掘状態（南から）

は、炉の痕跡と考えられる焼土が確認されている。

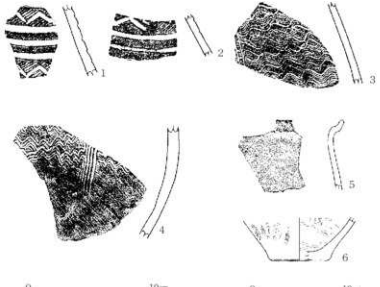


図21　ＳＢ24出土遺物（１：３・１：４）

【遺物】住居床面からまとまった遺物の出土は認められなかったが、床面付近あるいは覆土中より、住居に伴う可能性のある破片資料が数点出土している。

１・２は壺の肩部～胴部の破片である。

１は、３条のヘラ描横線文を挟んでヘラ描山形文が施文されている。山形文の地文には細かいＬＲの縄文が施されているが、ヘラ描横線文の間には地文の縄文は認められない。

２は、２条のヘラ描横線文の上部に、ヘラ描山形文の一部が確認される。１同様、山形文の地文にはわずかにＬＲの縄文が認められるが、横線文付近は地文の縄文が磨り消されている。

３・４は甕の胴部破片である。

３は、甕の胴部上半部に相当し、全体に櫛描波状文が施されている。櫛は７本一組で、波状文ののち縦方向の櫛描直線文が施されている。４は甕の胴部中位～下位に相当する。上半部には、櫛描波状文が施され、その後縦位の櫛描直線文が施されている。櫛は５本一組である。

５は甕の口縁部～胴上部である。口縁部は受け口状に外方に開き、受け口部の外面にはＬＲの細かい縄文が施されている。胴部には、受け口部の直下付近より丁寧な櫛描波状文が施される。櫛の本数は６本である。

６は、甕の底部である。外面は縦位のハケメ、のち縦位のミガキ調整が施され、内面はヨコハケののちヨコ方向のミガキ調整が施されている。櫛描文等は認められない。

以上の遺物は、弥生時代中期、栗林式の新段階古相～新相の様相を呈しており、本遺構についても概ねその時期の所産である可能性を指摘できる。

37号住居（ＳＢ37）

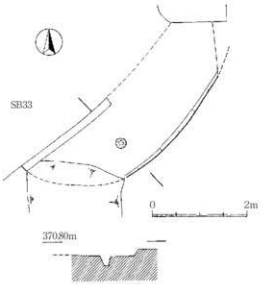


図22　Ⅲ区ＳＢ37（１：80）

【遺構】Ⅱ区ＳＢ33の南側と重複し、南東側の一部のみ検出された。直径約5.2mの円形を呈するものと想定され、検出面から床面までは15cm程であった。床面は鮮やかな黄色を呈し、他の弥生時代中期の住居と様相を一にする。ただし、調査範囲の床面からは、炉の痕跡は確認されず、柱穴も１ヶ所のみで壁溝も確認されていない。

床面付近からは、住居に直接伴うと考えられる遺物が数点出土している。中でも、南側壁面沿いからは、弥生時代中期栗林式の小型の壺（図23－１）が１点、ほぼ完形のまま倒れた状態で出土している。また、この壺の底部付近からは、長方形状の黒曜石の剥片が１点出土した。遺物使用時期の同時性を裏付ける証拠は無いが、何らかの理由で壺と共に壁際の床面に置かれた可能性も指摘できる。

この壺の北西側、80cm程離れた床面からは、同じく栗林式の壺の頸部部分（同－２）が１点出土しており、さらにその90cm程北側からは、栗林式の鉢（同－４）が１個体分、つぶれた状態で出土している。

ＳＢ37遺物出土状態（南から）

ＳＢ37遺物出土状態（西から）

ＳＢ37完掘状態（南から）

ＳＢ37遺物出土状態（北東から）

ＳＢ37遺物出土状態（小型壺）

ＳＢ37遺物出土状態（壺の頭部）

ＳＢ37遺物出土状態（鉢）

図23　ＳＢ37出土遺物（１：４）

【遺物】図示し得た遺物は４点である。

１は完形の壺である。口縁部径7.3cm、器高15.2cmの小型の壺で、最大径は胴部下半に位置する。口縁端部は面取りされ、縄文が施されているようであるが、摩耗が著しく不明瞭である。頸部は内側より押し出され凸帯を形成し、凸帯の上下を２条のヘラ描横線文で区画している。凸帯上にはＬＲの縄文が充填される。肩部以下は全面的に縦方向のミガキ調整が施されているようであるが、こちらも摩耗が著しい。

２は壺の頸部である。口縁端部は破損し、遺存していなかった。１に比べると大型で、一般的な大きさの壺といえる。６本のヘラ描横線文で区画され、最上段の区画は粘土を貼り付けることによって凸帯を形成している。横線文で区画された内部は、いずれも地文にＬＲの縄文が施されており、縄文が残る区画の上下は、縄文を磨り消した後、縦方向および斜め方向のミガキ調整を施している。

３は甕の口縁部片である。口縁端部はユビオサエにより、波状を呈する。頸部には櫛描横線文が施されている。

４は鉢である。口縁部径13.7cm、底径6.0cm、器高6.5cmで、底部は平底である。底部から上方に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がり、上方で大きく内傾・内湾する。口縁部付近には４方向に耳形の浮文が施されている。口縁端部は面取りされ、断面は四角形に収まるが、口唇部に縄文等は施されていない。内面および底部を除く外面に赤色塗彩の痕跡が確認されるが、全体に摩耗が著しく、具体的な調整および調整の単位を確認することはできなかった。

以上の遺物の様相から、本住居址は弥生時代中期、栗林式期の新段階古相に位置付けられよう。

42号住居（ＳＢ42）

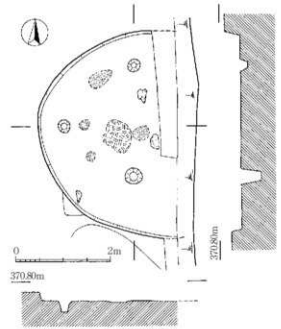


図24　Ⅲ区ＳＢ42（１：80）

【遺構】Ⅲ区の東端、ほぼ中央部付近に位置する。直径約4.2～4.5mの円形を呈するものと想定されるが、住居の東半分は発掘区外のため、詳細は不明である。

遺構検出面から床面までは30cm程で、住居の床面は鮮やかな黄色を呈していた。住居の中央部には、焼土と炭化物の溜まった窪みが存在し、それを取り囲むように３本の主柱穴と、３ヶ所の焼土（炉跡）が確認された。このように、一つの住居内で複数の炉跡が円形状に配列する例は、今回の調査においてもＳＢ３等で確認されている。弥生時代中期における、住居内の空間利用形態を示す一例といえよう。

住居内からは、中央部付近より複数の礫（川原石）も出土している。この他に、床面からまとまった遺物の出土は認められなかった。

ＳＢ42遺物出土状態（南西から）

ＳＢ42遺物出土状態（北から）

ＳＢ42遺物出土状態（壺頸部）

ＳＢ42完掘状態（南東から）

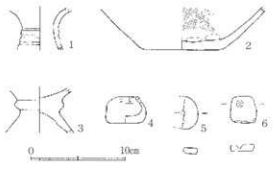


図25　ＳＢ42出土遺物（１：４）

【遺物】図示し得た遺物は６点である。

１は壺の頸部である。３条のヘラ描横線文が施され、２～３段の凸帯が形成される。上段の凸帯上には縄文が充填されている。２は壺の底部である。外面にはミガキ調整が、また内面にはハケ調整が施されるが、いずれも摩滅著しい。内面底部には指頭圧痕が残る。３は高坏の坏底部～脚上部である。外面および坏部内面は赤色塗彩される。坏部と脚部の接合部付近は、凸帯状に突出する。４は、手捏ね土器である。口縁部付近に２個一対の小穴が２方向で認められる。内外面共に赤彩の痕跡は認められない。５は有孔円板の破片である。直径3.5cm程に復元される。中央付近にわずかに穿孔の痕跡が確認できる。表面に文様等は認められない。６は不明土製品である。有孔円板の未製品の可能性もあるが、穿孔部は中央より縁辺部側に偏っており、孔も貫通していない。

以上の遺物の様相より、本住居址は弥生時代中期の栗林式期新段階古相頃に比定される。

②土坑

６号土坑（ＳＫ６）

【遺構】Ｉ区北東に位置する楕円形の土坑である。当初は溝と想定していたが、南東側が収束していることが判明した。長径約2.4m、短径約1.2mで、覆土上層から土器片が数点まとまって出土している。撹乱坑の断面を確認したところ、当初想定した底面よりさらに下方に本来の底面が位置していることが判明した。そのため、ＳＫ６の下層の性格を確認するトレンチ調査を行ったが、人骨などの出土はみられず、底面から自然石が出土したのみであった。

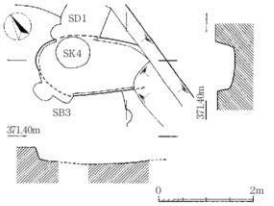


図26　Ｉ区ＳＫ６（１：80）

ＳＫ６（南西から）

ＳＫ６遺物出土状態

【遺物】出土した遺物は、壺・甕であった。１は壺の底部片で、外面調整はヨコハケ→タテヘラミガキの順に行われ、底部付近はヨコ又はナナメのヘラミガキを施している。内面はヨコハケによる調整である。２は甕で、底部を欠損している。口唇部には縄文、頸部には櫛描横線文、胴部上半は櫛描羽状文が施され、胴部下半はタテヘラミガキが施されている。内面はヨコハケとヘラミガキが施される。

3は壺の破片で、ヘラ描横線文と縄文が施される。4～7は甕の破片で、4は二組の櫛描波状文がみられる。5・6は櫛描波状文と羽状文が施される。7は摩滅により外面調整は不明瞭である。

以上より、本遺構は弥生時代中期、栗林式期新段階古相に属するものと考えられる。

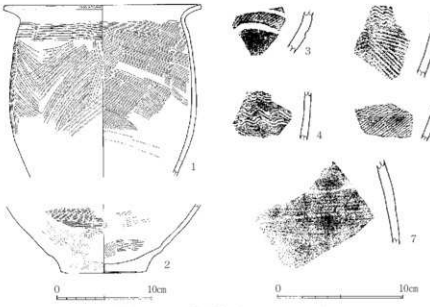


図27　ＳＫ６出土遺物（１：４・１：３）

12号土坑（ＳＫ12）

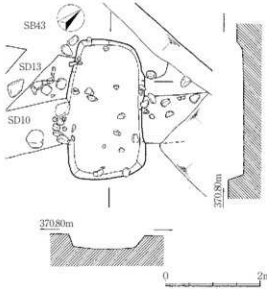


図28　Ⅲ区ＳＫ12（１：80）

ＳＫ12（南東から）

【遺構】Ⅲ区北東側、ＳＤ10およびＳＢ43と重複している。約2.9m×1.7mの隅丸長方形状を呈する。検出面から遺構底面までは30cm程であった。

長軸を主軸とすると、主軸は真北から西へ約48°傾いている。

その規模と平面形から、土坑墓の可能性も想定して調査を進めたが、人骨や、その他墓の様相を示す遺物は一切認められなかった。なお、この土坑内および周辺からは、径10～20cmほどの礫が多数出土している。

【遺物】図化し得た遺物は４点である。

１は壺の底部である。小片のため、詳細は不明。２は壺の肩部片である。３条のヘラ描横線文が認められる。３は甕の底部である。内外面ともに摩耗しており、具体的な調整等は不明である。４は甕の胴部片である。横位の櫛描羽状文の、下半部のみ確認できる。

以上の遺物の様相は、中期栗林期に比定される。この他に出土した土器小片も、栗林式土器が主体を占めることから、本遺構は弥生時代中期、栗林式期の所産と考えられる。

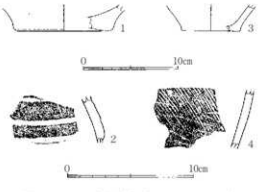


図29　ＳＫ12出土遺物（１：４・１：３）

表１　弥生時代遺構一覧表

遺構名（記号）	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記
		形態・規模	備考	重量（g）	実測数	特記	（石器・金属製品他）	（記号）
２号住居（ＳＢ２）	弥生中期	円形 直径3.6～4.0m	ＳＢ１が重複	1,096	3			ＡＹＦＡ２ ＳＢ２
３号住居（ＳＢ３）	弥生中期	円形 直径4.8～5.0m	ＳＤ１・２・３・ ＳＫ６が重複	3,555	15		流紋岩製石鏃１ 石鏃未製品２ 石器剥片多数出土	ＡＹＦＡ２ ＳＢ３
９号住居（ＳＢ９）	弥生中期	円形 直径約4.3m	ＳＢ４が重複	780	5			ＡＹＦＡ２ ＳＢ９
10号住居（ＳＢ10）	弥生中期	円形 直径約4.7m	ＳＢ18・19が重複	4,226	6	焼成後底部穿孔土器１あり		ＡＹＦＡ２ ＳＢ10
12号住居（ＳＢ12）	弥生中期	円形 直径約5.2m	ＳＢ11・13が重複	3,830	11	ＳＢ13からの混入土器２あり		ＡＹＦＡ２ ＳＢ12
22号住居（ＳＢ22）	弥生中期	円形 直径約4.0m？	ＳＢ11が重複	1,877	7			ＡＹＦＡ２ ＳＢ22
24号住居（ＳＢ24）	弥生中期	円形 直径約2.5m	ＳＤ４・６が重複	1,790	6			ＡＹＦＡ２ ＳＢ24
37号住居（ＳＢ37）	弥生中期	円形 直径約5.2m？	ＳＢ33・38が重複	3,690	4			ＡＹＦＡ２ ＳＢ37
42号住居（ＳＢ42）	弥生中期	円形 直径約4.5m	—	10,270	6			ＡＹＦＡ２ ＳＢ42
６号土坑（ＳＫ６）	弥生中期	楕円形 長径約2.4m 短径約1.2m	—	1,090	7			ＡＹＦＡ２ ＳＫ６
12号土坑（ＳＫ12）	弥生中期	隅丸長方形 2.9×1.7m	ＳＢ43・ＳＤ10が 重複	1,740	4			ＡＹＦＡ２ ＳＫ12
合　計				33,944	74			

2．古墳時代の遺構と遺物

Ⅰ区～Ⅲ区を通して、古墳時代の遺構として確認された、あるいはその可能性が高いのは、竪穴式住居址が29軒、土坑が１基である。この内、竪穴式住居址は古墳時代中期後葉～後期前葉の時間軸に位置付けられるものが最も多く、次いで古墳時代末葉（７世紀代）に属するものも複数認められる。住居の形状は、いずれも方形が基調となっており、ほとんどの住居で北西側の壁沿いにカマドが付設されていた。いずれの住居址も主軸は真北から西へ40°前後傾いている。この傾向は、周辺地域でも認められるものであり、様相を一にしている。特筆されるのは、古墳時代後期前葉の25号住居址（ＳＢ25）内より、大量の土器が住居の３隅に並べられた状態で出土している点である。これらの土器に伴って、玉類や刀子・ミニチュア土器等も出土していることから、住居内で何らかの祭祀行為がなされた可能性が指摘される。土器の一括性が高く、該期を代表する良好な資料群といえる。

①竪穴住居

１号住居（ＳＢ１）

【遺構】Ⅰ区内東側に位置し、一辺約5.2mの隅丸方形を呈する住居と想定される。ただし、南東側及び南側はＳＢ５と昭和初期に掘削された水路によって破壊されているため、詳細は不明である。遺構検出面から床面までの深さは20cmほどで、南東側に重複するＳＢ５の床面とは35cmほどの差があり、ＳＢ１の方が床面の位置が高い。

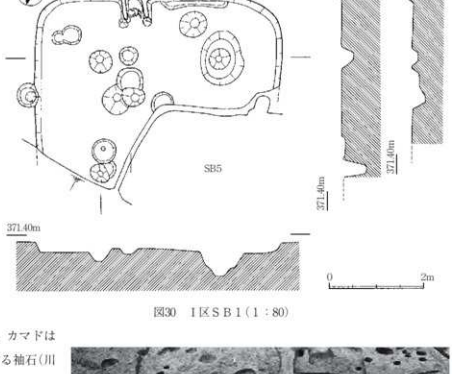


図30　Ⅰ区ＳＢ１（１：80）

北壁中央よりやや西に偏った位置にカマドが確認された。カマドは残りがよく、両袖と袖に付随する袖石（川原石）、割れて袖石から落下したとみられる天井石や、甕（図32－10）を検出した。カマド内部は両袖内側、床面が被熱によって赤褐色（橙色）に硬化していた。また、支脚には石と坏（同－２）がセットで用いられており、石の上部に坏が逆位で設置されていた。なお、カマドの煙道は確認できなかった。カマドの東袖の内側はややオーバーハングしており、使用されていた当時はカマドの形状がドーム状に湾曲していた事が想定できる。

ＳＢ１完掘状態（南東から）

住居の床面直上からは、数カ所でまとまった遺物の出土がみられた。北壁付近からは小型の鉢（図32－６）が１点、住居北東に位置する２段掘りのpitの南からは高坏（同－３）が１点、北西のpit脇からは潰れた状態の甑（同－11）が１点出土している。床面は、黄色の貼床が住居の西側ではみられたが、東側は住居北側に位置するＳＤ３の影響か、明瞭な貼床は検出できず、全体的に黒色であった。床面で確認された複数のpitのうち、住居に伴うと考えられる柱穴は北東・北西・南西の３ヶ所にみられ、その配置からＳＢ１が４本柱構成の建物であったと想定できる。南西の柱穴に関しては、覆土除去中に高坏（同－４）１点と、側面に擦痕がある扁平な砥石（図139－35）が出土している。また、カマド東側に位置するpitはやや大きめであり、位置などからして貯蔵穴などの可能性もあるが、目立った遺物の出土は認められなかった。

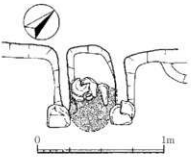


図31　ＳＢ１カマド微細図
（１：30）

【遺物】遺物は坏・高坏・鉢・壺・甕・甑が出土している。１・２は坏で、内外面共にミガキ調整を受けているが、内黒ではない。２は、カマドの支脚として使用されていたもので、内面に被熱痕と黒斑がみられ、外面にも被熱痕がみられた。１・２共に外面の稜線は明瞭ではないが、内面の稜線は明瞭で、器高の中央付近からやや上部に位置している。

ＳＢ１カマド（甕・天井石除去前）

３は黒色処理を受けた高坏で、坏部の外面は粗いヨコヘラミガキ調整、脚部外面はタテヘラミガキの調整を受けていた。脚部内面には粘土の巻き上げ痕と、接着痕がみられた。坏部の形状は、１・２の坏とよく似ている。４の高坏は柱穴から出土したもので、口縁部と裾部が欠損している。外面の調整は坏部がヨコヘラミガキ、脚部上半はタテ、下半はヨコヘラミガキであった。坏部内面は黒色処理を受け、ヘラミガキの調整を受けていた。５は高坏の脚部で、調整はナデと思われるが、全体的に不明瞭である。裾端部は折り返されて帯状に隆起する。混入品の可能性もある。

ＳＢ１カマド（天井石のみ除去後）

６は小型の鉢で、外面にハケ調整が部分的に残る。

７・８は壺で、共に底部のみである。７は内外面共にナデ調整がみられ、胴部にかけての立ち上がりが外反している。８は、外面にミガキ、内面にはヘラナデ→ハケの順で調整がみられる。こちらの胴部にかけての立ち上がりは外反せず、内湾している。

ＳＢ１カマド（甕・天井石除去後）

９・10は甕で、９の甕は底部と胴部にかけて遺存している。底部外面は横方向のケズリがみられるが、胴部は器面が粗く調整が不明瞭である。10はカマドから検出したもので、口縁部が欠損している。底部外面には縦方向のケズリがみられるが、胴部の器面は粗い。内面には板状工具によ

る調整痕がみてとれる。器形は楕円形であり長胴化の傾向がみられる。

11は甕である。胴部のラインは直線的に大きく外方に開き、逆八の字状を呈している。把手は差込式のもので、内面に円形の差し込みの痕跡が認められた。把手を差し込んだ後は、把手の付け根付近に粘土を貼り付けている。把手は器高のほぼ中央付近、あるいはやや上位に位置しており、先端が下方を向いているのが特徴的である。外面の調整はハケ→ミガキの順で行われ、底部付近には調整による粘土移動の痕跡も確認できた。内面は全体的に粗く、口縁部付近にヨコハケの調整が認められる。底部は刀子状工具により大きく穿孔されており、端部は丸く収まらずに面を有している。

以上の出土遺物から、本住居址が古墳時代後期前葉に属するものと判断できる。

ＳＢ１遺物出土状態（鉢）

ＳＢ１遺物出土状態（甕）

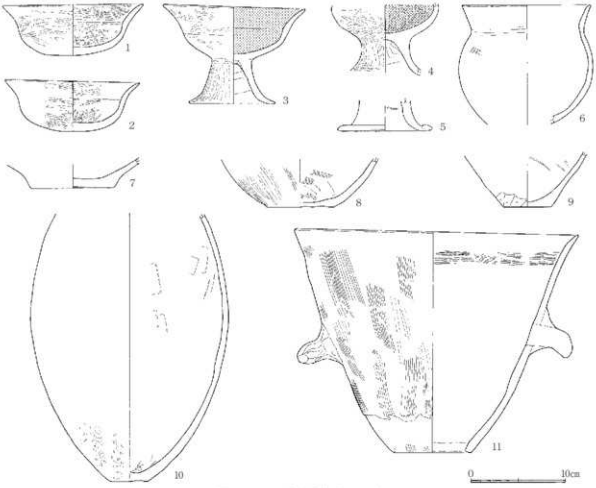


図32　ＳＢ１出土遺物（１：４）

4号住居（ＳＢ４）

【遺構】Ｉ区北端に位置し、一辺約5.4mの隅丸方形を呈する住居と想定されるが、北半分は調査区外のため、カマドの存在などは不明である。

遺構検出面から床面までの深さは約30cmであるが、明瞭な貼床は確認できず、地山面をそのまま床面としていると想定される。床面からは南壁際に壁溝と、南東側に柱穴とみられるｐｉｔが１ヶ所あるだけで、他に目立った掘り込みなどはみられなかった。また、西壁に取り付くような形で高坏脚部（図34－２）と甕（同－３）が出土しているが、他に床面直上からの土器の出土はみられなかった。

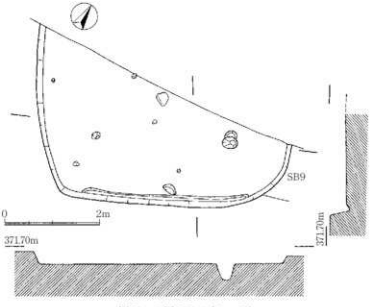


図33　Ｉ区ＳＢ４（１：80）

【遺物】出土遺物は坏・高坏・甕であった。１の坏は、口縁部から体部にかけてが遺存しているが、底部がないため高坏の坏部である可能性も考えられる。２は高坏脚部で、坏部の内面に黒色処理を受けていることが判明している。脚上部は中実状となる。外面はタテヘラミガキ、脚部はヨコヘラミガキの調整が施される。

３・４は甕である。３は底部から胴部にかけてで、外面はタテヘラケズリ、内面はヘラケズリによる調整がなされているとみられる。４は長胴甕の口縁部から胴部にかけてである。外面は縦方向のケズリ調整で、口縁部は短く外傾する。

以上の出土遺物から、本住居址は古墳時代後期末葉（７世紀代）に属するものと考えられる。

ＳＢ４完掘状態（南東から）

ＳＢ４西壁際床面遺物出土状態

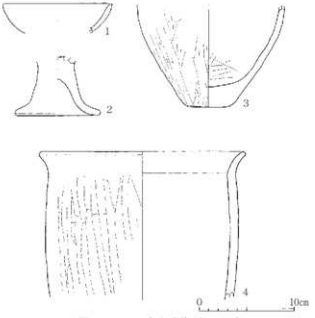


図34　ＳＢ４出土遺物（１：４）

5号住居（ＳＢ５）

【遺構】Ｉ区中央東端に位置し、一辺約4.5m程の隅丸方形を呈する住居と想定される。住居南半の一部はＳＢ１と同様に水路によって破壊されているが、南西コーナー部分と南壁の一部は水路の南側に遺存していた。

遺構検出面から床面までの深さは約55cmで、重複するＳＢ１よりも床面が深く、検出時のプランでもＳＢ１の覆土中にＳＢ５のカマドの焼土が確認されていた。したがって、ＳＢ１の廃絶後にＳＢ５が掘り込まれたとみることができる。確認されたカマドは、両袖が川原石と割れた甕によって構成されており、袖に転用された甕は、西袖（図36－５）が口縁部を上に、東袖（同－６）は口縁部を下にして設置されていた。このように、カマドの部材として土器を転用する例は、今回の調査区内では本住居址のみであるが、近隣の遺跡の例としては、吉田町東遺跡（北長野通り線地点）Ｃ区ＳＢ５例（長野市教育委員会2006）が挙げられる。この住居のカマドからは、石材とほぼ一直線に並ぶ逆位の完形の長胴甕が確認されており、カマドの袖に転用されたものと想定される。

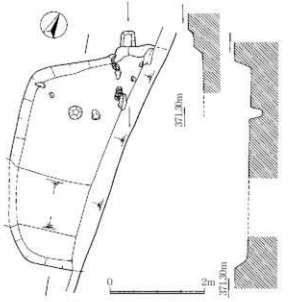


図35　Ｉ区ＳＢ５（１：80）

ＳＢ５完掘状態（南東から）

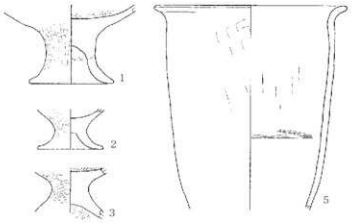
支脚には、逆位に設置された高坏（同－１）が使用されており、カマド北側には煙道とみられる落ち込みが付随していた。しかし、天井石の部材とされるような石材は確認できなかった。また、カマド内部は一部被熱によって赤褐色を呈している部分があったが、全体的な硬化はみられなかった。

住居北壁際からは、口縁部から胴部にかけて遺存する甕（同－４）が潰れた状態で出土している。水路北側の床面中央にはｐｉｔが確認され、主柱穴の一つと考えられる。なお、南西側に想定される柱穴は、水路により破壊されて消滅している。住居の床面は水路の影響で北側が一部グライ化し変色していたが、水路の断面から判断して、貼床を設けているものと考えられた。しかし、南側では明確な貼床を確認することはできなかった。

【遺物】遺物は高坏・甕が出土している。１は支脚に転用されていた高坏で、坏上部が欠損している。内黒ではなく、坏部の内外面にはヘラミガキが施され、脚部内面に輪積みの痕が残る。２は坏部が欠損している高坏で、脚部が短い。内黒ではなく、内外面ともにヘラミガキが施される。３は坏部と脚裾部を欠損している。この高坏は黒色処理を受け、外面はヨコヘラミガキが施される。

４～６はいずれも長胴甕である。４は北壁付近から出土したもので、底部は欠損している。外面はヘラケズリ、内面は板ナデの調整を受け、輪積み痕が残る。５はカマドの西袖に転用されていた甕である。外面はハケ→タテヘラケズリ→ナデの順に調整され、最終的に粘土が塗布されていることが器面の剥離から判明している。内面調整はハケ→板ナデの順。６はカマドの東袖に転用されていた甕で外面はタテヘラケズリ、内面は板ナデの調整を受ける。５と６は当初同一個体と見られたが、調整技法・口縁部の反り等からして別個体であることが判明した。

以上の遺物の様相より、本住居址は古墳時代後期末葉（７世紀代）に属するものと考えられる。



ＳＢ５カマド完掘状態

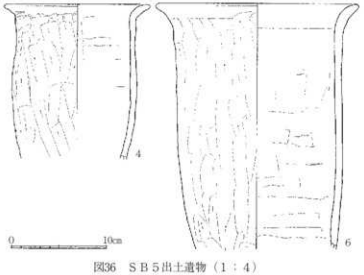


図36　ＳＢ５出土遺物（１：４）

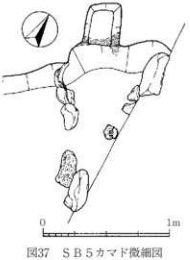


図37　ＳＢ５カマド微細図（１：30）

６号住居（ＳＢ６）

【遺構】Ⅰ区北西隅に位置するが、その大部分が既存住宅の基礎設置に伴う掘削により破壊されていた。また、住居址の大半は調査区外のため、全体の正確な規模を確認することはできなかった。ただし、南壁の様相から判断して、一辺が５ｍ以上ある方形基調の住居址であるものと想定される。

【遺物】図化できたのは高坏のみであった。１は坏部で、脚部は欠損している。内外面に細いヘラミガキが施され、丁寧な造りである。２は脚部で外面はタテヘラミガキ、内面はヨコナデが施される。１・２は接合せず別個体である。古墳時代中期中葉の様相を示すが、詳細は不明瞭である。

図38　ＳＢ６出土遺物（１：４）

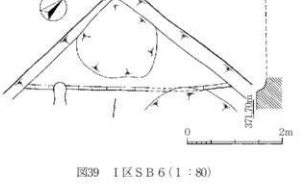


図39　Ⅰ区ＳＢ６（１：80）

7号住居（ＳＢ７）

【遺構】Ⅰ区北半中央に位置し、一辺約４ｍの隅丸方形を呈する住居である。南壁はＳＫ３・ＳＸ３によって破壊されていたものの、ＳＸ３の底面とＳＢ７の床面との間に、ＳＢ７の掘り方境界ラインを明瞭に確認することができた。

遺構検出面から床面までの深さは30㎝で、ＳＸ３の底面とのレベル差はほとんど認められなかった。明瞭な貼床は確認できなかったものの、カマドと煙道、柱穴が良好に遺存していた。また、床面直上からは、人頭大の川原石が多量に出土している。

カマドは北壁沿い、やや東寄りに位置し、袖が壁面から85㎝と長く伸びている。両袖の先端には川原石が袖石として取り付けられ、その上部の天井石は袖石を倒すように崩れていた。カマド内部からは破砕した１個体分の甕（図42－６）と、完形の坏（同－１）が１点出土した。その出土状況は、完形の坏が甕の口縁部を塞ぐような形で覆っていたことから、坏が甕の蓋の役割を果たしていたと考えられる。土器の周囲と天井石の下部は被熱によって赤褐色を呈していた。また、カマドの東袖脇からは小型の甕（同－４）が出土している。煙道は住居北壁から1.4m弱伸び、その先端には浅いｐｉｔが認められた。住居自体の大きさは、本遺跡の中では小型の部類に属するが、カマドの大きさや煙道の長さは大型住居（Ⅱ区ＳＢ26・27・28、Ⅲ区ＳＢ33）にも匹敵する規模のものである。

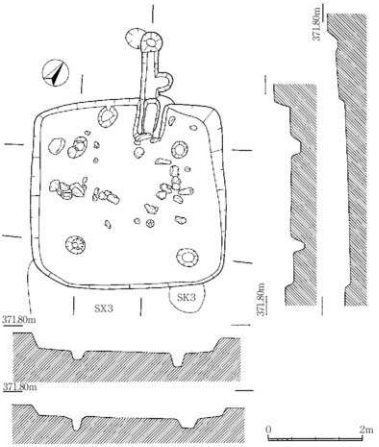


図40　Ⅰ区ＳＢ７（１：80）

住居東壁際の床面直上からは、北壁に口縁部を向けた１個体分の甕（同－６）が潰れた状態で出土している。床面直上から多量に出土した川原石の中には、縄文時代の多孔石とみられるようなものも見受けられた。これらの川原石はカマドの前方に集中し、住居南側ではほとんど出土していない。本住居址と同様に、住居内から多量

ＳＢ７完掘状態（南東から）

ＳＢ７カマド土器出土状態

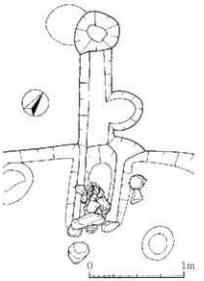


図41　ＳＢ７カマド微細図（１：40）

の礫が出土しているⅡ区ＳＢ26においては、床面直上やｐｉｔ内からも礫が出土し、礫の直下に土器がつぶされた状態で出土している。これらの様相から、ＳＢ26例は住居廃絶に伴い廃棄されたもの、あるいは屋根の部材として用いられていた礫が崩落したものと考えている。本住居址例においては、礫直下に遺物の出土は認められなかった。また、意図的に何かを取り囲むように配置されているとも考えられるが、現段階ではどのような用途で用いられたものであるかは断定できない。

主柱穴は、きれいに住居の四隅側に配置されており、４本柱構成であったとみられる。

【遺物】出土遺物は坏・甕が確認できた。１はほぼ完形の、須恵器蓋模倣形態の坏で、カマド内から出土した甕の口縁部を塞いでいた。内黒ではなく、内外面ともにヨコヘラミガキが施される。外面底部付近には一部ハケメも確認できる。２・３の坏も共に内黒ではない。２は内外面にヘラミガキが施される。３は外面にヨコヘラミガキ、内面口縁部はヨコ、胴部はタテヘラミガキが施される。いずれも薄手で精緻なつくりであり、内外面の稜線は口縁部直下付近に位置する。

４の甕はカマド東脇から出土したもので、口縁部を床に向けた状態で出土している。胴部下半が欠損しているが、それ以外は良好な状態である。内面には輪積み痕がある。５は東壁際から出土したもので、ほぼ完形である。底部の形状から輪台技法によるものと判明した。外面はハケによる調整がなされる。全体的に粘土の貼り付け痕もみられる。口縁部はやや外反しながら、ほぼ垂直気味に立ち上がっている。６はカマド内から出土したもので、こちらもほぼ完形である。やや縦長で楕円形を呈している。５の甕の口縁部と同様に、口縁の反りはきつくなく、直線的に立ち上がる。外面はハケ調整の後にナデを施していると思われ、粘土貼り付け痕もみられる。内面は摩耗しているが、工具によるナデが施されているとみられる。

以上の遺物の様相から、本住居址は古墳時代中期末～後期初頭に属するとみられる。

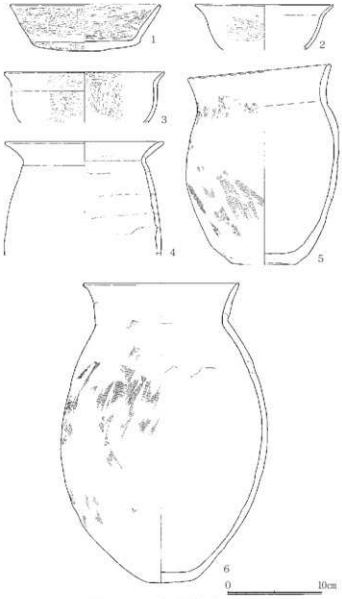


図42　ＳＢ７出土遺物（１：４）

8号住居（ＳＢ８）

【遺構】Ⅰ区北東際に位置しているが、そのほとんどは調査区外であり、全体像を確認することはできなかった。また、目立った遺物の出土もなかった。

遺構検出面から床面までは約25cmで、黄色の硬く締まった貼床が確認でき、床面からは大小のｐｉｔを検出した。調査区壁際のｐｉｔは深さもあり、位置的に柱穴と想定される。

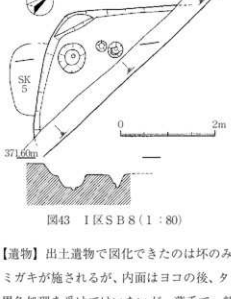


図43　Ⅰ区ＳＢ８（１：80）

ＳＢ８完掘状態（南西から）

【遺物】出土遺物で図化できたのは坏のみであった。内外面共にヨコヘラミガキが施されるが、内面はヨコの後、タテヘラミガキも加えられている。黒色処理を受けてはいないが、薄手で、精巧な作りである。

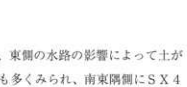


図44　ＳＢ８出土遺物（１：４）

13号住居（ＳＢ13）

【遺構】Ⅰ区南東側に位置し、一辺約５ｍの方形を呈する住居と想定されるが、東側の水路の影響によって土がグライ化しており、検出当初からプランが判然としていなかった。また、撹乱も多くみられ、南東隅側にＳＸ４が重複するなどプラン確定には困難を伴った。

カマドは煙道・両袖が遺存していたが、形は全体的に整っておらず、礫が袖に沿う形で出土した。このような袖に礫を伴うカマドの形態は、吉田古屋敷遺跡（Ｂ－１地区再開発事業）Ｂ区ＳＡ３のカマドにもみられ（長野市教育委員会1997）、距離も約80mと近い。こちらのカマドの袖は幼児頭大の石材を配列し、周囲に粘土を貼り付けたものと想定されている。また、他の近隣の遺跡としては、平林東沖遺跡（古牧中部区画整理事業）で２例確認できた（長野市教育委員会2007）。この内、Ａ区ＳＢ10のカマドの両袖は、拳大の礫を芯材として使用した粘土製のもので、Ｂ区ＳＢ19のカマドの両袖は、10cm大の石を芯材として２段に積んで配列していた。上記の３事例は、どれも礫（川原石）を整然と配置して袖を形成している。これに比べると、本住居のカマド袖の礫は整っておらず、礫が袖に直接関連性があったかは不明である。両袖や焚き口部では焼土はみられなかったが、煙道の周囲では焼土が確認できた。また、焚き口部からは甕（図47－９）・高坏（同－３）などが出土している。

遺構検出面から床面までは約30cmであるが、明瞭な貼床は確認できず、ｐｉｔも確認することはできなかった。床面で確認できた遺物は、多数がカマド西脇・カマド前面に集中しており、住居南西隅付近でほぼ完形の短頸壺（同－４）が１点出土しているが、この他に目立った遺物を検出することはできなかった。

【遺物】遺物は土師器坏・須恵器坏・高坏・壺・鉢・甕・ミニチュア土器であるが、14～17の坏類は本住居址に

属するものとは考えにくく、隣接するＳＢ11からの混入品であると思われる。

１・２は共に黒色処理を受けた坏である。１は、外面の調整は不明であるが内面はヨコヘラミガキの調整を受ける。２は１に比べ小型で、外面上部に細いヨコヘラミガキ、下部に粗いヘラミガキが施され、内面はヨコヘラミガキが施されていた。

３は黒色処理を受けた高坏で、カマド内から出土している。外面は坏部から脚部までヨコヘラミガキで、頭部はナデ調整である。坏部内面も外面同様にヨコヘラミガキだが、底面付近はやや不規則なヘラミガキである。

４～６は壺である。４は須恵器の短頸壺で、ロクロナデの調整の後、胴部外面の底部付近は静止ケズリ→ナデの順で調整が施されている。肩部には２条の沈線が施され、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。５は土師器の壺で、口縁部と底部が欠損している。外面は粗いヨコヘラミガキが施され、内面にも同様の調整がみられるが、輪積み痕も確認できる。欠損している口縁部は、頭部の形状からし

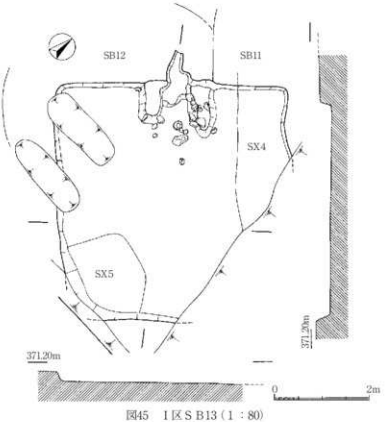


図45　Ⅰ区ＳＢ13（１：80）

ＳＢ13完掘状態（南東から）

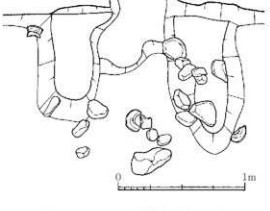


図46　ＳＢ13カマド微細図（１：30）

ＳＢ13カマド土器出土状態

てほぼ垂直に立ち上がるものと推測され、小型の直口壺に相当するものと思われる。6は胴部下半が欠損している。外面はハケ→ミガキの順で調整が施され、内面は板ナデが施される。

7はカマド周辺から出土した鉢で、内外面共に器面の摩耗が著しく不明瞭であるが、外面の一部に薄くハケメが残る。

8～11は甕である。8は胴部があまり張らない甕である。内外面共に板ナデによる調整を受ける。9はカマド内部から出土したもので、外面はタテハケによる調整が施される。内面は摩耗しているが、ヘラナデによる調整を受けていたとみられる。10はカマド西脇から出土している。内外面共に器面の摩耗が著しいが、内面には輪積み痕が確認できる。11は甕の底部と思われるが、遺存度が低く、器面も摩耗しているため不確実である。

12・13はミニチュア土器で、共にナデによって調整されている。また、12はカマドの正面から出土している。

14は土師器の坏で、ロクロナデの調整を受ける。15・16は須恵器の坏で、共にロクロナデの調整を受ける。15は底部に回転ヘラ切りの後にナデ調整を施している。16は底部にヘラ切りの後に静止ヘラケズリを施す。17は高台付坏の底部で、赤焼けしている。底部はヘラ切りの後に静止ヘラケズリを施している。

以上より、本住居址は古墳時代後期前葉に属するものと思われる。

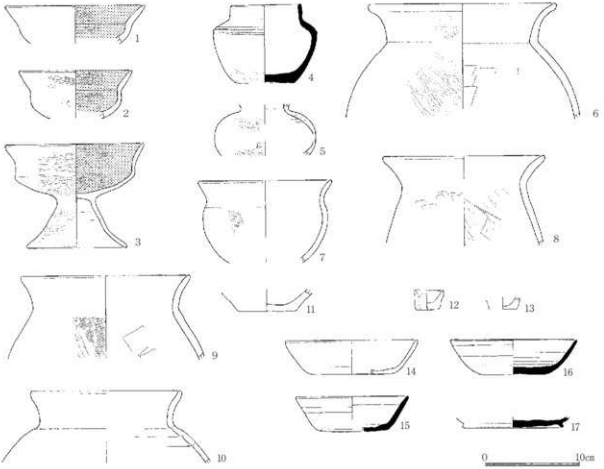


図47　ＳＢ13出土遺物（１：４）

14号住居（ＳＢ14）

【遺構】Ⅰ区北西に位置し、5.4×4.7mのいびつな方形を呈する住居である。住居中央部にはＳＢ３と同様に、近現代に構築された井戸が重複しており、住居北東隅も撹乱によって破壊されていた。

カマドは煙道部が残存していたが、カマドの両袖や、袖を構築したような粘土の痕跡、焚き口部・燃焼部は破壊されて遺存していなかった。また、袖石や天井石といったカマドの部材も検出することができなかった。

遺構検出面から床面までは12cmと比較的浅い掘り込みで、一部カマドまわりに黄色の貼床を認めたが、柱穴等は確認できなかった。この貼床は一部分にみられるのみで、住居の南側では確認できず、どちらかといえば、弥生中期の円形住居にみられるような硬く締まった貼床に近似しているように思われた。また、この貼床が確認された住居北西コーナー付近には一部焼土痕が残存していたが、隣に存在しているＳＢ15のカマドなのか、元々そこに存在していた可能性のある弥生住居のものかは断定できなかった。住居南西隅の床面直上からは坏（図49－１）・鉢（同－２）が出土している。また、これらの他に覆土中からではあるが、ミニチュア土器（同－３）・縄文時代の石匙（図138－26）なども出土している。なお、覆土除去作業中に床面から別遺構のプランを検出している。大部分が井戸と重複しており詳細は不明であるが、本住居廃絶後に掘り込まれたものと考えられる。長軸3.5m、短軸2.3mの方形を呈し、貼床・焼土痕・ｐｉｔなどは確認できなかった。住居址としては小型の掘り込みであることや、井戸との位置関係からも、井戸設置の際に掘削された掘り方の可能性も想定されるが、詳細は不明である。

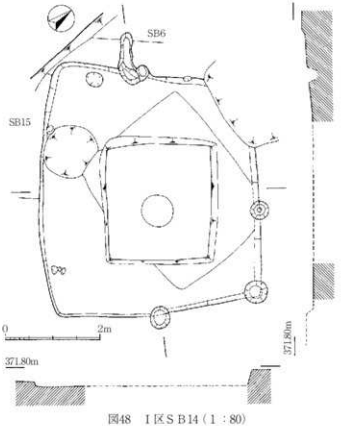


図48　Ｉ区ＳＢ14（１：80）

ＳＢ14完掘状態（南東から）

【遺物】遺物は、坏・鉢・土製品が出土している。

１の坏は、内外面共にヘラミガキの調整を受け、内面には黒色処理が施される。断面は半月状を呈する。

２は鉢で、内外面にはナデの調整が施される。

３の土製品は、ミニチュアの高坏、もしくはミニチュアの台付甕の脚部とみられるが、遺存度が低く、詳細は不明である。

出土遺物は僅少だが、坏の形状等から判断して、本住居址は古墳時代後期末葉（７世紀代）に属する可能性が指摘される。

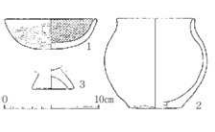


図49　ＳＢ14出土遺物（１：４）

18号住居（ＳＢ18）

【遺構】Ｉ区中央西側に位置し、一辺約５ｍの隅丸方形の住居と想定されるが、ＳＢ17と水路による破壊が著しい。

水路の断面を確認したところ、覆土中に多量の炭が混じっており、床面からはほぼ全面にわたって黒色の炭化物が検出された。このことから、本住居は火災による焼失住居か、もしくは住居廃絶後に故意に焼き払われたものと想定できる。ただし、柱穴等が認められず、そのいずれであるかを断定することはできなかった。

床面からまとまった土器の出土はなく、検出されたカマドもＳＢ17・19の間に挟まれ、わずかに焼土とカマド内部の落ち込みを確認するに留まった。

【遺物】遺物は壺・甕が出土している。１の壺は図面上で復元したもので、口径・器高に関しては若干の差違が生じる。外面の調整はタテヘラミガキが施されるが、底部付近にはハケの調整が部分的に残っている。内面は口縁部付近がヨコヘラミガキ、胴部以下にはハケ→ナデの順で調整が施される。

２は胴部以下が欠損している甕で、外面はタテヘラミガキ、内面にはヨコヘラミガキが施されている。

３の甕は、胴部外面はタテヘラケズリ、内面には板ナデの調整が施されているようだが、はっきりはしない。

以上より、本住居址は古墳時代後期末葉（７世紀代）に属するものと思われる。

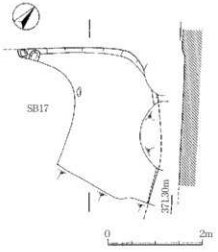


図50　Ｉ区ＳＢ18（１：80）

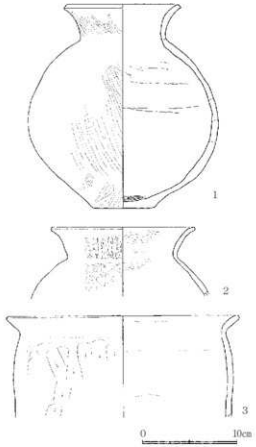


図51　ＳＢ18出土遺物（１：４）

ＳＢ18完掘状態（南東から）

19号住居（ＳＢ19）

【遺構】Ⅰ区中央西側に位置し、6.0×5.2mの隅丸長方形の住居と想定される。確認できたのは全体の５分の１程度で、ほとんどは南側に位置するＳＢ17・18・水路跡によって破壊されているが、ＳＢ17のカマド底面と、水路南側の床面からは本住居のものと思われるプランが確認できた。

検出されたカマドは、北壁中央に位置し、幅約40cmの太めの袖を有していた。両袖石は、袖の先端部からやや離れた位置に倒れており、天井石もそれに沿う形で落下していた。カマド内部は被熱によって全体的に赤褐色を呈しており、一部遺構検出面にまで焼土が達していた。カマド

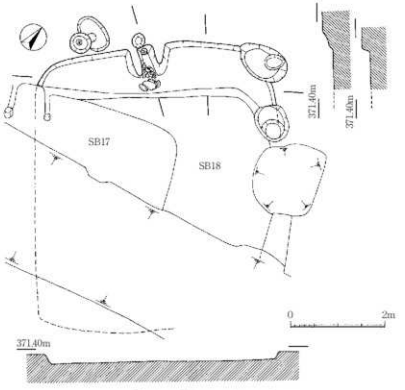


図52　Ⅰ区ＳＢ19（１：80）

ＳＢ19完掘状態（南東から）

ＳＢ19カマド土器出土状態

内からは１個体分の甕（図54－４）の破片がまとまって出土し、更にその奥の壁際からはやや浮いた状態ではあるが、完形の小型の瓶（同－５）が１点出土している。明確な煙道は見受けられなかったが、カマド北側の遺構検出面に浅い掘り込みが確認できた。ただし、若干カマドの主軸とずれており、カマドに直接関連があるかは不明である。遺構検出面から床面までは約20cmで、床面からのまとまった遺物や、ｐｉｔなどは検出できなかったが、覆土除去作業中に縄文時代後期のものとみられる土偶の脚部（図130－14）が１点出土している。

【遺物】出土遺物は、坏・高坏・壺・甕・瓶で、そのほとんどがカマド内からの出土である。

１は黒色処理を受けた坏で、内外面共にヨコヘラミガキが施される。２はカマド内からの出土で、外面にヨコヘラミガキ、内面は黒色処理を受けず、ヨコハケ→ヨコヘラミガキの順で調整が施されている。１・２共に、稜線は器高のほぼ中位に位置している。

３は脚部を欠損した高坏で、坏部は内外面共に粗いヨコヘラミガキの調整を受ける。脚部はタテヘラミガキが施されている。

４の甕はカマド内から出土したものである。やや胴部が張り、外面にタテヘラナデ、内面にもヘラナデの調整を受ける。

５は、カマド内の北壁際から出土した小型の甑である。外面はタテヘラミガキ、内面は下部にヨコヘラミガキ、上部はタテヘラミガキの調整を受けている。底部は遺存し、直径約２㎝の穿孔が丁寧に施されている。６は口縁部のみが遺存している甑で、胴部・把手の形状に関しては不明である。内外面にタテヘラミガキの調整が施される。

７もカマド内から出土した壺であるが、図面上での復原であるため器高に関しては差違が生じる。胴部外面はハケ→ヘラミガキの順で調整を受け、頸部にはタテヘラミガキが施される。内面にはハケ→ヨコヘラミガキの順で調整を受ける。底部には外面にタテハケ→ナデ、内面にはナデ調整が施されている。

以上より、本住居址は古墳時代後期前葉に属するものと考えられる。

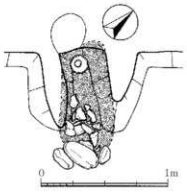


図53　ＳＢ19カマド微細図
（１：30）

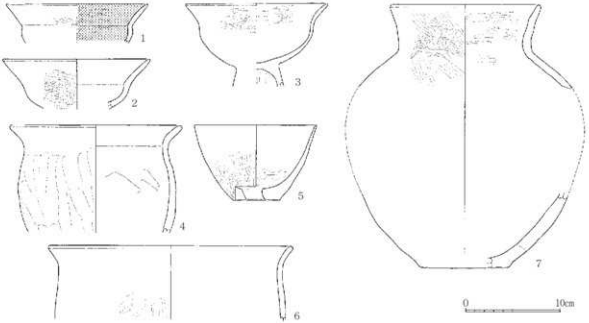


図54　ＳＢ19出土遺物（１：４）

20号住居（ＳＢ20）

【遺構】Ｉ区西端に位置し、南側はＳＢ17と水路によって破壊され、西側は調査区外であったため、正確な規模は不明である。

遺構検出面から床面までは約12㎝で、検出されたのはｐｉｔ４基と北西隅の壁溝のみであった。最北のｐｉｔからは口縁部から肩部にかけての壺（図56－４）が、逆位に埋没しており、床面直上からは口縁部を東壁に向けた完形の甑（同－５）が１個体分、潰れた状態で出土した。

【遺物】遺物は、坏・壺・甑が出土している。１～３の坏の内、２・３は黒色処理を受けている。１は甑の直下

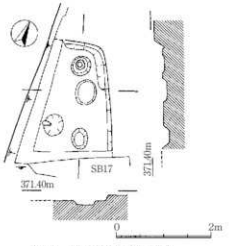


図55　1区ＳＢ20（1：80）

ＳＢ20完掘状態（南から）

ＳＢ20遺物出土状態（瓶）

ＳＢ20遺物出土状態（壺）

から出土した坏で、外面はヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、胴部にタテヘラミガキが施される。2は内外面共にヨコヘラミガキだが、内面は特に密にヨコヘラミガキが施されている。底部外面にはヘラ記号ともとれるキズがみられる。3は底部を欠損している。調整は内外面共にヨコヘラミガキである。

4はｐｉｔから出土した、一周する壺の口縁部である。頸部外面はタテヘラミガキが施され、粘土の停止痕が強く残る。胴部はタテハケ→ヨコ・ナナメヘラミガキの順で調整を受ける。内面は、口縁部にヨコハケ→ナデ、胴部にはヨコハケ→ヘラナデが施される。

5は床面直上から出土した完形の甕である。胴部は緩やかな曲線を描く。外面はタテハケ→タテヘラミガキ、口縁部はヨコヘラミガキの調整が施される。内面調整はヨコハケ→タテヘラミガキである。把手は差込式か貼付式かは判然としないが、器高の中央よりやや上位に位置し、上を向く形である。また、底部は切り取られ、端部は面を有する。

以上より、本住居址は古墳時代中期末～後期初頭の所産と判断される。

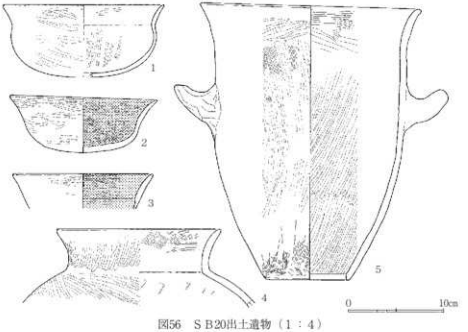


図56　ＳＢ20出土遺物（1：4）

21号住居（ＳＢ21）

【遺構】Ⅰ区南西隅に位置しているが、住居の半分以上は調査区外である。そのため、正確な規模は不明であるが、東壁は確認できただけでも６ｍあり、ＳＢ17に匹敵する規模の住居であったことが想定される。

遺構検出面から床面までは約10cmであるが、床面と想定された面からはまとまった遺物の出土はなく、柱穴も確認できなかった。

ＳＢ21完掘状態（南東から）

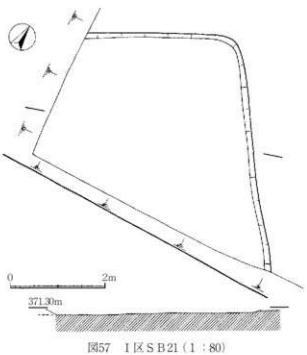


図57　Ⅰ区ＳＢ21（１：80）

【遺物】図化できたのは坏のみであった。黒色処理を受けた坏で、内外面共にタテヨコのヘラミガキ調整を受ける。

図58　ＳＢ21出土遺物（１：４）

23号住居（ＳＢ23）

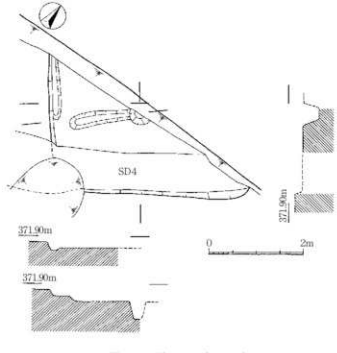


図59　Ⅱ区ＳＢ23（１：80）

【遺構】１辺4.2m程の隅丸方形を呈する住居址と想定される。ただし、住居北側の大部分およびカマド等は、既存建物の基礎掘削に伴い破壊されており、遺存していなかった。

遺構検出面から床面までの深さは12cm程で、床面は黄色土が踏み固められ硬く締まっていた。発掘区の北壁沿いには、主柱穴が１ヶ所確認されている。この柱穴は４本主柱穴の内、南西側の一つに相当するものと考えられる。主柱穴から南西側に向かって幅約30cm、長さ約1.3

図60　ＳＢ23出土遺物（１：４）

ＳＢ23完掘状態（ＳＤ４掘り下げ前・南東から）

ＳＢ23完掘状態（ＳＤ４掘り下げ後・南東から）

mの溝が確認されており、間仕切り溝であると考えられる。住居の西壁沿いには、壁溝も確認されている。なお、ＳＢ23の南壁側には、後世に掘られた溝（ＳＤ４）が重複しているが、ＳＢ23の南壁裾部はかろうじて残存していた。このため、ＳＢ23の主軸は、真北から西へ約36°程傾いているものと判断される。

【遺物】図示し得た遺物は１点のみである。１は土師器の坏、もしくは手捏ねのミニチュア坏である。内外面ナデ調整が施され、内面底部中央付近は指頭圧痕が明瞭に残る。なお、内面底部付近には赤色顔料らしき痕跡も認められることから、元々赤彩されていたか、赤色顔料を入れる容器として用いられていた可能性も指摘される。

出土した遺物が僅少のため、遺構の構築年代は不確定的だが、古墳時代中～後期の所産である可能性が高い。

25号住居（ＳＢ25）

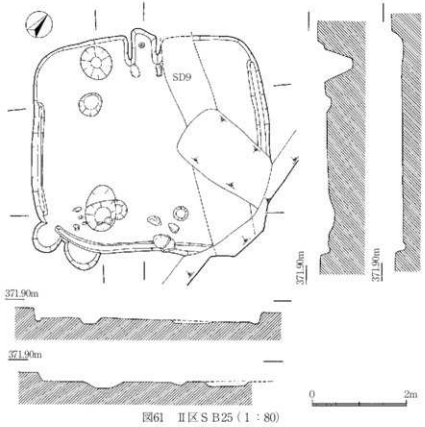


図61　Ⅱ区ＳＢ25（１：80）

【遺構】南北約4.6m、東西約4.8mの隅丸方形を呈し、北西側の壁面ほぼ中央部にカマドが造り付けられている。住居址の主軸は真北から西へ約40°傾いている。住居の東側は後世の溝（ＳＤ９）と撹乱坑に、また南西隅は２つの土坑によってそれぞれ破壊されているが、住居址のほぼ全面を調査することができた。

遺構検出面から住居の床面までは約20cmで、床面は硬く締まっていた。４本柱の主柱穴の内、北西側・南西側の主柱穴が確認されたものの、北東側と南東側の主柱穴はＳＤ９によって破壊されており、確認すること

ＳＢ25全景（南東から）

ＳＢ25カマド遺物出土状態

ＳＢ25カマド西脇ｐｉｔ甕出土状態

ＳＢ25カマド完掘状態

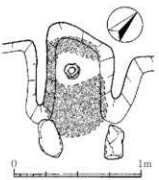


図62　ＳＢ25カマド微細図
（完掘後）（１：30）

ができなかった。なお、住居の西壁・南壁・東壁沿いにはそれぞれ壁溝が確認されている。

住居内からは、後に詳述するように、北西側・北東側・南東側の各隅部より多量の土器や玉類が、ほぼ原位置を保った状態で出土している。また、住居の南側の床面からは、直径10～35cm程の複数の川原石や、凹み石（図139－30）等も出土している。

カマドは、東側の袖の一部がＳＤ９によって破壊されていたものの、両袖の大部分が遺存していた。両袖の先端には、それぞれ袖石が据えられており、袖石の直上からは長さ55cm程の天井石が重なった状態で出土している。袖石・天井石共に丸味を帯びた川原石で、意図的な加工の痕跡等は認められなかった。カマドの内部および西側の袖脇からは、後に詳述するとおり、多量の土器が出土している。カマドの西側50cm程の位置には、直径約70cm・深さ約60cmの土坑が確認され、内部からはほぼ完形の甕が１点出土した。カマドとの位置関係からも、カマドの脇に設けられた貯蔵穴状施設、あるいは収納用の施設であるものと理解される。なお、煙道部分に関しては、ＳＤ６および撹乱坑によって破壊されており、確認することができなかった。

カマド内・カマド西脇土器出土状態（図63）

カマド内およびカマド西脇からは、最低16個体分の土器が出土している。この内、カマド内からは甕が６～７点、坏が３点出土している。なお、図63－39・40は、同一個体の可能性もある。

カマドのほぼ中心部からは、長胴傾向にある大型の甕が１点（図68－35）、底部を下方に向け、ほぼ立ったままの状態で出土している。この甕の底部直下からは、別個体の甕の底部（図69－48）が、底部外面を上に向けた

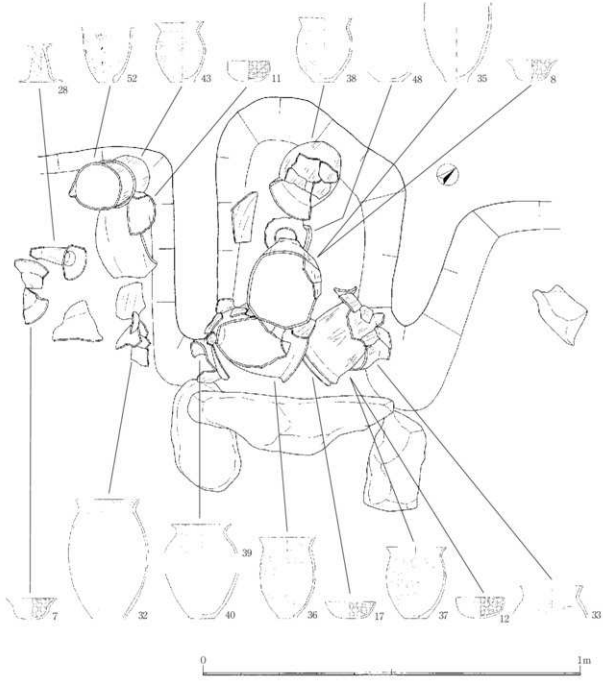


図63　ＳＢ25カマド・カマド西脇遺物出土状態微細図（１：10）

状態、すなわち逆位の状態で角錐状の立石の上に被せられていた。これは、48の甕の底部が、立石と共にカマドの支脚として利用され、その上に35の大型の甕が置かれていたことを表している。カマド内における支脚の位置と、甕の出土状態から判断して、この大型の甕がカマドの中心的機能を果たしていたものと理解される。なお、35の甕の内部からは坏（図67－８）が１点出土しており、甕の蓋として用いられていた可能性も指摘できる。

この甕の手前側、カマドの天井石に沿う形で、小型の甕が２点（図68－36・37）出土している。これらの甕は、それぞれの口縁部を向かい合わせるような形で、カマドの主軸側に倒れていた。この内、東側の甕（同－37）においては、底部付近から別個体の甕の上半部（同－33）が37を覆いくるむような状態で出土している。33の甕は、

口縁部が37とは正反対、すなわち東側下方を向いていた。このことから、33の甕が元々カマド底面に置かれていたと仮定すると、口縁部を下方に向け、その上に37の甕が乗せられていた、もしくは入れられていたものと理解される。そして、37の甕がカマドの主軸側に倒れた際、33の口縁部が東側を向いて浮き上がった可能性を指摘することができる。

一方、西側の甕（図68－36）の底部付近からも、別個体の甕の胴部上半（同－39）が出土している。39の甕は、口縁部を36とは反対側、すなわち西側に向けていた。また、36の底部付近を覆うような状態で出土したことから、39の甕が口縁部を下に向けてカマド底面に置かれ、その上に36の甕が置かれていた、もしくは入れられていたものと考えられる。そして、36の甕がカマドの主軸側、すなわち東側に向かって倒れた際、39の甕が口縁部を西側に向けて浮き上がった可能性を指摘することができる。

このことから、カマドの内部前方においては、カマドの主軸を中心として、東側と西側でまったく同様の状況をみてとることができる。33や39の甕は、甕を乗せるための支脚の機能を果たしていた可能性を指摘できる。

ただし、東側と西側で若干様相が異なるのは、東側の甕（図68－37）の口縁部内に坏（図67－17）が被さった状態で出土した点である。これは、17の坏が37の甕の蓋として用いられていた可能性を示している。坏は口縁部を上に向け、正位の状態で甕に被されていた。カマドの甕に坏を蓋のようにして被せていた例は、ＳＢ７でも確認されている。また、この他に、37の甕は内部からも別個体の坏（同－12）が１点出土している。カマド中央の35の甕の内部からも坏が１点出土しているが、西側の36の甕からは蓋としても、甕の内部からも坏は出土していない点で、様相を異にしている。これらの甕類は、カマドの構築部材として用いられた可能性も指摘できるが、周辺地域で同様の例は管見ながら見当たらない。また、これらの甕とは別に、カマドの一番奥側、すなわち煙道側からも、甕が１点（図68－38）倒れた状態で出土している。

以上の様相から、このカマドにおいては甕を設置する個所が複数存在していた可能性を指摘することができる。周辺地域の同時期の遺跡においては、本村東沖遺跡（長野市教育委員会1993）等において二口カマドの例が報告されているが、このような例はそれ程多くはない。他の土器の出土状態とも合わせて、本住居址の特異性がカマドの一面においても窺われる。

この他に、カマドの西袖脇からも複数の土器が出土している。カマドの西袖脇から土器が多数出土する例は、今回の調査においてはＳＢ28・ＳＢ33等でも認められた。本住居址においては、まずカマドの西袖と住居の北壁接合部隅付近から、小型の甕（図68－43）の上に、把手の付かない小型の瓶（図69－52）が乗せられたままの状態で出土している。この甕と瓶のすぐ手前脇からは、坏（図67－11）が底部をカマド西袖側に向け、倒れた状態で出土した。坏の南側下方には、図化には至らなかったがカマドの西袖に沿って大型の壺の胴部破片が出土しており、さらにその前方南側からは長胴甕（図68－32）の胴部下半が出土している。この長胴甕は、住居北西隅の土器集中区において胴部の上半～口縁部にかけての部分が出土しており、同一個体として接合することが明らかとなった。すなわち、甕の下半部分がカマドの西袖脇、甕の胴部上半が住居北西隅土器集中区に意図的に分けて置かれた可能性を示している。カマド周辺の土器群と、住居北西隅に置かれた土器群との同時期性を裏付けると共に、儀礼的な意味の有無等を考える上で重要な出土例といえる。この他、大型壺の胴部破片の脇からは、屈折脚の高坏（図67－28）が坏部側を斜め下方に向け、転倒した状態で出土している。また、高坏の南脇からは、坏（同－７）が１点、割れた状態で出土している。さらに、図63では示していないが、カマドの西へ50cm程離れた、住居の北壁沿いの位置からは直径約70cm・深さ約60cmの土坑が確認されている。中からは大型の瓶（図69－49）が１点、ほぼ完形のまま、口縁部を下方に向けて倒れた状態で出土している。

以上、カマド内およびカマド西脇からは、多数の土器が、特徴的な出土状態を呈して出土しているといえる。

住居北西隅土器集中区土器出土状態（図64）

ＳＢ25北西隅土器集中区（破片除去前・北東より）

ＳＢ25北西隅土器集中区（破片除去後・北東より）

ＳＢ25北西隅土器集中区（破片除去前・南東より）

ＳＢ25北西隅土器集中区（破片除去後・南東より）

ＳＢ25北西隅土器集中区（破片除去前・北東・横位置より）

ＳＢ25北西隅土器集中区　刀子出土状態
（右側竹串の位置・北東より）

ＳＢ25においては、住居の北西隅部からも多数の土器が出土しているほか、金属製品や玉類といった儀礼的要素の強い遺物も出土している。

土器は、坏が９点、鉢が５点、甕が４点、壺が１点、瓶が１点の、合計20点が出土している。これらは住居の北西隅部から、住居の西壁の方向とは幾分斜行しながら、南東方向に向けて列状を成して出土している。

まず、土器列の最も南東側、列の先端部からは、口縁部の形態がそれぞれ異なる鉢が３点（図67－22・23・24）、三角形を成すように整然と置かれていた。３点の出土レベルに差異はなく、床面に置かれた状態であった。

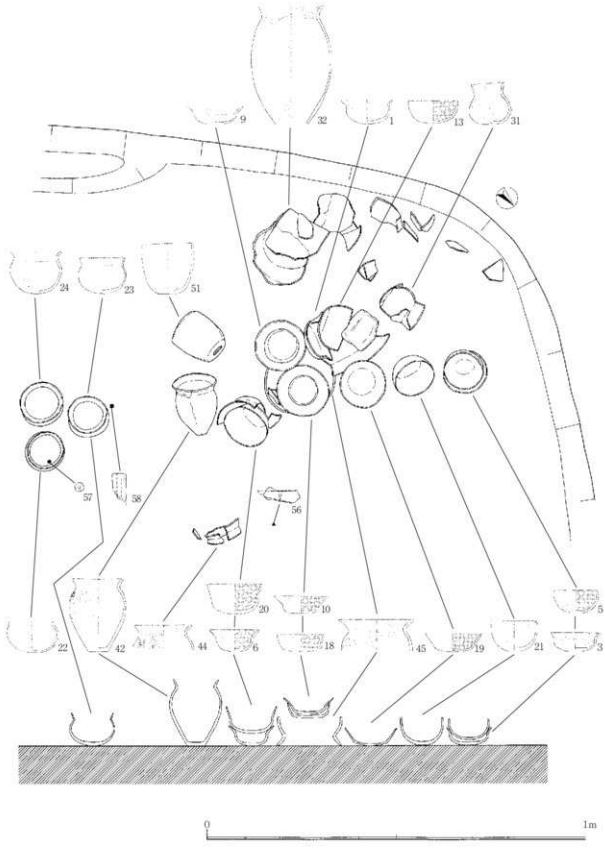


図64　ＳＢ25北西隅土器集中区遺物出土状態微細図および土器配列復元概念図（１：10）

この内、22の鉢の内部、覆土内からは、滑石製の臼玉（図69－57）が1点出土している。臼玉は、土器内部の底面ではなく、土器の口縁部とほぼ同じレベルの覆土内から出土している。したがって、鉢の中に何らかの内容物が存在していたか、あるいは鉢に有機質の蓋が被せられ、その上から臼玉が撒かれた可能性も指摘される。なお、土器集中区周辺の覆土および、土器内部の覆土は採集し洗浄を行ったが、この他に臼玉は1点も認められなかった。

22の鉢の南西側には24の鉢が置かれ、その北西側には23の土器が並べて置かれている。これらの3点の鉢の内、住居の西壁側に位置する24の鉢の器高が最も高く、続いて23の鉢、22の鉢の順となる。土器群の北東側、すなわちカマド側から土器を並べたと仮定すると、奥に最も背の高い鉢を置き、手前側にそれよりも背の低い鉢を二つ並べて置いた、とみることができる。また、23の鉢の口縁部のすぐ西脇からは、土製の管玉（図69－58）が1点、半分欠けた状態で出土している。この管玉は、臼玉同様に鉢の口縁部と大差ないレベルの覆土中から出土している。ただし、この場合は鉢の内部ではなく、口縁部やや外側に相当する位置からの出土である。鉢の口縁部と大差ない出土レベルから判断して、22の臼玉と同様、23の鉢にも木製等の有機質の蓋が置かれ、その上から管玉を撒いた、あるいは置いた可能性が指摘される。なお、管玉についてもこの他には1点も出土していない。

これら3点の鉢から北に30cm程離れた位置からは、小型の甕（図68－42）と把手の無い小型の甑（図69－51）が口縁部をそれぞれ西壁側に向け、倒れた状態で出土している。これらの甕と甑は完形の状態で遺存していた。甑の胴部下半の径と甕の口縁径がほぼ一致し、また倒れた方向も西壁側でほぼ一致することから、元々甕の上に甑が置かれた状態で並べられていた可能性も指摘できる。ただし、これより北側の土器群が、東西2列に並べられていた可能性もあることから、その延長方向上で、甑も単独で床面に置かれていた可能性も想定される。

42の甕の北隣には、坏（図67－6）と鉢（同－20）が、重ねられた状態で出土している。これらは、口径の小さな坏が下に置かれ、その上に口径・器高共に坏よりも大きな鉢が置かれていた。上の鉢は、東側に倒れていたが完形の状態、下の坏は割れた状態で出土している。

6と20の北側からは、土器が2列に並べられていたかのような様相を呈している。さらに、それらの土器の一部が数段にわたって、重ねられた状態で出土している。この内、東側の列南東側からは、口縁部を下方に向け、床面に置かれた甕の胴部上半（図68－45）の上に、形状の異なる坏が2点、すっぽりと重なった状態で出土している。45の甕は、口縁部の二分の一周分のみが床に置かれていた。坏は、口縁部が外方に大きく開くもの（図67－10）が、口縁部がさほど開かない須恵器蓋模倣形態の坏（同－18）の上に重ねられていた。これら2点の坏も、ほぼ完存していた。

この坏の北西隣側からは、やはり完形の坏（同－19）が1点、単独で置かれていた。この坏から北西側の土器群は、いずれも本来の床面から5cmほど浮いた状態で出土している。これは、元々床面に置かれていた土器の下に覆土が流れ込んで土器を持ち上げたとは考えにくく、土器が置かれた当初から土が存在していたものと想定される。したがって、土器の高さをある程度揃えるために意図的に土を土台状に敷いたか、あるいは土器が置かれた段階で住居内に覆土がある程度堆積し、そこを掘り窪めて土器を並べた可能性も指摘される。

19の坏の北西側からはやや深身の坏（同－21）が、またさらにその北西側からは形状の異なる坏が2点（同－3・5）、重ねられた状態で出土している。10・18の坏から3・5の坏までは一直線上に並んでおり、意図的に並べられていたことは明らかである。

西側の列に相当する位置からは、10・18の重ねられた坏の南西側に隣接して、完形の坏（同－9）が、ほぼ同じ高さに並べられた状態で出土している。10の坏が内黒の黒色を呈するのに対し、9の坏は黒色処理が施されておらず、色彩の上では対照的である。

9の坏の北西側からは、これも互いに形状の異なる坏が2点、口縁部を北西～北側に向け、倒れた状態で出土

している。これら2点の坏は、その出土状態から判断して、やはり元々は重ねられていたものと理解される。この場合、下方が口縁部のやや開く内黒ではない坏（図67－1）の上方に、口縁部がほとんど開かない内黒の坏（同－13）が乗せられていたことになり、東列の最北西端に位置する3・5の坏の重ね方とよく似ている。

1・13の坏の下方からは、10・18の坏の下方で出土した甕（図68－45）のもう半分部分が、外面を下に向け、半截された断面部分を上に向けた状態で出土している。この甕の上方からは、平たい方形の石も出土しているが、土器群との関連は明らかではない。

西側の列の最北西端部からは、直口壺が1点、倒れた状態で出土している。口縁部は北側を向けていた。

これらの土器列の南西側、すなわち西壁に沿った位置からは、大型の甕の胴部上半～口縁部部分が割れた状態で出土している。この甕（同－32）は、先にも述べたとおり、カマド西袖脇から胴部下半部分が出土しており、同一個体であることが確認されている。大型の器種の、しかも胴部上半部分のみを、最も壁際のこの位置に意図的に置いていたとすれば、その意味合いが注目される。

一方、これらの土器列の東側、25cmほど離れた位置からは、甕の肩部～口縁部（同－44）が、口縁部を斜め下方にむけた状態で出土している。また、さらにこの甕の10cm程北西側からは、切先と茎部を欠いた鉄製の刀子（図69－56）が1点出土している。刀子は床面直上からの出土で、刃部をカマド側、切先を北壁側に向けていた。

これらの遺物類の出土状態から判断して、土器群が住居内で並べ置かれたと仮定する場合、土器列の北東側、すなわちカマド側の方向から西壁側を向いて土器類を並べたもの、と想定される。そして、最も奥に大型の甕を配置し、手前側に小型の器種を並べ置いたもの、と理解される。土器を並べ置いた後、臼玉や管玉を撒き、さらに鉄製の刀子を最も手前側に置いて、住居北西隅部における一連の行為を締め括った可能性が指摘される。

この他にも、土器の遺存状態があまりにも良好であることから、住居内に並べられた後に覆土が堆積したのではなく、覆土が堆積した後に、穴を掘り窪め、その穴の中に土器を並べ置いた、という可能性も指摘される。

いずれの場合においても、これらの遺物群は意図的に並べ置かれたことは明白であり、その出土状態の特異性が注目される。

住居北東隅土器集中区土器出土状態（図65）

ＳＢ25北東隅土器集中区（破片除去前・南東より）

ＳＢ25北東隅土器集中区（破片除去後・南西より）

住居北東隅部からも、複数の土器がまとまって出土している。玉類や金属製品の出土は認められなかった。

土器は、坏が2点、鉢が1点、壺が1点、壺ないし甕に分類され得る器種が1点、甕が1点、瓶が1点、ミニチュア土器が1点の、最低8個体分が出土している。

これらの土器群は、住居の壁に沿って並ぶような形で出土している。この内、最も東側、東壁溝に沿う形で完

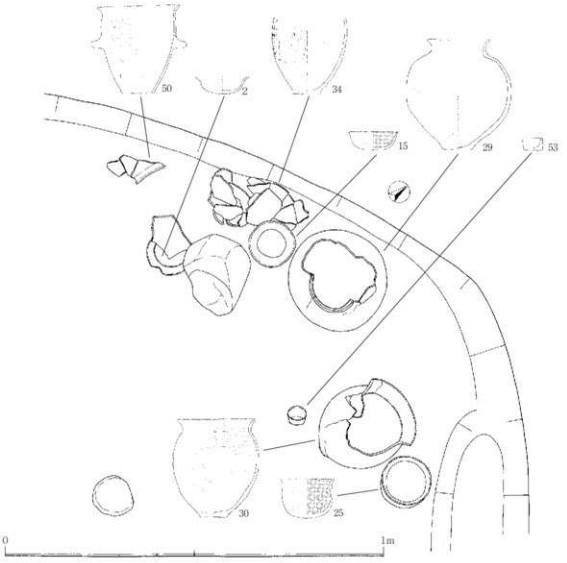


図65　ＳＢ25北東隅土器集中区遺物出土状態微細図（１：10）

形の鉢（図67－25）が１点、床面に置かれた状態で出土している。

この鉢の西隣からは、比較的遺存状態の良い壺、もしくは甕に分類される大型の土器（同－30）が１点、北側に口縁部を向けて倒れた状態で出土している。この土器は、上方以外は全く破損することなく、本来の形状を保ったままの状態であった。

この大型の土器の手前西脇からは、短い円柱状のミニチュア土器（図69－53）が、完形の状態で出土している。この小型土器は、床面からは３cmほど浮いた状態で出土しているが、出土位置や土器の黒斑、胎土の様相等からみて、他の土器との一連性が高く、同時期のものと判断される。

30の土器から西へ15cm程離れた、住居の北壁沿いの位置からは、大型の壺（図67－29）が１点出土している。この壺も、30の土器同様、口縁部および胴部最上方が破損していたものの、胴部上方から下方にかけては全く破損することなく、本来の形状を保ったままの状態で出土した。壺は正位の状態で置かれ、ほぼ直立していた。

壺の西側に隣接して、坏（図67－15）が１点、床面に置かれていた。この坏も、口縁部の一部を欠いていたも

のの、遺存状態は良く、ほぼ完存していた。

15の坏の北側、北壁沿いからは、大型の甕（図68－34）が出土している。この甕は、29や30の大型の土器とは異なり、床面につぶれた状態で出土した。

15の坏の南側からは、人頭大の川原石が床面より５cm程浮いた状態で出土しており、その西脇下方からは、もう一つの坏（図67－２）が出土している。この坏も、口縁部の一部を欠いていたが、他の遺存状態は良く、ほぼ完存していた。坏の上方からは、壺もしくは甕の胴部破片が出土しているが、いずれの個体とも接合せず、別個体の可能性もある。

北壁沿い、34の甕の西側からは、把手を有する大型の甕（図69－50）が１点分、つぶれた状態で出土している。

ＳＢ25北東隅土器集中区　ミニチュア土器出土状態（左端・発掘途中）

以上、住居内北東隅付近の土器出土様相からも、土器が住居の隅部、壁に沿う形で並べ置かれていたものと判断される。北西隅部土器集中区同様、比較的遺存状態の良い土器が多い点が注目される。また、30の壺もしくは甕に分類される大型土器の脇から、小型のミニチュア土器が１点並んで出土している点も注意される。この土器が、祭祀用に用いられたものとすれば、この住居北東隅部でも何らかの儀礼的行為が行われた可能性が指摘されよう。

住居南東隅土器集中区土器出土状態（図66）

ＳＢ25南東隅土器集中区（発掘途中・北西より）

ＳＢ25南東隅土器集中区（拡大）

ＳＢ25においては、住居の南東隅部からも複数の土器類がまとまって出土している。これらの土器は、坏が３点、高坏が１点、鉢が１点、甕が１点の、計６点である。また、これらの土器の他に、直径が30cm以上もある大型の川原石が数点まとまって出土している。さらに、縄文時代の遺物の可能性もある三角形の凹み石も１点、床面より出土している。

住居の南東隅部からカマドの東側にかけては、古代に掘削された溝（ＳＤ９）が、ＳＢ25の床面を掘り抜いていた。このＳＤ９の南西側に、遺物のほとんどは集中しており、図66はその遺物集中区の遺物出土状態図である。

住居南壁沿い東側より、小型の甕（図68－41）が１点出土している。この甕は、口縁部を南側に向け、倒れた状態で出土した。完全につぶれることなく、遺存状態は比較的良好であった。

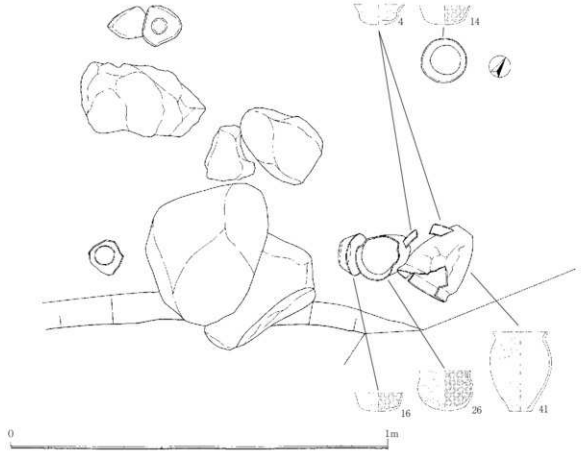


図66　ＳＢ25南東隅土器集中区遺物出土状態微細図（１：10）

甕の下方からは、坏（図67－４）が１点、口縁部を甕の胴部下方に接するようにして、傾いた状態で出土している。この坏も、上方は欠損していたが、下方の遺存状態は良好であった。坏の出土状態からは、元々上に甕が重ねられており、それが後に倒れた可能性も指摘される。

甕と坏の西脇からは、隣接して鉢（同－26）が出土している。この鉢は、半分ほど欠けていたが下方は遺存状態が良く、全体として斜めに傾いた状態で出土している。

凹み石出土状態

鉢の西脇下方からは、別個体の坏（同－16）が１点、口縁部を東側に向け、倒れた状態で出土している。この坏は、完形の状態で遺存していた。この坏と鉢の出土状態から、元々鉢が坏の上に重ねられており、それが何らかの原因で倒れた、という可能性も指摘されよう。

41の甕の北側、50cm程離れた位置からは、内面黒色処理された完形の坏（同－14）が１点、床面より出土している。この坏から西へ80cm程の位置からは、三角形の凹み石状石製品が出土しているが、混入品の可能性もある。

なお、図66では図示していないが、住居の東壁側撹乱坑とＳＤ９に挟まれたわずかな空間から、内面黒色処理された高坏（同－27）が１点、住居の床面より出土している。この高坏の出土位置から判断して、この高坏と他の土器群との間にも多数の土器が置かれていたが、ＳＤ９が掘られた段階で、それらの土器は掘り出されてしまった可能性も指摘されよう。いずれにしても、住居南東隅部においても意図的に土器が置かれていた様相が窺える。

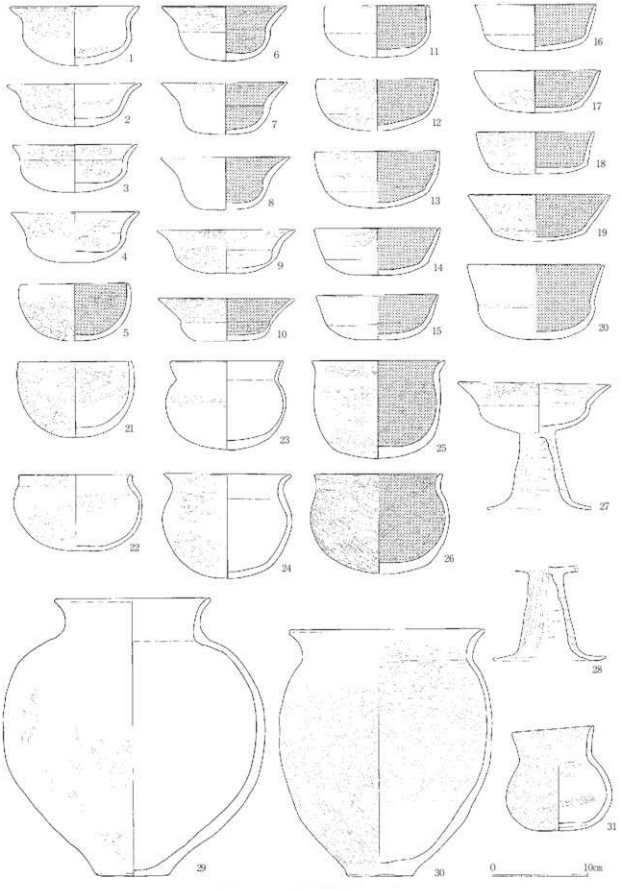


図67　ＳＢ25出土遺物①（１：４）

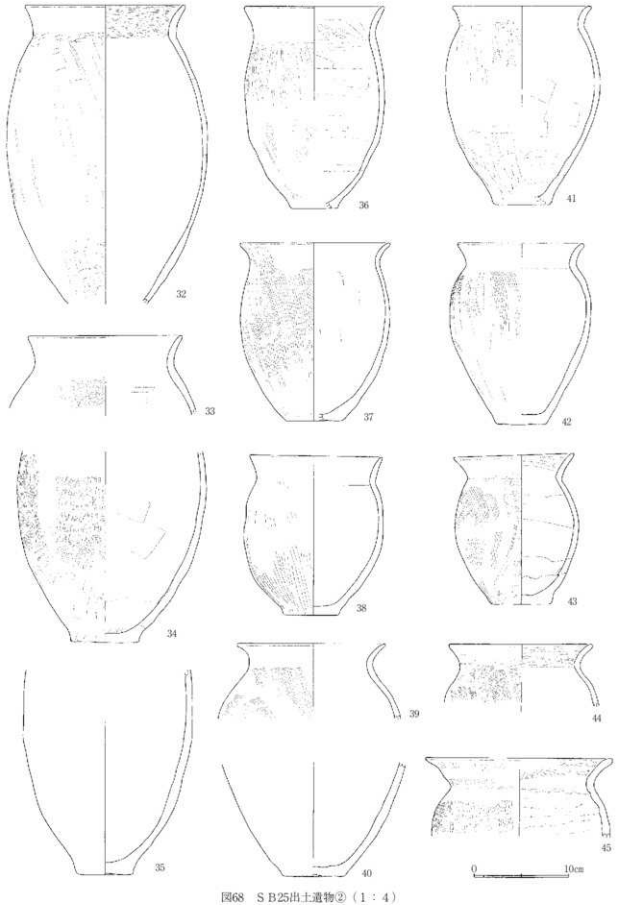


図68　ＳＢ25出土遺物②（１：４）

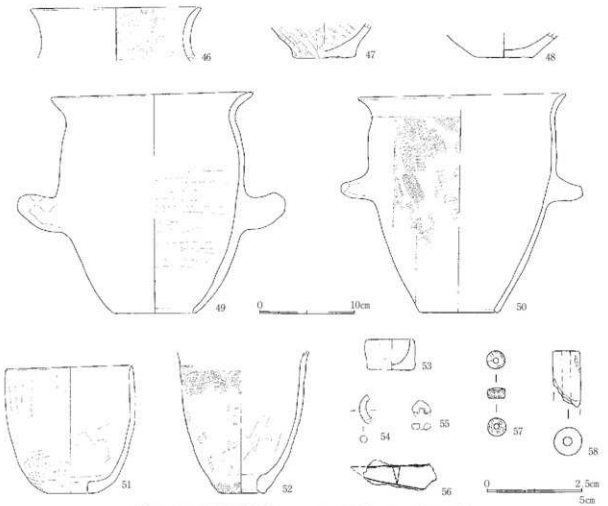


図69　SB25出土遺物③（1：4・1：2(56)・1：1(57・58)）

【遺物】図示し得た遺物は58点である。

1～19は坏である。この内、1～4および6～10は、体部が半球状を呈し、口縁部が外方に開くもの、5は全体が半球形で口縁部が外方に開かず内湾するもの、11～19は須恵器坏蓋模倣形態のものである。なお、1～4および9の5点は内面黒色処理が施されておらず、他は全て内面黒色処理が施されている。また、器面調整は口縁部～体部にかけて、内外面共に横方向のヘラミガキが施されているものが大多数を占める。その調整方法は、4～5cm程の長さで上方から下方、もしくは下方から上方にヘラミガキを施し、それを一つのまとまりとして外面では上から見て右回転、内面では左回転の方向に繰り返し施している例が多い。このヘラミガキの単位は、直線的なものの他に、弧状に施されているものも存在する。なお、内面底部付近は横方向、あるいは直交方向のヘラミガキが施されているものが多い。

1は、やや深身を呈する坏である。体部上方は内傾気味に立ち上がり、上方に至って口縁部が外方に短く開く。内外面共に、口縁部と体部を画する稜線は認められない。外面は斜めのヘラミガキのちヨコヘラミガキが、内面は横方向のヘラミガキが施される。

2は、器高の低い坏である。体部が緩やかに外方に開きつつ、なだらかに口縁部に至る。内外面共に、稜線は認められない。また、いずれも横方向のヘラミガキが施される。

3は、1の体部がそのまま低くなったような形状を呈する。ただし、不明瞭ながら内外面に稜線が存在している。稜線は、器高全体の上方3分の1付近に位置している。内外面共に横方向のヘラミガキが施される。

4は、3に比べ口縁部が長く、外反・先細りしながら収束する。外面の稜線は不明瞭だが、内面の稜線は明瞭で、器高の中位やや上方に位置している。内外面共にヨコヘラミガキが施されるが、内面の稜線直下のみ、ヘラミガキの回転方向が逆になっている。

5は、断面が半月状を呈する坏である。やや深身を呈し、口縁部は内湾して収束する。内外面共に横方向のヘラミガキが施されるが、外面底部にはヘラケズリも施されている。

6～8は、ほぼ同様の形状を呈する坏である。いずれも他の坏に比べ、口径がやや小振りだが器高が高く、内面の稜線はシャープで口縁部が外傾しながら先細り状に収束する。内外面共に横方向のヘラミガキ調整が基調である。内面の稜線が明瞭であるのに対し、外面の稜線はいずれも不明瞭である。内面の稜線の位置は、器高全体の中位からやや上方に位置している。

9は、器高が低く、口縁部が外反気味に外方へ開く。内外面共に横方向のヘラミガキ調整が施されている。外面の稜線は不明瞭だが、内面の稜線は明瞭で、器高の中位やや上方に位置している。

10は、器高が低く、口縁部分がさらに長くなった形状の坏である。口縁部は外方へ直線的に伸びる。内外面共に稜線は明瞭で、器高全体の中位よりやや下方に位置している。口縁部内外面におけるヘラミガキの調整単位のまとまりは、明瞭な弧状を呈している。底部は幾分平底気味である。

11は、須恵器蓋模倣形態の坏である。他の模倣形態の坏に比べ、口径が小振りで、口縁部がやや内傾気味に上方に立ち上がる。内外面共に横方向のヘラミガキ調整が施される。内外面の稜線は、不明瞭ながら、器高全体の中位やや下方に位置している。

12・13は口縁部が内湾気味に立ち上がり、全体として丸味を有するタイプの坏である。器高が高い部類に属する。いずれも内外面横方向のヘラミガキ調整が施される。

14～16も、ほぼ同様の形状を呈する坏である。口縁部は外傾しながら直線的に上方へ伸び、端部は細くなって収束する。全体として、底部・口縁部共に丸味を有している。外面の稜線はいずれも明瞭で、15の外面の稜線は沈線状を呈する。外面の稜線の位置は、3点ともほぼ同じ高さで、器高全体の下から3分の1付近に位置している。内外面の調整はいずれも横方向のヘラミガキが施されているようだが、摩滅が著しく、不明瞭なものが多い。

17は、口縁部が内湾気味に外方に開く。器高はやや低い。内外面の調整は、横方向のヘラミガキが施されている。外面の稜線は明瞭で、器高全体の下から5分の1程に位置している。底部は丸味を有している。

18は、器高が低く、口径も小振りの坏である。口縁部は全体的に緩やかに内湾しながら上方に立ち上がるが、直線的に外傾しながら立ち上がる部分もある。内外面は丁寧にヨコヘラミガキが施される。外面の稜線は明瞭で沈線状を呈し、内面は稜線部分が強いヨコナデによって幅広く窪んでいる。底部はやや平底気味である。

19は、口径が広く、口縁部が外方に向かって直線的に大きく開くタイプの坏である。底部は丸味を有し、外面の稜線も明瞭である。外面の稜線は、器高全体の下から5分の1程に位置している。内外面は横方向のヘラミガキが丁寧に施されるが、口縁部はヘラミガキが弧状のまとまりを有している。

20～26は、鉢に分類される。この内、20と25・26の3点は、内面に黒色処理が施されている。

20は、須恵器模倣形態の坏によく似た形状を呈する。外面の稜線は明瞭で、器高の中位よりやや下方に位置している。口縁部が長く、直線的に外傾しながら上方に向かって伸びる。外面の調整は摩滅のため不明瞭だが、内面には横方向のヘラミガキが施されている。長野市若穂の榎田遺跡では、Ⅳ期古段階（6世紀中葉）にC3類として、「発達した口縁部が上方を向いて箱形になる」坏（SB69－12出土）が報告されているが（長野県埋蔵文化財センター1999）、本例はこの前段階に位置する同様の器種となる可能性もある。

21は、断面が半球状を呈するもので、口縁部にかけて緩やかに内湾している。22は、体部が半球状を呈し、上

方で幾分内湾した後、口縁部が短く直立する。23は、半球状の体部から口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がるタイプ、24は球形に近い体部から口縁部が外反しながら外側に開くタイプの鉢である。25は、体部が直立気味に立ち上がって箱状を呈し、口縁部は上方でわずかに外反して外側に開く。26は、球状の体部に、緩やかに外反する口縁部が直立気味に立ち上がる。いずれの鉢も、一部摩滅等により不明瞭なものが存在するものの、内外面には横、あるいは斜め方向のヘラミガキが施されている。

27・28は高坏である。27は、口縁部から脚端部まで復元された。坏部は、半球形の体部から口縁部が外方に向かって外反気味に開く。稜線は内面が明瞭、外面はやや不明瞭で、坏部の高さにおいては中位よりやや上方に位置している。坏部の形状は、9や10の坏とよく似ている。内外面には不明瞭ながらヨコヘラミガキが、また内面には黒色処理も施されている。脚部は柱状を呈し、外面には粗い縦方向のヘラミガキ、内面は粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。28は、脚部のみ遺存していた。外面には、単位不明瞭ながら縦方向のヘラミガキが施され、内面には粘土紐巻き上げ痕がナデ消され切らずに残っている。わずかに残る坏部内面底部には、黒色処理は施されていなかった。脚部の形状は、大きく開かず直線的な柱状を呈し、27の高坏とよく似ている。

29～31は、壺に分類される。ただし、30については、その形状から甕とも分類され得る。29は、大型の壺である。口径16.5cm、器高29.6cm、胴部の最大径は27.6cmである。胴部は球形で、底部にかけて収束しながら平底となる。胴部の最大径は、器高のほぼ中位に位置している。口縁部は単純口縁で、外反しながら短く立ち上がる。内外面ともに器面は荒れて調整は不明瞭だが、縦および横方向のヘラミガキが施されている。

30は、壺もしくは甕に分類され得る器種である。器形的には甕ともいえるが、内外面は一面に丁寧なヘラミガキ調整が施されており、甕に多くみられるススの付着も認められない。底部外面は輪台状を呈する。最大径は、胴部上半に位置している。他の甕と比べても全く異質であることから、広口の壺といってよいものと考えられる。

31は、小型の直口壺である。口縁部はわずかに外傾しながら直立する。最大径は、胴部下半に位置しており、下膨れ状を呈する。内外面共に、ヨコハケのち縦方向、もしくは横方向のヘラミガキが施される。

32～48は、甕である。36～38および41～44は小型の甕、他は大型の甕と想定される。この内、大型の甕はいずれも長胴傾向にありながら、胴部は引き続きラグビーボール状に丸味を有する段階のものといえる。小型の甕は、いずれも平底を呈し、最大径は胴部上半に位置するものが多い。外面は、基本的に縦方向のハケメ調整が多いが、胴部下方にヘラケズリが施されるものも存在する。内面は、板状工具によるナデ調整のものが多い。

49～52は甑である。この内、49・50が把手を有する大型の甑、51・52が把手を有さない小型の甑である。49・50共に胴部には丸味を有している。49の把手は胴部の中位に位置し、把手の先端は上方を向く。50の把手は、胴部の中位よりやや上方に位置し、把手は片方のみの残存であるが横方向を向く。なお、いずれも差し込み把手であるか貼り付け把手であるかは、明らかではない。孔部は刀子状の工具で切り取られ、面を有している。なお、49は外面ナデ調整だが、50はハケ調整となっている。51・52はいずれも単孔で、51は外面ナデ調整およびヘラケズリ、52は外面ハケ調整ののちナデられている。51は丸く寸胴だが、52は下方に向かうにつれ細身を呈する。

53はミニチュア土器である。短い円筒形を呈し、外面には黒斑も認められる。54・55は不明土製品である。54は、23の鉢の内部覆土中より出土した。55は、中央に穿孔が認められる。覆土中からの出土である。

56は、鉄製の刀子である。刃部の先端および茎の大部分を欠損する。刃部は残存長3.3cm・最大幅1.2cm、峰部の厚さ3㎜で断面二等辺三角形状、茎部は最大幅0.8cm・厚さ3㎜で断面台形状を呈するものと想定される。

57は滑石製の臼玉である。直径5.0㎜・厚さ2.8㎜で、断面は円筒形を呈する。側面の擦痕は一方向である。58は、土製の管玉である。半分は欠損していた。残存長1.5cm、断面は直径7.3㎜の円形である。

以上の遺物の様相より、本住居址は古墳時代中期末～後期初頭の所産と判断される。

26号住居（ＳＢ26）

【遺構】Ⅱ区の南端部に、住居址北側の一部およびカマド付近のみが確認された。南側は発掘区外であるが、東西に走る近代の水路によってすでに破壊されているものと推察される。

カマドの位置を住居北辺のほぼ中央部と仮定すると、住居北辺は約８ｍとなり、１辺８ｍ四方の隅丸方形を呈する大型の住居であったと想定することができる。

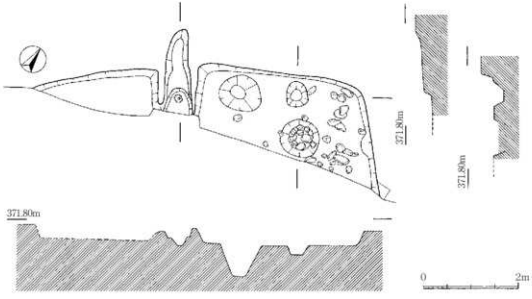


図70　Ⅱ区ＳＢ26（１：80）

ＳＢ26完掘状態（南東から）

ＳＢ26カマド土器出土状態

カマドは、両袖および煙道部が良好に遺存していた。カマドの袖は鮮やかな黄白色の粘土で、周辺の地山と大差無く、地山をそのまま削り出して造り出した可能性も想定された。カマドの両袖前端部は発掘区外のため、袖石等を確認することはできなかったが、袖の長さは１ｍ20㎝以上、カマドの東西幅も最大で１ｍ20㎝に達し、住居の規模に見合う大型のものであるといえる。カマドの内部は底面・袖・煙道共に良く焼けて橙色に変色していた。カマド内部の焚き口側からは、多量の土器片が出土している。この内、カマドの底面からは高坏（図72－３）が１点、逆位に伏せて据えられた状態で出土した。高坏は脚裾部を欠いていたがほぼ完形で、高坏１個体をそのままカマドの支脚に転用して用いたものと理解される。カマド内からは、この高坏の他、別個体の高坏坏部～脚

ＳＢ26カマド完掘状態

ＳＢ26カマド完掘状態（支脚除去後）

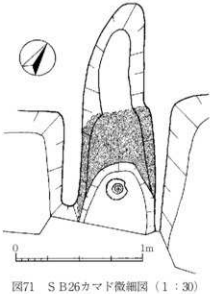
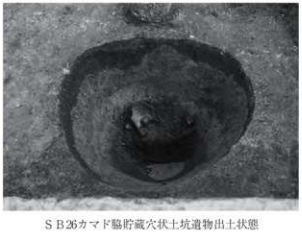


図71　ＳＢ26カマド微細図（１：30）

柱状部（図72－４）１点、甕数個体分が出土している。別個体の高坏については、先の高坏と共にカマドの支脚に用いられていたものと想定される。この場合、カマドは二口設けられていた可能性も指摘される。カマド内の甕（同－５・６・10・11）については、カマドに据えられていたものが、そのままつぶれた状態で出土したものと考えられる。

カマドの東脇、60～70cm程の位置には、直径80～90cm、深さ70cm程の大型の土坑が確認されている。この土坑は、他の住居址でも見られるような、カマド脇の貯蔵穴状施設、あるいは収納施設であるものと考えられる。内部からは、甕（同－８）が覆土下層より出土している。カマド脇貯蔵穴状施設のさらに東側、１m程の位置にも、直径50cm、深さ20cm程の小穴が存在しており、内部底面付近からは坏が２点（同－１・２）の他、甕（同－９）の破片等が出土している。



ＳＢ26カマド脇貯蔵穴状土坑遺物出土状態

ＳＢ26北壁付近ｐｉｔ遺物出土状態

住居内からは、この他にも北東側を中心に、多量の礫が出土している。これらの礫は直径20cm前後の川原石で、住居の床面付近のみでなく、柱穴と考えられるｐｉｔ内からも多数出土している。また、床面出土の礫の下からは、土器がつぶれた状態で出土している。このことから、これらの礫群は、住居廃絶後間もない頃に何らかの理由で住居内に廃棄されたか、もしくは屋根材等建築部材として用いられていたものが住居廃絶時にそのまま崩落した

もの、等と考えることができる。礫の下の土器（図72－7・9）については、元々床面に置かれていたものが、このような際に押しつぶされ、その状態で出土した結果、と理解されよう。なお、9の甕については、破片の一部が住居内北東側のpit内底面からも出土している。したがって、甕が住居の床面でつぶれた時点でpitが開口しており、甕の破片がpit内に転がり落ちたものと判断される。

SB26北東隅集石域

SB26北東集石域拡大・遺物出土状態

【遺物】図示し得た遺物は11点である。

1・2は坏である。1は、須恵器蓋模倣形態の坏で、内面はヨコヘラミガキおよび黒色処理が施される。外面調整は摩耗のため不明瞭である。底部はいくらか丸味を帯び、口縁部と底部を画する外面の稜線は不明瞭ながら坏部下方に位置している。2も、須恵器蓋模倣形態の坏である。内外面共にヨコヘラミガキが施されるが、内面に黒色処理は施されていない。坏部外面の稜線は、1同様坏部の下方に位置するが、1に比べ明瞭な稜線を有している。

3・4は高坏である。3は、脚端部から坏部まで、比較的遺存状態が良い。坏部内面には明瞭なヨコヘラミガキが施されるが、坏部外面のヘラミガキは不明瞭であった。また、坏部外面底部付近はヨコヘラミガキ、脚柱状部上端付近はタテヘラミガキが確認できるのに対し、脚柱状部の下3分の2は器面が荒れて調整の単位は不明瞭である。これは、この高坏が逆位にカマド内に据えられ、支脚として用いられた際、坏部はカマド底面に埋められて設置され、柱状部のみが露呈していた可能性を示すものといえる。

5は甕もしくは鉢である。口縁部が直立気味に立ち上がり、端部はやや外反して丸く収まる。胴部は外面底部付近のみケズリのち横方向のヘラミガキ、他は内外面共に横方向のヘラミガキが施される。

6～11は甕である。6～8および11は小型の甕、9・10は大型の甕である。6は口縁部～胴部下半にかけて外面に明瞭な縦方向のハケメが施され、口縁部はハケののち横方向にナデている。内面は全体的にナデ調整だが、下方には輪積み痕が残っている。口縁部はくの字に外反し、端部は丸く収まる。最大径は胴部上半に位置する。7は外面に縦方向のハケ調整が施されるが、器面が荒れて単位は不明瞭である。内面にはヘラナデの痕跡が残る。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く収まる。最大径は胴部中央付近からやや下半に位置し、全体として丸味を帯びた形状を呈する。8は外面上半部がハケメ、下半部は下から上に向けてのケズリ調整が施される。内面は上半部が横ないし縦方向のハケメ、下半部が外面とは逆方向、すなわち上から下に向けてのケズリ調整となっている。最大径は7同様胴部中位からやや下位付近に位置している。9は大型の甕である。外面には大部分で縦方向のハケメが施されるが、底部付近はハケののちナデ調整。口縁部は強く外反し、端部付近は下方に幾分肥厚

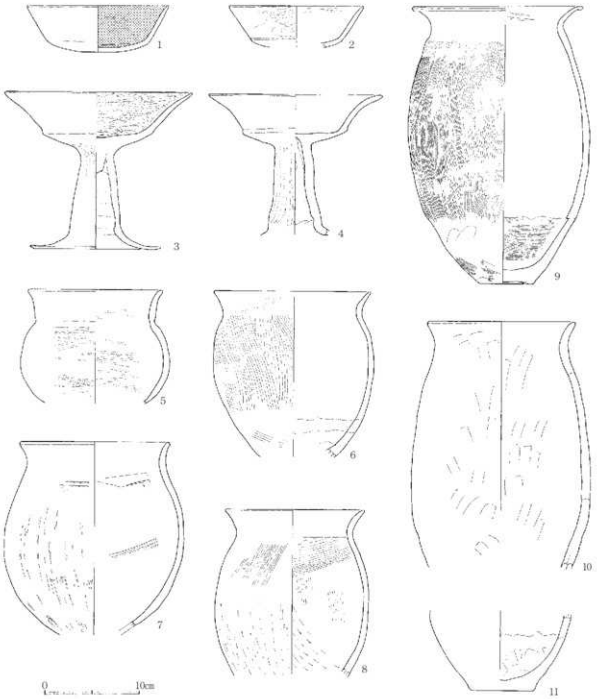


図72　ＳＢ26出土遺物（１：４）

する。内面は、下４分の１とその上方が輪積み痕を境にして明瞭に調整が異なり、下方は明瞭な横ハケ、上方は板状工具によるナデ調整が施される。外面のナデ調整とハケメの境界も、この輪積み痕付近に位置している。長胴傾向にあるものの、最大径は胴部中央付近に位置し、全体として丸味を保っている。10も大型の甕で、内外面共に縦方向のハケのちナデ調整が施されるが、いずれも器面が荒れて不明瞭。最大径は胴部下半に位置し、やや下膨れ状を呈する。11は小型の甕の底部～胴下半で、外面は調整不明だが内面にはヘラナデ痕と輪積み痕が残る。

カマド内の高坏は典型的な古墳時代中期の屈折脚高坏で、やや古相を呈するが、その他の坏や甕の様相から判断して、本住居址は概ね古墳時代中期後葉～後期初頭頃の所産と判断される。

27号住居（ＳＢ27）

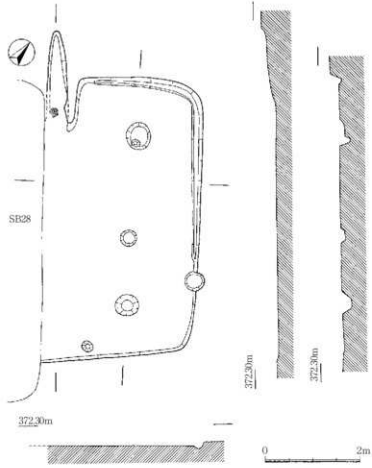


図73　Ⅱ区ＳＢ27（1：80）

ＳＢ27完掘状態（南東から）

【遺構】Ⅱ区の南西隅付近に位置し、ＳＢ28と主軸方向をほぼ同一にして重複している。カマドを通る主軸線から西側半分は重複するＳＢ28によって破壊されているが、カマドから東側は良好に遺存していた。カマドを住居北辺のほぼ中心部と仮定すると、ＳＢ27は東西・南北共に１辺が約６ｍの整美な隅丸方形を呈していたものと想定される。住居の主軸は、真北から西へ約38°傾いている。

遺構検出面から床面までの深さは、旧地形の高い側（北側）で20cm程だが、低い側（南側）では10cm程とごく浅かった。また、重複するＳＢ28の床面との間にも顕著な高低差があり、ＳＢ27の床面がＳＢ28の床面よりも30cm程高く位置していた。

住居北東側・南東側の床面には、直径50cm程の主柱穴が遺存しており、主柱穴を南北に結ぶライン上には一回り規模の小さなｐｉｔも確認されている。このことから、ＳＢ27の主柱は、核となる４本柱の間に、やや規模の小さな柱材を２本配した６本柱の構造であった可能性も指摘できる。なお、住居の北東側～東側にかけては、幅15～20cm程の壁溝も確認されている。

カマドは、東側の袖、煙道、それに西側の袖の一部が遺存していた。煙道は、カマドの両袖から北西方向に長く真っ直ぐに伸びており、カマドの焚き口から煙道の先端までは２ｍ近くに達する。カマドの底面、および両袖の内側部分は良く焼けて橙色に変色・硬化していた。カマドの袖の内側は、一部オーバーハング気味に遺存していたことから、構築当初のカマド内部の形状がドーム状に湾曲していたことを示すものと理解できる。

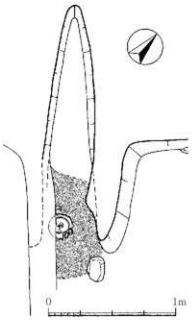


図74　ＳＢ27カマド微細図
（１：30）

ＳＢ27カマド土器出土状態

ＳＢ27カマド土器出土状態（拡大）

ＳＢ27カマド完掘状態

ＳＢ27カマド支脚（北東から）

カマドの焚き口付近からは、多くの土器片および、一辺20～30cm程の石材（礫）が１点出土している。この石材は、カマド東側の袖先端部より幾分西側、すなわちカマドの焚き口中心側に寄った位置から出土している。その位置関係から、カマドの袖石、もしくは焚き口に関する施設の一部であったものと推定される。土器片類は、接合の結果、甕２個体分（図75－６・７）と壺底部（同－５）、それに高坏１個体分（同－３）であった。この内、高坏は坏部を逆位に、カマド内部の底面に伏せた状態で設置されていた。柱状部が遺存していなかったものの、カマドの支脚として利用されたものと考えられる。高坏をカマドの底面に伏せた状態で設置し、カマドの支脚として転用した例は、今回の調査においてもＳＢ26、ＳＢ41など複数確認されており、当時の文化や地域性等を探る上で良好な一例といえる。なお、甕については、カマドに据えられていたものがそのままつぶれた状態で出土したものと理解される。壺の底部については、支脚の一部として用いられていた可能性もある。この他、カマドの東袖脇からは、甑１個体分（同－４）が出土している。

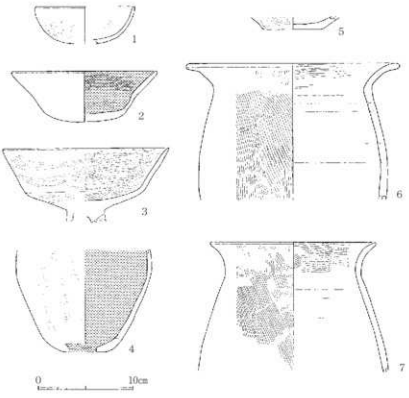


図75　ＳＢ27出土遺物（１：４）

【遺物】図示し得た遺物は７点である。

１は小型の坏である。断面は半月形を呈し、内外面共に縦方向のヘラミガキが施される。

２は坏である。外面は器面が剥離し、調整は不明瞭である。内面は口縁部がヨコハケのちヨコヘラミガキ、体部はヨコヘラミガキ調整で、黒色処理が施される。外面の稜線は不明瞭だが、内面の稜線は比較的明瞭で、器高のほぼ中心付近に位置している。

３は高坏である。坏部～脚柱状部上端までが遺存していた。坏部は内外面共に横方向のヘラミガキが施されている。なお、ヘラミガキの単位はいずれも５cm程の弧状を呈する断続的な単位のまとまりを有しており、外面は右回り、内面は左回りに調整が施されている。脚柱状部の上端には、わずかに三角形の透かし窓の痕跡が確認できる。透かし窓は３方向に設けられている。なお、坏部内面に黒色処理は施されていない。

４は瓶である。把手を有さない、小型の瓶に分類される。外面は縦方向のハケのちミガキが施されるが、摩耗しており単位は不明瞭である。内面は黒色処理が施される。底部には３cm弱の単孔が設けられている。

５は壺の底部である。外面には斜め方向のヘラミガキ、内面にもヘラミガキが施されるが、内面は調整単位が不明瞭である。底部外面は平底を呈する。

６は甕の口縁部～胴部上半である。口縁部は強く外傾し、大きく開く。外面は縦方向のハケメが明瞭に施され、口縁部は内外面共に横方向にナデられている。内面は口縁部付近のみ横方向のハケメの痕跡が確認できるが、胴部付近はナデ調整が主体となっている。輪積み痕は比較的明瞭に残っている。長胴傾向にある大型の甕と判断されるが、最大径は胴部中央付近か、やや上方に位置しているものと推測される。

７は甕の口縁部～胴部上半である。口縁部の開きは６の甕程強くなく、垂直気味に立ち上がった後緩やかに外方に開く。外面は縦方向のハケメ、内面は口縁部付近のみ横方向のハケメが施されている。胴部内面はナデ調整が施される。最大径は胴部のほぼ中央付近に位置しているものと推測され、全体的に丸味を有した形状を呈するものと理解される。

坏の形状および、脚部に三角形の透かし窓を有する高坏の存在等から判断して、本住居址は古墳時代後期前葉の所産と判断される。

28号住居（ＳＢ28）

【遺構】Ⅱ区の最南西端に位置し、ＳＢ27の西側半分と重複した状態で確認された。住居の北西隅部は発掘区域外であるため調査を行っていないが、発掘区域内においてはカマドを含めた住居の東側３分の２以上が良好に遺存していた。ＳＢ28は、東西・南北共に１辺が7.1m程の整美な正方形を呈し、比較的大型の住居として位置付けられる。カマドを通る主軸ラインは、真北から西へ約39°傾いており、重複するＳＢ27とその方向をほぼ一にしている。

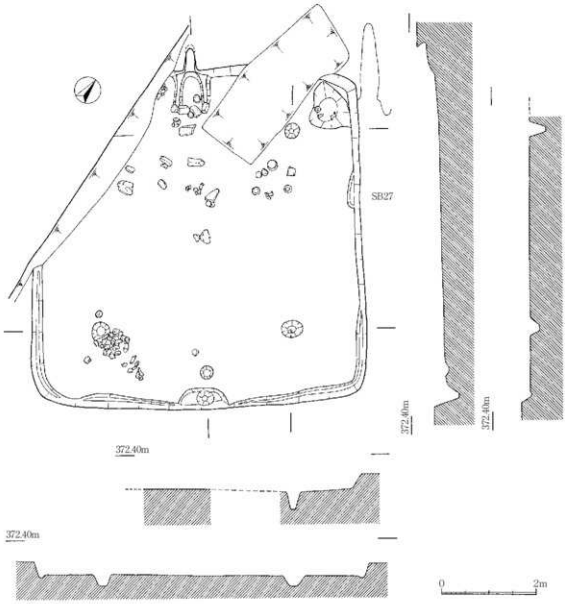


図76　Ⅱ区ＳＢ28（１：80）

遺構検出面から床面までの深さは、約40cm～50cmと、重複するＳＢ27に比べて30cm程深く掘り込まれている。床面は黄褐色の粘土で、硬く締まっていた。住居の北東・南東・南西側からは、それぞれ主柱穴が確認されており、発掘区域外の北西側も含めて、４本主柱の構造であったものと想定される。

ＳＢ28全景（南東から）

ＳＢ28集石出土状態

床面からは、カマドの前面～住居内の北側を中心に、人頭大の礫（川原石）が複数出土している。また、南西側の主柱穴付近からは、直径15cm程の円礫が多数敷き詰められた状態で出土している。住居北側の礫群については、ＳＢ７・ＳＢ26等で見られたものと同様の性格のものである可能性が指摘されるが、住居南西側に見られた敷石状の集石については、本遺跡内では他に例を見ないものである。周辺地域では、長野市柳原の小島柳原遺跡群・中俣遺跡１号住居址においても、住居内に同様の集石が確認されている（長野市教育委員会1992）。中俣１号住居址例は、住居の南西隅やや北側の壁際に、長径20cm程の川原石が11点程集められていた。本住居址例は、南西側の主柱穴に沿う形で、直径15cm程の平たい円礫が20点以上集められている。集石の南東側からは、ほぼ同じレベルで大型の壺（図78－16）が１個体分、つぶれた状態で出土している。これらの集石がどのように用いられたかは定かではないが、石そのものを食物や日常生活用品類の加工等に用いたか、あるいは集石の上で何らかの作業や行為を行っていたものと推測される。今後、さらに検討の余地があろう。

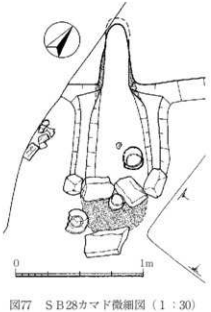


図77　ＳＢ28カマド微細図（１：30）

ＳＢ28カマド土器出土状態

ＳＢ28カマド土器出土状態（拡大）

カマドは、住居北辺のほぼ中央付近に造り付けられていた。煙道およびカマドの両袖が遺存しており、両袖の先端にはそれぞれ袖石が設置されていた。両袖石の間からは、天井石が中央部付近で二つに折れた状態で出土しており、その天井石の割れ目直上からは鉢（図78－９）が１点、ほぼ完形の状態で見つかっている。天井石の手前には、さらに大型の石材が１点横たわり、カマド底面の焼土はこの手前の石材付近にまで達していた。あるいは、この石材も焚き口の施設の一部であった可能性も指摘できる。左側の袖石と、このカマド手前の石材との間からは、内面黒色処理の高坏坏部（同－10）が、つぶれた状態で出土した。また、カマドの内部からは甕の胴部上半～口縁部が１点（同－21）、口縁部を下に向けた状態で出土している。さらに、カマド内部の中央付近には、カマドの支脚と考えられる先端が先細りした石材が１点、底面に立てられていた。

カマドの西側袖の脇からは、発掘区西端の壁に沿って高坏（同－11）等の土器がまとまって出土している。カマド脇から土器がまとまって出土する例は、本遺跡内においてもＳＢ25等複数の住居で認められる。これらの土器を日常用品と考えるならば、カマドを含めた調理施設周辺で調理時に用いたものか、あるいは飲食用の土器の保管（収納）空間としてカマドの脇を利用していた可能性を指摘することができる。

この他、住居内北側の床面一帯や、住居北東隅の土坑状の窪み内からも複数の土器類が出土している。

【遺物】図示し得た遺物は23点である。

１～８は坏である。１～３は断面が半月状を呈し、器高の低いもの、４は断面半月状だがやや器高の高いもの、５～８は須恵器坏蓋模倣形態のもの、と大きく３通りに分類される。この内、内面黒色処理が施されるのは８のみで、他は全て黒色処理が施されていない。全体的に外面調整は不明瞭のものが多いが、内面調整はヨコヘラミガキが主体となっている。１の坏は、外面底部付近にヘラケズリの痕跡も確認される。

９は鉢である。外面の一部にヨコヘラミガキが確認できるが、内外面共に摩滅著しく調整は不明瞭である。内面黒色処理は施されていない。

ＳＢ27・28完掘状態（南東から）

10～14は土師器の高坏である。この内、11・14の高坏は坏部から脚部まで全体像を復元することができた。11・14の高坏はいずれも脚柱状部の２分の１、もしくはそれ以上が棒状・中実となっている。４点の高坏の坏部はいずれも黒色処理が施されており、12の高坏は坏底部付近に一周する円形の暗文も認められる。坏部は10のみ内面底部付近に稜線が存在するが、他の高坏はいずれも内外面共に稜線が認められず、単純に外方に開くものとなっている。基本的に坏部内外面は横方向のヘラミガキ、脚柱状部は縦方向のヘラミガキが施される。

15は須恵器の高坏脚部片である。脚残存部に透かし孔等は認められない。

16は口縁部径21.0cm、器高34.0cmの大型の壺である。胴部外面は上位～下位にかけて斜めもしくは横方向のヘラミガキ、最下部はヘラケズリが施されている。内面は全体的にヘラ状工具によるナデ調整となっている。

17は鉢である。外面は縦方向のハケメ、内面は斜めのヘラナデが施されている。

18～22は甕である。20・21は長胴の大型の甕と考えられ、他は小型の甕といえる。外面調整は縦方向のハケメ、内面は胴部上位～口縁部付近にかけて横方向のハケメ調整が施されるものが主体となっている。

23は瓶である。把手を有さない、小型の単孔瓶である。器高の割に口縁が大きく開く。

以上の遺物の様相より、本住居址は古墳時代後期末葉（７世紀代）に位置付けられる。

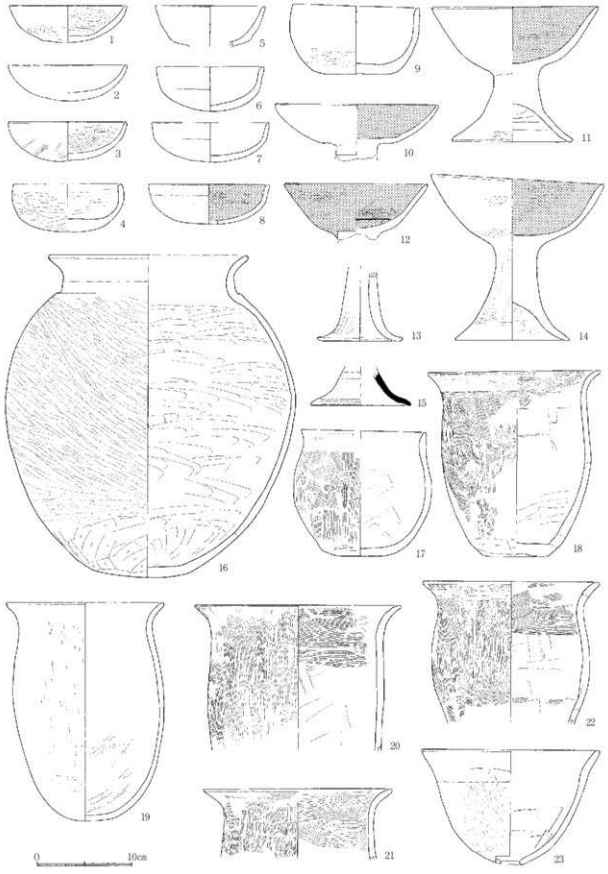


図78　ＳＢ28出土遺物（１：４）

30号住居（ＳＢ30）

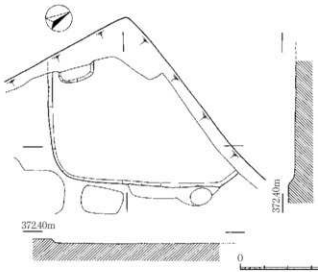


図79　Ⅱ区ＳＢ30（１：80）

【遺構】発掘区の西端、ＳＢ27・28から北へ４ｍ程の位置に所在する。住居の北側～西側にかけては、発掘調査区域外であるため、詳細は不明である。

遺構検出面から床面までは13cm程で、床面は黄褐色を呈する。調査区域内からは、主柱穴や壁溝といった目立った遺構は確認されなかった。

遺物の出土も希薄で、床面からまとまった状態での出土は認められなかった。

【遺物】小片が多く、図化には至らなかったが、土師器片が主体であり、遺物の様相からは古墳時代後期に比定される可能性が高い。

31号住居（ＳＢ31）

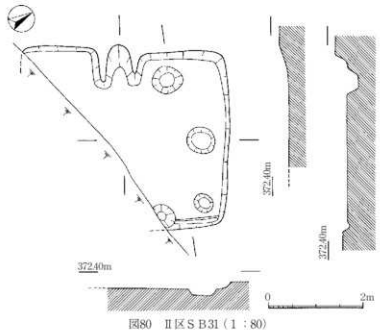


図80　Ⅱ区ＳＢ31（１：80）

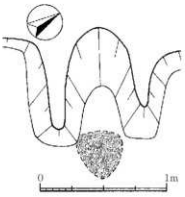


図81　ＳＢ31カマド微細図（１：30）

【遺構】ＳＢ30から東へ４ｍ程の場所に位置する。住居址の南半は、大規模な撹乱坑により破壊されており、遺存していなかった。住居は、北辺が約4.4m、東辺が約3.8mの長方形を呈する。検出面から床面までは25cm程で、掘り込みは比較的浅い。

床面には、北壁～東壁沿いに幾つかのｐｉｔが認められた。この内、カマドの北東脇のｐｉｔは貯蔵用、あるいは収納用施設の可能性が指摘される。内部からは、高坏（図82－４）が１点出土している。南端のｐｉｔは後世の別遺構と考えられ、東壁沿い中央付近と南東隅のｐｉｔのみ、ＳＢ31に伴う柱穴の可能性が指摘される。その位置関係と住居の規模からみて、ＳＢ31は４本主柱構造ではなく、より簡易な構造であった可能性も指摘される。

ＳＢ31完掘状態（南東から）

カマドは、北辺のほぼ中央部に造り付けられていた。両袖が遺存し、カマドの内部底面は良く焼けて橙色に変色・硬化していた。ただし、明瞭な煙道およびカマドの袖石・天井石・支脚等は遺存していなかった。遺物の多くは、カマド周辺より出土している。

【遺物】図示し得た遺物は７点である。

１は坏である。外面は縦方向のハケメのちヨコヘラミガキ、内面は口縁部付近にハケメの痕跡が認められ、全体的にヨコヘラミガキと黒色処理が施されている。稜線は内外面共にさほど明瞭ではないが、口縁部と体

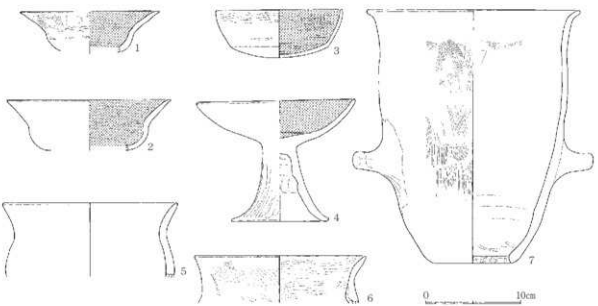


図82　ＳＢ31出土遺物（１：４）

部の境界は器高のほぼ中央付近に位置している。

２も１と同様の坏であるが、１に比べやや大振りである。外面は調整不明瞭、内面は横方向のヘラミガキと黒色処理が施される。

３は須恵器坏蓋模倣形態の坏である。底部は丸味を有し、口縁部も内湾気味で丸味を帯びる。稜線は下方に位置する。調整は内外面共に横方向のヘラミガキで、内面は黒色処理が施される。

４は高坏である。坏部断面は半月状に近いが、内面底部付近に沈線状の稜線が巡る。坏部内外面は横方向のヘラミガキ、脚部は縦方向のヘラミガキが施される。坏部内面は、黒色処理される。脚部は中実ではなく、脚部内面は上方に粘土紐巻き上げ痕が残っている。４はカマド東脇の貯蔵用、もしくは収納用土坑内より出土している。

５は甕である。内外面共に摩滅著しく、調整は不明である。覆土中からの出土である。

６は、甕もしくは壺の口縁部である。外面は斜めのハケメのちヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキが施されている。口縁部の立ち上がりは垂直気味で、広口の壺の口縁部である可能性が高い。

７は甑である。２個一対の把手を有する大型の甑で、把手は胴部中位やや下方に貼り付けられている。胴部は縦長だが幾分丸味を有している。底孔部は刀子状の器具で面取りされ、細かいヨコヘラミガキが施されている。

以上の遺物の様相から、本住居址は古墳時代後期前葉の所産と考えられる。

33号住居（ＳＢ33）

【遺構】Ⅲ区の中心部よりやや北西側に寄った位置に確認された。住居は１辺約８ｍの隅丸方形を呈するものと想定され、本調査区内では大型の住居に位置付けられる。住居の中央付近は旧建物の基礎による撹乱が東西に走り、東側はＳＢ38・40と重複しているため、全体の遺存状態は良好とはいえない。ただし、カマドについては北壁中央部に良好な状態で遺存していた。

住居の床面付近からは、多量の小礫（砂利）が出土している。この砂利層は、旧河川等の作用によって堆積したものと考えられるが、ＳＢ33の床面はこの砂利層と地山のローム層の境界付近に位置しており、砂利層の直下は地山の鮮やかな黄色土が確認された。なお、床面には明確な主柱穴は確認できなかったが、住居の南壁～西壁にかけては幅25cm程の壁溝が確認された。

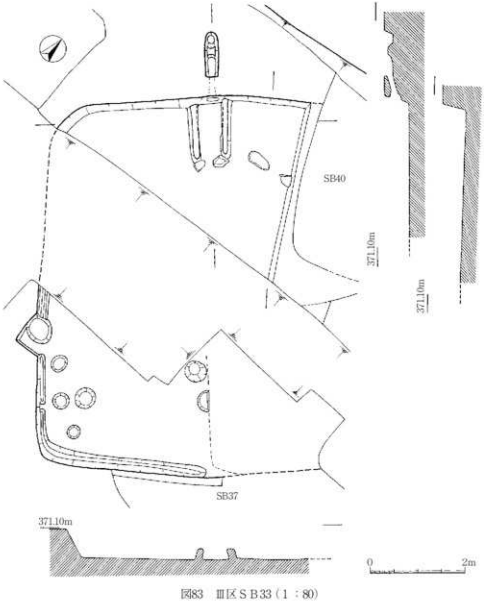


図83　Ⅲ区ＳＢ33（１：80）

ＳＢ33遺物出土状態（南東から）

ＳＢ33完掘状態（南東から）

カマドは、両袖および両袖石、それに煙道が残存していた。カマドの袖は北壁際から袖石の先端部までで約１m40cm、煙道の長さも１m30cmに達し、住居の規模に見合う大型で長大なカマドであるといえよう。さらに特筆すべきは、煙道の天井部が崩壊せずに遺存していた、という点である。これは、ＳＢ33の掘り方が、他の住居址の多くに比べて30cm以上も深く、遺構検出面から住居の床面までがおよそ65cmに達していたことにも因るものと考えられる。住居北壁の壁面中央付近から、住居の北西外側へ、真っ直ぐに掘り抜かれている。なお、カマドの両袖内側、および煙道の入り口付近は、被熱により橙色に変色・硬化していた。

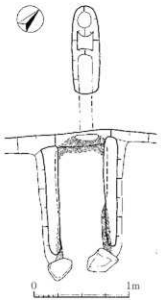


図84　ＳＢ33カマド微細図
（１：40）

ＳＢ33カマド完掘（正面から）

ＳＢ33カマド土器出土状態（焚き口）

ＳＢ33カマド土器出土状態（正面から）

ＳＢ33カマド西脇土器出土状態

ＳＢ33カマド東脇土器出土状態

ＳＢ33土器出土状態（長胴甕）

ＳＢ33カマド完掘状態（全景）

遺物は、住居中央付近の撹乱より北側の床面付近を中心に、多数の土器が出土している。中でも、カマド付近からの遺物の出土が目立つ。まず、カマド内からは焚き口付近より甕（図86－25）がつぶれた状態で出土している。また、袖石の前面からは、小型の坏（図85－１）と甕（図86－26）がそれぞれ１点ずつ出土した。

カマドの前方からは、土器の他に約25cm四方の石材が２点出土している。この内１点は両袖石の中間前面付近より、またもう１点はこの石材よりさらに南東へ40cm程離れた位置から出土している。いずれも床面直上からの出土であるが、これらの石材は互いに接合することが判明し、形状や被熱の痕跡からカマドの天井石であることが明らかとなった。

このように、カマドの天井石が半分に割れた状態で出土する例は、今回の調査区内でもＳＢ１・ＳＢ28等複数認められるところである。ただし、天井石の片方の破片がやや離れた位置から出土したのは、本例のみである。天井石を含めたカマドが、住居の廃絶時に意図的に破壊された可能性を示唆するものともいえよう。

カマドの東側・西側の両脇からも、多量の土器が出土している。中でも、カマドの西脇・北壁寄りの隅からは、カマドで発生したと考えられる茶褐色の焼土が小山のように積まれており、その焼土の中から甕が５点（図85－16・17・20・21、図86－22）、壺１点（図85－11）、坏１点（同－３）、鉢２点（同－４・６）、甑１点（図86－27）等、多数の土器が割れた状態で出土した。カマドの脇から多数の土器がまとまって出土する例は、本調査区内にもＳＢ25・28等複数認められるが、焼土によって埋められた状態で発見されたのは本例のみであり、その出土状態の特異性が窺える。これは、カマドの脇を単なる収納空間ではなく、カマドで生じた灰や焼土とともに破損した土

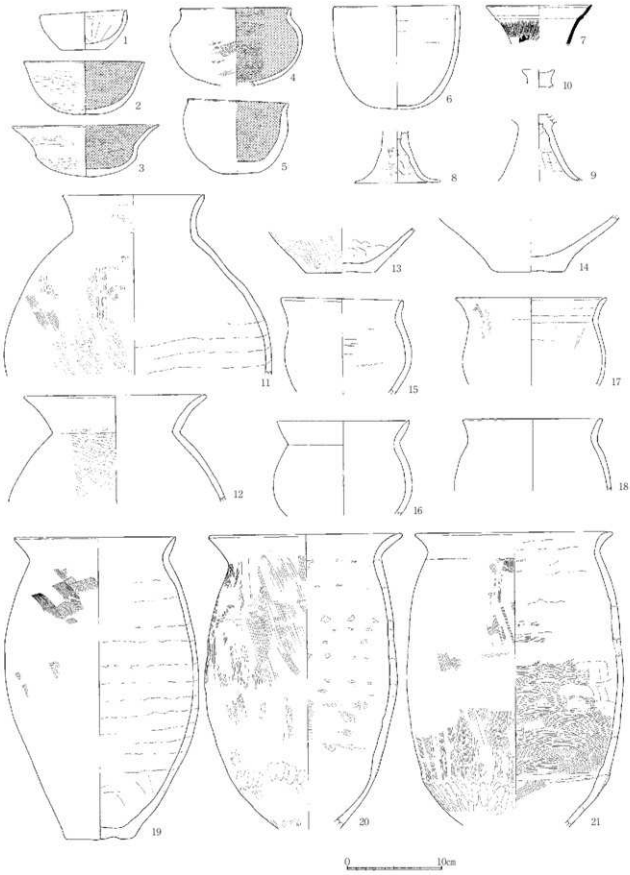


図85　ＳＢ33出土遺物①（１：４）

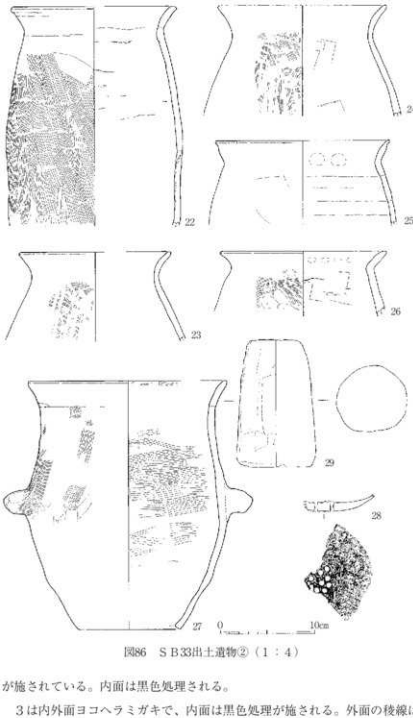


図86　ＳＢ33出土遺物②（１：４）

器の廃棄場（置き場）としたか、もしくは住居廃絶時の儀礼に伴う祭祀行為の一例を表す可能性を指摘できよう。

カマドの東袖脇からは、西側同様、甕（図85－18）や壺（同－14）、高坏（同－８）、甑（図86－27）等がまとまって出土している。ただし、西側のような焼土の小山は認められなかった。なお、甑（図86－27）はカマドの両袖脇からそれぞれ同一個体としての破片が出土していることから、カマドにかけられた状態で破壊され、両脇に崩れ落ちたものと理解できる。

この他、カマドの西側、約1.2m付近の床面からは、長胴の甕（図85－19）が１点、つぶれた状態で出土している。総じて、床面直上より多数の土器が出土している。

【遺物】図示し得た遺物は29点である。

１～３は坏である。１は小型の坏で、外面はナデ、内面はヘラナデ調整となっている。

２は断面がやや深身で半月状を呈する。内外面共にヨコヘラミガキ、外面底部付近はケズリ調整が施されている。内面は黒色処理される。

３は内外面ヨコヘラミガキで、内面は黒色処理が施される。外面の稜線はやや不明瞭だが、内面の稜線は明瞭で、器高のほぼ中位に位置している。

４～６は鉢である。４は内外面共に丁寧なヨコヘラミガキが施され、内面は黒色処理される。胴部断面は楕円形状で、口縁部は上方に向かってつまみ上げられるように短く立ち上がる。

５は外面が荒れて不明瞭だが、内面はヨコヘラミガキが確認でき、黒色処理が施されている。

６は深身の鉢である。内外面共にナデ調整。黒色処理は施されていない。

７は須恵器甕の口縁部である。頸部外面には左回転の櫛描波状文が施される。櫛の本数は20本前後とみられる。口縁部下端には、帯状に黒色の付着物が認められ、破断面にも付着していた。これは、口縁部が何らかの理由で破損した後、漆もしくはタール状の接着剤でつなぎ合わせたか、あるいは単に黒色物が付着した可能性を示して

いると言える。その形状から、ＴＫ23～47型式に位置付けられる。床面付近からの出土である。

８・９は高坏の脚部である。いずれも下方に向かってハの字状に開く。８は外面に縦方向のハケメが施され、内面は粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。９は外面調整が不明瞭だが、８同様内面には粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残る。なお、９は覆土中の出土であり、混入品の可能性もある。

10は土師器蓋のつまみ部である。上面には窪みを有している。覆土上～中層からの出土である。

11～14は壺である。11は胴部の幅に対し口縁部が狭まる大型の壺で、口縁部～胴部中位までが残存する。外面は縦方向のハケメのちヘラミガキ、内面はナデ調整で胴部中位に輪積み痕が残る。口縁部は垂直気味に立ち上がり、上方でやや外傾している。12は11に比べ、口縁部がくの字状に強く屈曲する。胴部外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデ調整となっている。13・14は壺の底部である。13は外面にタテヘラミガキ、内面にはヘラナデが施され、輪積み痕も残る。14は内外面ともに調整は不明瞭だが、大型の壺の底部と推測される。

15～26は甕である。この内、15・16はその法量から鉢にも分類可能な小型品である。いずれも内外面の調整は不明瞭だが、15に比べ16の頸部稜線が明瞭である。

17・18は小型の甕である。17は外面にわずかにタテハケの痕跡が窺えるが、やはり摩滅のため不明瞭である。内面にはヘラナデの痕跡が残る。18は、内外面共に調整不明瞭。最大径は、17が口縁部に位置しているものとみられるのに対し、18は胴部に位置している。

19～26は長胴甕である。この内、19～21は比較的残りが良い。19は住居北西側の床面からつぶれた状態で出土し、甕の中では唯一口縁部から底部まで復元が可能であった。口径17.0cm、器高32.1cmで、最大径は胴部中位～上半に位置している。全体として、長胴ながらいまだに丸味を保つ段階の甕といえる。底部は輪台状に窪みが巡る。20は底部以外が復元可能であった。19同様大型の長胴甕だが全体に丸味を有しており、胴部の最大径は胴部中央付近に位置している。外面は縦方向のハケメ調整で、底部側には粘土を貼り付けた後に、指でオサえた痕跡が明瞭に残る。これは、21の甕にもみられ、同様の技法で製作されたものとみられる。内面は、下位にハケメの痕跡が認められ、上位は粘土紐の輪積み痕が完全にナデ消されない状態で残っている。21は、19・20に比べ胴部の幅が広く、全体として寸胴状に復元された。外面はタテハケ、内面中位下方にはヨコハケが明瞭に残る。底部付近には粘土貼り付け後のユビオサエ痕が巡っている。22は、上記３点の甕に比べ、幾分細身である。また、胴部はさほど丸味を有さず、全体として直線的に下方に伸びる。外面は明瞭なハケ調整が施され、内面はナデられるが上位には輪積み痕がわずかに残っている。

23～26は甕の口縁部～胴部上位である。いずれの甕も、胴部に丸味を有する形状のものと推測される。23・24は外面に縦方向のハケメ調整、25・26はハケのちナデ調整が施される。25・26は別個体ながら製作技法が似通っている。口縁部内面には指頭圧痕が一定の間隔で巡り、内面の輪積み痕も比較的明瞭に残る点で共通している。

27・28は瓶である。27は、２個一対の把手を有する大型の瓶で、把手は胴部のほぼ中央付近に貼り付けられている。外面は把手付近に丁寧なハケメが施され、一部にヘラミガキも確認される。内面は胴部中位に横方向のハケメが明瞭に巡り、口縁部付近および底部付近はナデられている。底の孔は刀子状工具によって切り取られ、端部は面を有している。最大径は胴部中位に位置し、全体として丸味を有している。28は多孔瓶の底部片である。現存部には径５～６㎜程の小孔が、10個前後認められる。覆土中より出土しているため、混入品の可能性もある。

29は土製のカマド支脚である。カマド内ではなく、覆土中より出土しているため、混入品の可能性もある。２～４㎜程の砂粒を多量に含み、全体として胎土はかなり粗い。断面は正円に近く、両端部は平坦である。

混入品の可能性のある遺物の他は、全てカマド周辺および床面直上からの出土である。２・３の坏の形状、長胴甕や瓶の形状等から判断して、本住居址は古墳時代中期末～後期初頭頃の所産であるものと判断される。

35号住居（ＳＢ35）

【遺構】Ⅲ区の南西端に位置する。大半は調査区外に相当するため、住居全体の詳しい規模等は不明であるが、概ねＳＢ33と同規模、すなわち約８ｍ四方の隅丸方形を呈する大型の住居と想定される。主軸は真北から西へ約33°傾いている。主軸の方向および南壁のラインはＳＢ33とほぼ同一で揃っていること、および出土した土器の様相からも、この２軒はＳＢ33→ＳＢ35の順で、続けて構築された可能性も指摘できる。

遺構検出面から床面までは約25cmで、東壁～南壁にかけては幅約25cm程の壁溝が確認された。主柱穴と考えられるｐｉｔは北東側で確認されたものの、南東側では確認することができなかった。

床面直上からの遺物の出土はさほど多くはないが、住居内の南東側、東壁壁溝脇より坏が１点（図88－２）、底部のみ完全な状態で出土している。

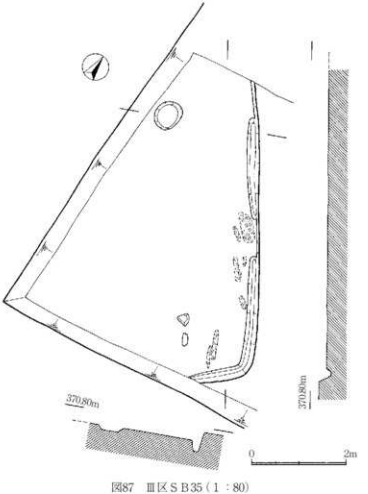
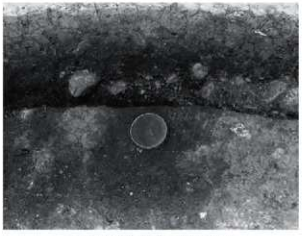


図87　Ⅲ区ＳＢ35（１：80）

ＳＢ35完掘状態（南東から）

ＳＢ35遺物出土状態（南東から）

本住居で特筆されるのは、床面から炭化材が複数出土した点である。特に、東壁沿いの床面から集中して出土している。近隣地域で住居内から炭化材が良好に出土した例は、長野市三輪８丁目の三輪遺跡第２号住居址例（長野市教育委員会1980）や、長野市平林の平林東沖遺跡ＳＢ16例（長野市教育委員会2007）等がある。これらの住居址例では炭化材が住居の中心付近から壁面側に向けて放射状に広がった状態で出土している。本住居例においては、炭化材は東壁にほぼ平行する形で出土しており、壁面に向けて放射状に広がった方向での出土は認められなかった。したがって、本例の炭化材においては、屋根の垂木材ではなく、桁材や梁材、もしくは住居の壁材等に用いられていた部材の可能性を指摘できる。



ＳＢ35遺物出土状態（南西から）

ＳＢ35炭化物出土状態（南西から）

なお、前２例は焼失家屋（火災にあった家屋）と想定されているが、本例においては遺存状態が良好ではなく、垂木材も全く遺存していなかった。従って、焼失家屋というよりは、住居廃絶時に柱や垂木等大まかな屋根材を除去し、残った部材のみを住居内にまとめて廃棄・焼き払った可能性を指摘できる。

【遺物】図示し得た遺物は３点である。２のみ床面の直上出土である。

１・２は、坏である。１は、内外面共にヨコヘラミガキが施され、内面は黒色処理される。内面のミガキは、幅５cmほどで弧状のまとまった単位を有し、反時計回りに施されている。２は、坏の底部である。口縁部は全く遺存していなかった。内外面ヨコヘラミガキ調整で、内面は黒色処理される。稜線は最下方に位置し、１よりも新相を呈する。３は甕の底部で、輪台状となっている。

遺物は僅少だが、２の坏の様相から判断して、本住居址は古墳時代後期中葉頃の所産の可能性が指摘される。

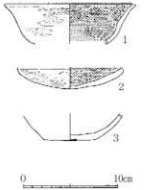


図88　ＳＢ35出土遺物（１：４）

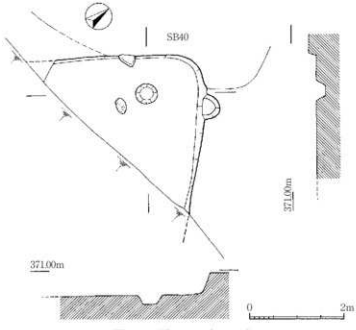


図89　Ⅲ区ＳＢ38（１：80）

38号住居（ＳＢ38）

【遺構】Ⅲ区のほぼ中央部、既存建物の基礎による撹乱の北側で確認された。ＳＢ33・ＳＢ40と重複しており、３軒の住居址の中ではＳＢ33に次いで２番目に床面の位置が低い。遺構検出面から床面までは約45cmで、サブトレンチ掘削の結果、床面は旧河川等の作用により堆積した砂利層直上付近に位置していることが判明した。

ＳＢ33・38・40共に遺構覆土の違いはわずかで、プランや新旧の確定には困難を伴った。しかし、切り合い関係や遺物の様相等から、ＳＢ33→ＳＢ40→ＳＢ38の順で構築されたもの、と判断される。

ＳＢ38完掘状態（南東から）

ＳＢ38遺物出土状態（南東から）

ＳＢ38北壁中央付近遺物出土状態

ＳＢ38遺物出土状態（東から）

ＳＢ38遺物出土状態（拡大）

ＳＢ38遺物出土状態（拡大）

ＳＢ38は、西側および南側が撹乱により調査不能であったため、全体の詳細なプランや規模は不明である。ただし、撹乱の南側にはＳＢ38の床面が確認されなかったことから、概ね一辺が４ｍ程の隅丸方形を呈するものと想定される。

本住居においては、北壁寄りの床面から遺物がまとまって出土している。中でも、北壁のほぼ中央付近には、大型の甕の上半部（図90－３）に小型の甕（同－４）が重ねられ、入れ子になった状態で出土している。下方の甕は、胴部の中央付近で半截され、口縁部を上に向けた状態で床に置かれており、その中に口縁部を欠損した小型の甕が入れられていた。４は底部まで遺存しており、甑のように底部を穿孔する等の加工は認められなかった。

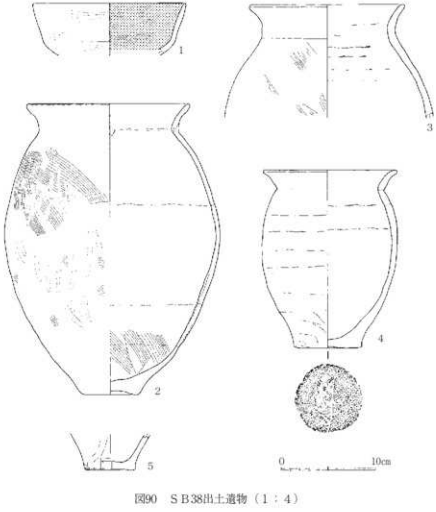


図90　ＳＢ38出土遺物（１：４）

本住居から明確なカマドの痕跡は確認されていないが、あるいはこの入れ子状の土器付近が、住居の調理施設に関係していた可能性も指摘される。

入れ子の土器から南東へ80cm付近の位置からは、甕が１個体（図90－２）、つぶれた状態で出土している。この甕の脇にも北壁沿いのものとほぼ同じ大きさの礫が出土しており、互いに関連する何らかの施設であった可能性も想定される。

【遺物】図示し得た遺物は５点である。５は覆土中からの出土であるが、他は全て床面直上からの出土である。

１は須恵器坏蓋模倣形態の坏である。内外面共にヨコヘラミガキが施され、内面は黒色処理される。小片のため、口径および傾きは幾分変更される可能性もある。

２は甕である。口縁部～底部までが復元された。長胴傾向にある大型の甕であるが、最大径は胴部のほぼ中央に位置しており、全体に丸味を帯びている。外面はハケメののち、部分的に縦方向のヘラミガキが施されている。内面は、底部付近にハケメが残るが、胴部下位から上位にかけてはナデ調整となっている。なお、内面には３ヶ所ほど、輪積み痕が明瞭に残っている。

３は甕の口縁部～胴部上半である。４の土器が中に入れられ、入れ子状に床面に置かれていた。土器を支える台としての役割を果たしていた可能性もある。外面はハケ調整、内面上方には粘土紐の輪積み痕が残る。２同様の、全体に丸味を帯びた形状を呈するものと判断される。

４は小型の甕である。３の甕の中に入れられた状態で出土した。口縁部の２分の１を欠くが、他は完存していた。調整は内外面共にナデ調整が主体で、内面の他外面にも複数の輪積み痕が残っている。底部外面には木葉痕が認められる。

５は甑、もしくは有孔鉢の底部である。孔は直径９㎜程の単孔で、底部外面には籾痕らしき痕跡も複数確認できる。覆土中より出土しているため、混入品の可能性もある。

以上の遺物の様相から、本住居址は古墳時代後期前葉の所産であるものと判断される。

39号住居（ＳＢ39）

【遺構】ＳＢ33と35の中間、撹乱付近に住居址の南西端部付近のみ確認された。検出面から床面までは10㎝程で、他の住居址に比べると比較的掘り込みは浅い。

床面は黄色のロームで、ｐｉｔが２ヶ所確認された。この内、位置関係や規模等から、北側のｐｉｔが主柱穴であるものと想定される。なお、壁溝は認められず、床面からまとまった遺物の出土も見られなかった。

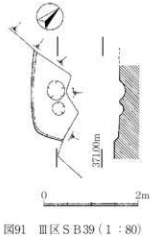


図91　Ⅲ区ＳＢ39（１：80）

ＳＢ39完掘状態（南東から）

【遺物】出土した遺物は僅少で、また小片ばかりのため図示し得ない。少量ながらも、出土した遺物は古墳時代後期頃の所産と推測されるが、明確な時期を特定するには至らなかった。

40号住居（ＳＢ40）

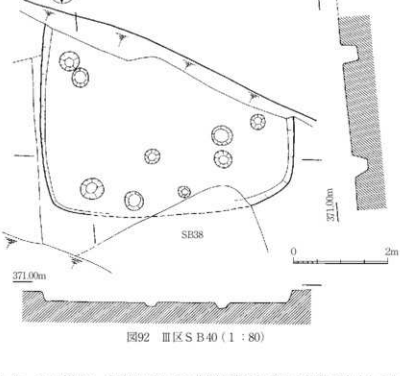


図92　Ⅲ区ＳＢ40（１：80）

【遺構】Ⅲ区のほぼ中央、北壁沿いに位置する。ＳＢ33・38と重複しており、一辺約5.4ｍの隅丸方形に復元される。遺構検出面から床面までの深さは約30㎝で、３軒の中では床面の位置が最も高い。床面には、複数のｐｉｔが認められたが、この内の幾つかは主柱穴に相当するものと考えられる。なお、壁溝は確認されておらず、カマドも北側の発掘区外に位置しているものと推測される。

遺物は、住居の南壁沿い、ＳＢ38との境界付近より数点出土している。この内、ＳＢ38北壁沿いの礫先端付近からは、高坏が１点（図93－３）逆位に倒れた状態で出土した。この高坏は、坏部がＳＢ40の床面に幾分埋もれた状態で出土している。ＳＢ40ではなく、ＳＢ38に伴う可能性も指摘されるが、ＳＢ38に伴うと想定すると、ＳＢ38の床面からは逆に５㎝以上高い位置に相当してしまう。したがって、この高坏については、ＳＢ40のｐｉｔ状の窪みに落ち込んだ（もしくは意図的に埋められた）ものとして理解したい。なお、この高坏の周辺からは、内黒の坏も１点（図93－１）出土している。

ＳＢ40完掘状態（南東から）

ＳＢ40遺物出土状態（南東から）

ＳＢ40遺物出土状態（南東側中央付近拡大）

ＳＢ40高坏出土状態（南東から）

ＳＢ40東側高坏出土状態近接写真（北から）

ＳＢ40？　西側高坏出土状態近接写真（北から）

この他に、ＳＢ38北西端部付近からは、図93－３の高坏とほぼ同型式の高坏が１点（図93－４）、やはり逆位に倒れた状態で出土している。これら２点の高坏は、出土レベルに顕著な差は無く、形状からもほぼ同時期の所産のものと推測される。出土位置は住居外に相当するが、この付近は住居が複雑に切り合い、プランが判然としないため、ＳＢ40に伴っていた可能性を考慮して、ここに報告した。

【遺物】図示し得た遺物は４点である。

１は坏で、断面が半月状を呈する。内外面共にヘラミガキが施され、底部外面にはケズリの痕跡も確認できる。

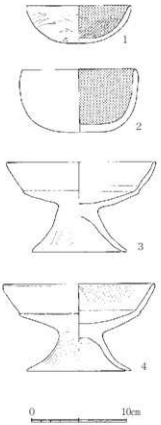


図93　ＳＢ40出土遺物（１：４）

内面は黒色処理されている。

２は坏、もしくは鉢に分類される。内面は黒色処理されるが、調整は内外面共に不明瞭である。覆土中からの出土のため、混入品の可能性も指摘される。

３・４は高坏である。両者共に短脚で、器高の低いタイプに分類される。３は、内外面共に器面は荒れて、脚部の一部に縦方向のヘラミガキが確認できるのみである。坏部は須恵器坏蓋模倣形態で、内外面共に稜線は明瞭である。内面の稜線付近は、ヨコナデにより沈線状に窪んでいる。内面黒色処理は施されていない。口縁部は内湾気味に立ち上がり、稜線付近と口縁部上方はやや薄手となっている。

４は、３に比べて脚部がさらに低く、脚端部は外方に大きく開く。脚部外面にはタテヘラミガキ、坏部内面には斜めのヘラミガキが施されている。坏部と脚部の外面接合部付近には、ハケメの痕跡も確認される。内外面共に稜線は明瞭である。口縁部は３同様、幾分内湾気味に立ち上がるが、口縁部の厚さに大きな変化は認められない。また、内面黒色処理も施されていない。

以上の遺物の様相から、本住居址は古墳時代中期末～後期初頭頃の所産と判断される。

41号住居（ＳＢ41）

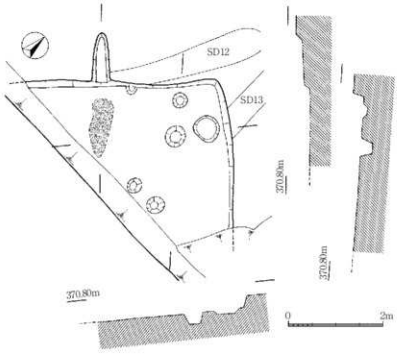


図94　Ⅲ区ＳＢ41（１：80）

【遺構】Ⅲ区の中央部からやや東寄り、南壁沿いに確認された。住居の西側および南側は発掘区域外および撹乱のため、全体の規模等詳細は不明である。ただし、北壁のカマド煙道付近を北辺の中央と仮定すると、約５ｍ四方の方形を呈するものと想定される。

遺構検出面から床面までは25cm程で、床面には北東側の主柱穴を含む複数のｐｉｔが確認された。この住居址の最も特徴的な点は、カマドの遺存状態である。カマドは、煙道が確認されたものの、両袖および袖石は全く遺存していなかった。カマド内部の床面には、被熱により赤褐色に変色した部分が認められたが、煙道

ＳＢ41完掘状態（南東から）

ＳＢ41遺物出土状態（南東から）

ＳＢ41遺物出土状態（東から）

ＳＢ41遺物出土状態（北東隅須恵器甕）

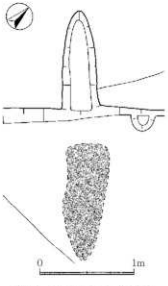


図95　ＳＢ41カマド微細図
（１：40）

ＳＢ41カマド

も含めて変色および硬化の度合いが低い。したがって、本住居址は比較的短い期間使用されていた可能性が指摘される。カマドの袖および袖石が全く遺存していなかったのは、住居廃絶時にカマドを完全に破壊し、取り除いたか、もしくは移動式のカマドが据えられていた可能性も想定される。

なお、カマド内部に相当する位置からは、口縁部を欠いた高坏が１点（図96－３）逆位で据えられており、この高坏付近からは直口壺（同－５）や棒状の石材も出土している。この内、逆位に据えられた高坏は、ＳＢ26や27等と同様、カマドの支脚として用いられていたものと考えられる。口縁部については、破損したものを支脚として再利用したか、もしくは据える際に意図的に打ち欠いて除去した可能性が指摘される。

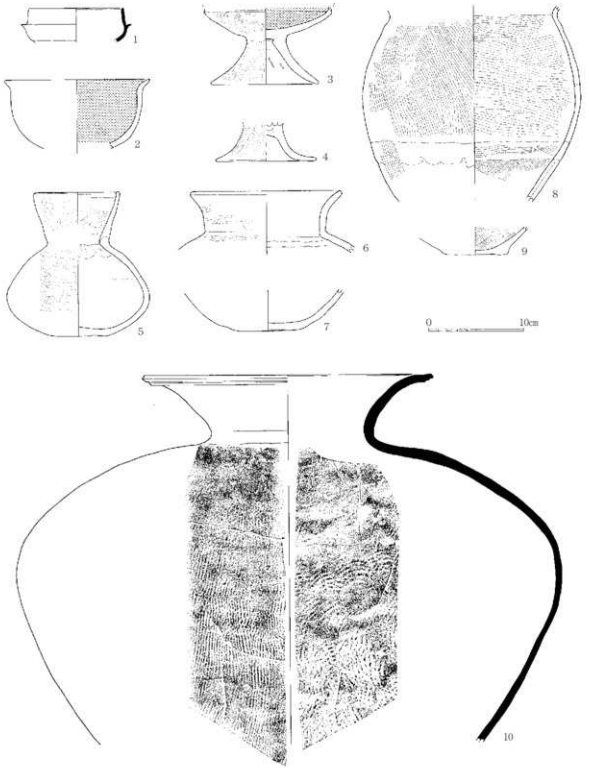


図96　ＳＢ41出土遺物（１：４）

この他、住居の北東隅付近からは、須恵器の甕（図96－10）の破片が多数、折り重なった状態で出土している。出土状態からみて、住居の隅に置かれた甕が、住居廃絶時、あるいは廃絶後につぶれ、折り重なったものと理解される。なお、底部付近は全く遺存していなかったことから、住居廃絶時には既に胴部下方～底部を失った状態で住居内に置かれていたか、もしくは住居廃絶に併せて住居内に廃棄された可能性が考えられる。

【遺物】図示し得た遺物は10点である。

1は須恵器の坏身である。破片資料であり、また覆土中からの出土であるため、混入品の可能性もある。口縁部は幾分内傾しながら直立気味に立ち上がる。口縁端部にはわずかに沈線状の稜線が巡っている。底部は遺存していないため全体の器高は不明であるが、受け部の位置は器高のほぼ中位かやや上方に位置するものと考えられる。受け部は先細りし、断面が三角形に近い。以上の様相から、この須恵器坏身は古墳時代中期後葉、ＴＫ47型式に位置付けられる。

2は深身の土師器坏である。断面は半球形状で､口縁端部が外方に向かってわずかに開く。外面は調整不明瞭、内面はわずかに横方向のヘラミガキの痕跡が確認できる。内面は黒色処理が施される。カマド周辺から出土している。

3･4は高坏である。3は、口縁部を全て欠くが、他は完存している。坏部外面はハケメのちタテヘラミガキ、内面は坏底部中心方向に向かう斜めのヘラミガキが施されている。内面は黒色処理される。脚部外面は大きく2段に渡って施される縦方向のヘラミガキ、内面はハケメの当たり痕が認められる。坏部は、元々須恵器坏蓋の模倣形態を示すものと判断される。

4は高坏の脚部である。外面には縦方向のヘラミガキが施される。器高の低い、短脚の高坏の脚部といえる。

5～7は壺である。5は直口壺である。全体の2分の1程度の遺存率である。最大径は体部下方に位置し、全体として下膨れ状である。口縁部は外傾しながら立ち上がった後、端部付近でわずかに内湾・肥厚する。体部外面は斜め～横方向のヘラミガキ、口縁部外面は斜めのヘラミガキが施される。内面は、口縁部が横方向のヘラミガキ、体部はナデ調整となっている。

6は壺の口縁部である。垂直気味に立ち上がった後、上方で外傾する。外面はヨコヘラミガキが施されているが、内面は不明瞭である。頸部内面には粘土紐輪積み痕が残る。

7は壺の底部である。内外面共に調整不明瞭。底部外面はケズリののちナデられている。

8・9は土師器甕である。8は胴部のみの遺存である。胴部外面上方は縦方向のハケメ、内面上方は横方向のハケメが明瞭に施される。胴部下方には内外面共に粘土の接合痕が明瞭に残る。最下段の接合部においては、外面で上方からの粘土を覆い被せるように貼り付けており、内面では接合部までを明瞭なハケメで調整している。最下段の接合部の2～2.5cmほど上方には、ふたたび粘土の接合痕が認められる。外面においては接合後に縦方向のハケメを部分的に施しているが、内面は接合部と接合部の間を横方向にハケ調整している。体部は丸味が強く球胴状で、長胴化する以前の段階の甕であると考えられる。

10は須恵器の大甕である。口縁部～胴部下半までを復元できた。口径30.6cm、復元残存器高39.5cm、復元胴部最大径57.5cmである。最大径は胴部の上半に位置し、肩の張る器形となる。外面は平行タタキののち、帯状のナデが複数段巡る。内面は同心円状の当て具痕が残るが、半スリ消しが施されやや不明瞭となっている。内外面共に、上方に向かうほどタタキ目および当て具痕は不明瞭で、最上部は完全にナデ調整となっている。口縁端部外面は突帯状に下方に突出し、さらに上方の最端部は沈線状に窪むが、総じて四角形に収まる。突帯状の突出の度合いはそれほど高くない。口縁部内面側の端部付近は、窪みを有する。なお、口縁部外面に波状文等による装飾は認められない。口縁端部の形状や、内面当て具痕の半スリ消しの様相等から判断して、本例はＴＫ23型式～ＴＫ47型式に位置付けられるものと考えられる。

以上の出土遺物の様相の内、2の坏の形状や5の直口壺の存在、丸味が強く球胴状を呈する甕や須恵器大甕の様相等から判断して、本住居址は古墳時代中期後葉の所産と判断される。

43号住居（ＳＢ43）

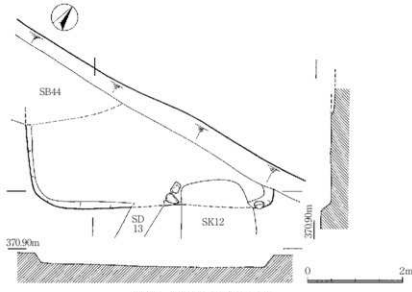


図97　Ⅲ区ＳＢ43（１：80）

【遺構】Ⅲ区の北壁沿い、中央部からやや東側に寄った位置に確認された。住居の南西隅および南東隅もかろうじて確認されたが、住居北側の大半は発掘区外である。また、ＳＢ44やＳＫ12・ＳＤ13とも重複している。

南側の一辺は約5.2mであることから、およそ５ｍ四方の隅丸方形を呈するものと想定される。遺構検出面から床面までは約25cmで、床面は黄色く硬く締まっていた。なお、床面には柱穴や壁溝は全く確認されなかった。

ＳＢ43完掘状態（南東から）

ＳＢ43遺物出土状態（南東から）

ＳＢ43遺物出土状態（須恵器蓋）

ＳＢ43遺物出土状態（須恵器甕底部）

遺物は、床面直上、もしくは床面より３～４cm浮いた状態で、須恵器の蓋（図98－１）等が出土している。ただし、この他に土器片類のまとまった出土は認められなかった。

図98　ＳＢ43出土遺物（１：４）

【遺物】図示し得た遺物は２点である。

１は、須恵器の蓋である。つまみ部付近を欠損するが、口径は22.3cmに復元され、大型の蓋に分類される。外面は右回りの回転ケズリが施される。口縁端部付近には、内側に幅５mm・高さ1.5mm程の返りが設けられている。２は須恵器甕の底部である。遺物は僅少だが、本住居址は古墳時代後期末葉（７世紀代）の所産の可能性を指摘できる。

44号住居（ＳＢ44）

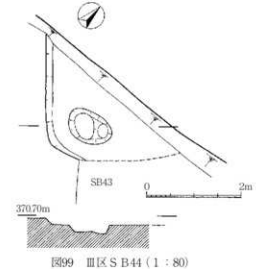


図99　Ⅲ区ＳＢ44（１：80）

【遺構】ＳＢ43の北西側に重複して位置する。大半は調査区域外のため、規模等詳細は不明であるが、ＳＢ43廃絶後に構築された隅丸方形を呈する住居であるものと想定される。

遺構検出面から床面までは約28cmで、ＳＢ43の床面より８cm程深く掘り込まれている。住居の南西隅付近には長径１m程の浅い掘り込みが存在していたが、ＳＢ44の主柱穴に関するものかは不明である。調査範囲内においては壁溝も認められず、まとまった遺物の出土も確認されなかった。

【遺物】図示し得た遺物は１点のみである。

１は、壺の口縁部～胴部上位である。口縁部は垂直に立ち上がり、上方でわずかに外傾する。口縁部上方には沈線状の窪みが一周している。古墳時代後期後葉に位置付けられよう。

ＳＢ44完掘状態（南東から）

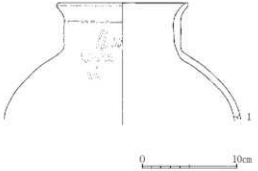


図100　ＳＢ44出土遺物（１：４）

45号住居（ＳＢ45）

【遺構】Ⅲ区南東隅付近に位置する。南側は一部でＳＢ46と重複していることが明らかとなっているが、住居の西側～南側にかけてはコンクリート状の硬い撹乱土が堆積しており、発掘不可能であったため、詳細は不明である。

東壁側が別遺構（溝？）と重複していた可能性があり、やや不明瞭であったが、北壁の長さから判断して、１辺約5.3mの方形を呈する住居であるものと想定される。遺構検出面から床面までは20cm程で、床面は黄色く硬く締まっていた。北壁沿い、撹乱付近には、カマドの一部が確認された。撹乱と重複しているためカマドの全体

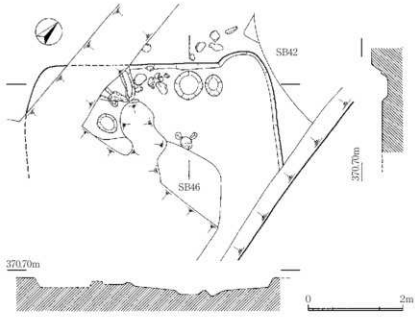


図101　Ⅲ区ＳＢ45（１：80）

像は不明確であるが、東側の袖の大部分と西側の袖の先端部分、および天井石が確認されている。北壁から東側の袖の先端までは約80cmで、今回の発掘区内においては、住居の規模に見合ったカマドの大きさといえる。

カマドの周囲からは、多量の土器類が出土している。カマドの上方中央部からは甕が３点（図103－９・10・11）、重なり合った状態で出土しており、カマドの南西脇からも甑（同－13）や甕（同－12）が出土している。これらの土器はカマドに据えられていたものが、そのまま崩落したか、もしくは破壊されてつぶれた状態を示しているものと考えられる。

ＳＢ45遺物出土状態（南東から）

カマドの南側、やや離れた位置からは、小型の甕が１点（同－８）、ほぼ完形の状態で出土している。さらに、カマド東袖の脇、北壁に沿って坏（同－2・3）や甕の胴部片等、多くの土器類が出土している。

これらの土器は、元々カマドに据えられていたか、もしくはカマドの周囲に置かれていたものと想定される。

カマドの東側には、長径20cm前後の礫（川原石）も複数出土している。また、その礫群のさらに東側からは、直径約60cmと40cmの浅い土坑が見つかっている。ただし、内部から目立った遺物の出土は認められなかった。

ＳＢ45完掘状態（南東から）

図102　ＳＢ45カマド微細図（１：30）

S B45カマド遺物出土状態

S B45カマド完掘状態

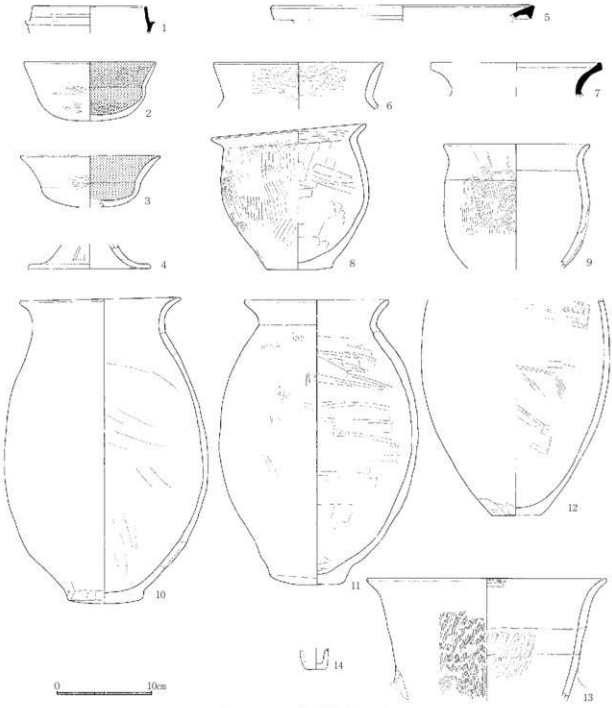


図103　S B45出土遺物（1：4）

【遺物】図示し得た遺物は14点である。

1は須恵器坏身である。小片であり、また覆土中からの出土のため、混入品の可能性もある。口縁部はわずかに内傾しながら垂直気味に立ち上がる。口縁部端部は幾分沈線状に窪む。TK47型式に相当する可能性がある。

2・3は土師器の坏である。2・3共に内面には黒色処理が施されている。2は外面にヨコヘラミガキ、内面には弧状の単位を有するヨコヘラミガキが、左回りに施されている。内面底部付近は直交方向にヘラミガキが施される。内外面の稜線は器高のほぼ中央付近に位置しており、口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。

3は内外面にヨコヘラミガキが施されるが、いずれも器面は荒れて単位は不明瞭である。稜線は器高の中央からやや下がった場所に位置しており、口縁部も外湾しながら上方に広がる。2よりも新相を呈しているといえる。

4は土師器高坏の脚部である。脚部には透かし窓が設けられており、三方に位置していたものと想定される。

5は須恵器甕の口縁部である。端部は下方に向かって突出し、断面は三角形状を呈する。端部上端は幾分丸味を有している。内外面には自然釉も認められる。所産時期は不明だが、覆土上層出土のため混入品と考えられる。

6は壺の口縁部である。内外面共に横方向のヘラミガキが施される。

7は須恵器甕の口縁部である。詳細な時期は不明。覆土中から出土のため、混入品の可能性もある。

8～12は甕である。この内、8・9は小型の甕に分類される。8は胴部外面に間隔の広いハケメが施され、胴部内面は板状の工具によってナデられる。口縁部内面にもハケメの痕跡が認められる。9は外面胴部～口縁部にかけて縦方向のハケメが施される。胴部下半は器面が荒れ、一部剥落している。内面はナデ調整。

10～12は大型の甕である。10・11は口縁部～底部まで復元できた。10の外面は荒れて、調整は不明瞭だが、内面は板状の工具によるナデ調整が施されている。底部は平底で、突出する。長胴傾向にあるが、全体に丸味を有している。11は、10に比べ幾分器高が低い。外面は摩滅するがハケメの痕跡が確認され、内面は板状工具による横方向のナデ調整が施されている。内面底部にはハケメも確認できる。全体の形状は、10とよく似る。12は甕の胴部上半～底部である。10・11とは底部の造りが異なるが、体部にはやはり同様の丸味を有している。

13は、大型の瓶である。把手部以下は欠損していた。14は、ミニチュア土器である。口縁端部を欠いている。

以上の遺物の様相から、本住居址は古墳時代後期初頭～前葉の所産と考えられる。

46号住居（ＳＢ46）

図104　Ⅲ区ＳＢ46（1：80）

【遺構】Ⅲ区の最南東端、ＳＢ45に重複する形で確認された。住居の北東端部付近のみが確認されたが、他は全て撹乱内、および調査区外に位置すると想定され、全体の規模等詳細は不明である。

遺構検出面から床面までは約35cmで、ＳＢ45の床面よりさらに15cm程深く掘り込まれている。床面からは、まとまった遺物の出土は認められなかった。

【遺物】図示し得た遺物は１点もない。出土した土器片は小破片のみで、詳細な時期の特定は困難であった。ＳＢ45との切り合い関係から判断して、本住居址は古墳時代後期以降の所産であるものと推測されるが、具体的な構築年代は不明である。

②土坑

10号土坑（ＳＫ10）

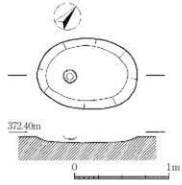
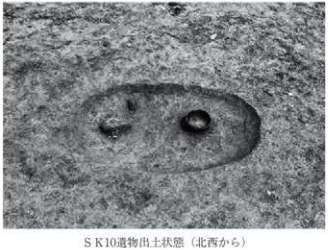


図105　Ⅱ区ＳＫ10（１：40）

【遺構】Ⅱ区ＳＢ31のカマド煙道先端から、北西方向へ１ｍ程の場所に位置している。長径約1.05m・短径約0.75mの楕円形を呈し、確認面から遺構底面までは12cm程であった。

遺構の底面中心部からやや南東に寄った位置からは、土師器の坏が１点完形の状態で出土した。また、これとは反対方向の北西寄りの位置からは、茶色の土塊状遺物が認められた。この土塊状遺物は非常にもろく、土器が溶けた状態によく似ていた。人骨の可能性も想定されたが、断定には至らなかった。以上の様相から、本遺構は土坑墓の可能性も想定されるが、特定は困難である。



ＳＫ10遺物出土状態（北西から）

図106　ＳＫ10出土遺物（１：４）

【遺物】図化した遺物は土師器の坏である。断面は半月状を呈し、器高はさほど高くない。外面はヨコハケのちヨコヘラミガキ、内面は弧状の単位を有するヘラミガキが左回転で施されている。内面は黒色処理される。

この坏の様相からは、古墳時代中期後葉～後期初頭頃の年代が想定される。

表２　古墳時代遺構一覧表①

遺構名（記号）	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記
		形態・規模（南北×東西）	備考	重量（g）	実測数	特記	（石器・金属製品他）	（記号）
１号住居（ＳＢ１）	古墳 後期前葉	隅丸方形 ？×5.2m	ＳＢ５が重複 ＳＢ２・ＳＤ３に重複	16,200	11		板状紙石１出土（時期不明）	ＡＹＦＡ２ ＳＢ２
４号住居（ＳＢ４）	古墳 後期末葉（７世紀代）	隅丸方形 ？×5.4m	ＳＢ９に重複	12,090	4			ＡＹＦＡ２ ＳＢ４
５号住居（ＳＢ５）	古墳 後期末葉（７世紀代）	隅丸方形 4.5×？m	ＳＢ１に重複	10,585	6			ＡＹＦＡ２ ＳＢ５
６号住居（ＳＢ６）	古墳 中期中葉？	隅丸方形？ 一辺５m以上	—	1,500	2			ＡＹＦＡ２ ＳＢ６
７号住居（ＳＢ７）	古墳 中期末～後期初頭	隅丸方形 一辺約4.0m	ＳＸ３が重複	6,870	6		石包丁１混入	ＡＹＦＡ２ ＳＢ７
８号住居（ＳＢ８）	古墳 中期後葉？	隅丸方形 規模不明	—	2,280	1			ＡＹＦＡ２ ＳＢ８
13号住居（ＳＢ13）	古墳 後期前葉	方形 5.0×4.9m	ＳＢ11・ＳＸ４が重複 ＳＢ12に重複	15,270	17	ＳＢ11からの混入４あり		ＡＹＦＡ２ ＳＢ13
14号住居（ＳＢ14）	古墳 後期末葉？（７世紀代？）	いびつな長方形 5.4×4.7m	ＳＢ15・ＳＸ２が重複	9,306	3	石匙１混入		ＡＹＦＡ２ ＳＢ14

表3　古墳時代遺構一覧表②

遺構名（記号）	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記
		形態・規模（南北×東西）	備考	重量（g）	実測数	特記	（石器・金属製品他）	（記号）
18号住居（ＳＢ18）	古墳後期末葉（7世紀代）	隅丸方形 一辺約５ｍ？	ＳＢ17が重複 ＳＢ10・19に重複	2,360	3			ＡＹＦＡ２ ＳＢ18
19号住居（ＳＢ19）	古墳後期前葉	隅丸長方形？ 6.0×5.2m	ＳＢ17・18が重複 ＳＢ10に重複	3,587	7			ＡＹＦＡ２ ＳＢ19
20号住居（ＳＢ20）	古墳中期末～後期初頭	方形？ 規模不明	ＳＢ17が重複	5,180	5			ＡＹＦＡ２ ＳＢ20
21号住居（ＳＢ21）	古墳後期前葉？	方形？ 一辺６ｍ以上	—	3,560	1			ＡＹＦＡ２ ＳＢ21
23号住居（ＳＢ23）	古墳中～後期？	隅丸方形 ？×4.2m	ＳＤ４が重複	1,830	1			ＡＹＦＡ２ ＳＢ23
25号住居（ＳＢ25）	古墳中期末～後期初頭	隅丸方形 4.6×4.8m	ＳＤ９が重複	36,425	55	土器集中区（配列状態）複数あり	刀子１ 滑石製臼玉１ 土製管玉１	ＡＹＦＡ２ ＳＢ25
26号住居（ＳＢ26）	古墳中期後葉～後期前葉	隅丸方形 一辺約８ｍ？	—	12,290	11			ＡＹＦＡ２ ＳＢ26
27号住居（ＳＢ27）	古墳後期前葉	隅丸方形 一辺約６ｍ	ＳＢ28が重複	6,690	7			ＡＹＦＡ２ ＳＢ27
28号住居（ＳＢ28）	古墳後期末葉（7世紀代）	隅丸方形 一辺約7.1m	ＳＢ27に重複	30,070	23		台石１出土（時期不明）	ＡＹＦＡ２ ＳＢ28
30号住居（ＳＢ30）	古墳後期？	隅丸方形？ 規模不明	—	620	0			ＡＹＦＡ２ ＳＢ30
31号住居（ＳＢ31）	古墳後期前葉	長方形 3.8×4.4m	—	5,280	7			ＡＹＦＡ２ ＳＢ31
33号住居（ＳＢ33）	古墳中期末～後期初頭	隅丸方形 一辺約８ｍ	ＳＢ38が重複 ＳＢ40に重複	34,870	29	須恵器蓋口縁部断面黒色物付着（接着剤?）		ＡＹＦＡ２ ＳＢ33
35号住居（ＳＢ35）	古墳後期中葉	隅丸方形 一辺約８ｍ？	—	13,270	3			ＡＹＦＡ２ ＳＢ35
38号住居（ＳＢ38）	古墳後期前葉	隅丸方形 規模不明	ＳＢ33・40に重複	7,520	5			ＡＹＦＡ２ ＳＢ38
39号住居（ＳＢ39）	古墳後期？	隅丸方形？ 規模不明	—	210	0			ＡＹＦＡ２ ＳＢ39
40号住居（ＳＢ40）	古墳中期末～後期初頭	隅丸方形 ？×5.4m	ＳＢ33・38が重複	9,060	4			ＡＹＦＡ２ ＳＢ40
41号住居（ＳＢ41）	古墳中期後葉	方形 一辺約５ｍ？	ＳＤ12に重複	15,090	10	須恵器大甕１出土	キセル１混入	ＡＹＦＡ２ ＳＢ41
43号住居（ＳＢ43）	古墳後期末葉（7世紀代）	隅丸方形 一辺約5.2m？	ＳＢ44が重複	7,220	2			ＡＹＦＡ２ ＳＢ43
44号住居（ＳＢ44）	古墳後期末葉？（7世紀代？）	隅丸方形 規模不明	ＳＢ43に重複	2,360	1			ＡＹＦＡ２ ＳＢ44
45号住居（ＳＢ45）	古墳後期初頭～前葉	隅丸方形 一辺約5.3m？	ＳＢ46が重複	13,710	14			ＡＹＦＡ２ ＳＢ45
46号住居（ＳＢ46）	古墳後期？	隅丸方形？ 規模不明	ＳＢ45に重複	600	0			ＡＹＦＡ２ ＳＢ46
10号土坑（ＳＫ10）	古墳中期後葉～後期初頭	楕円形 長径1.05m 短径0.75m	—	230	1			ＡＹＦＡ２ ＳＫ10
合　計				286,133	239			

3．古代の遺構と遺物

Ⅰ～Ⅲ区を通して、古代（奈良時代～平安時代）に比定され得た遺構は、竪穴式住居址が５軒、溝（旧河川も含む）が４条、土坑が１基、性格不明遺構が３基である。この内、竪穴式住居址は大部分が調査区外であり、全容が判明したものは数少ないが、17号住居址（ＳＢ17）や29号住居址（ＳＢ29）では、まとまった土器群が出土している。住居の形態はいずれも方形基調で、古墳時代同様住居の主軸は真北から西へ40°～60°程傾いている。また、住居の北西側壁沿いに、カマドが付設されているのも前代同様である。竪穴式住居址の他には、溝の検出例が多く、この段階で居住域の配水用・区画用、あるいは農地の灌漑用施設としての溝の整備が進んでいたことを物語っている。なお、３号性格不明遺構（ＳＸ３）の底面からは、混入品だが翡翠製の垂飾が１点出土している。

①竪穴住居

11号住居（ＳＢ11）

【遺構】Ⅰ区南東に位置し、一辺約５ｍの隅丸方形を呈する住居と想定されるが、南側と東側半分は水路によって破壊されている。

カマドは住居北壁のほぼ中央に位置し、煙道が残存していたが、両袖・焚き口部は近現代の撹乱坑によって破壊されており、確認された袖石とみられる石も動いている可能性が高い。また、カマド内部は撹乱部分を除いて、全面的に被熱によって赤褐色に硬化していた。カマド内からの遺物出土は僅かであるが、カマド西脇とカマド前面からまとまった遺物の出土が認められた。

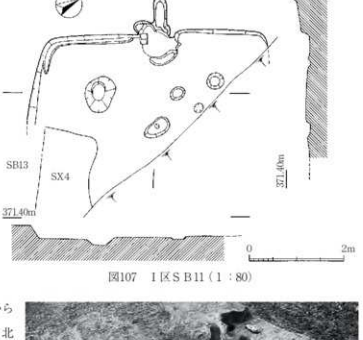


図107　Ⅰ区ＳＢ11（１：80）

遺構検出面から床面までは約30cmで、床面からは数基のｐｉｔが確認された。このうち、北東と北西側のｐｉｔは位置的に柱穴と考えられるが、北西側のｐｉｔはやや不整形である。

カマド東側の北壁際付近からは、逆位の状態で、ほぼ完形の須恵器の高台付坏（図109－４）が出土している。また、前述した北西ｐｉｔの内部からは、図示していないが須恵器の蓋のつまみ部が１点出土している。今回の調査区全体においても、該期の須恵器の出土はさほど多くはなく、住居に直接伴うものとして重要な意味を有する。

ＳＢ11完掘状態（南東から）

【遺物】出土遺物は、坏（土師器・須恵器）・鉢・壺・甕・蓋・耜錘車であった。１は土師器の坏で、黒色処理を受ける。外面はケズリ調整を受け、削られた箇所は面を持っている。２は土師、もしくは須恵の生焼けのような質の坏である。調整は、内外面共にロクロナデによるものである。３・４は須恵器の坏である。４はやや小降りであるが、高さ約４㎜の高台を持つ坏である。千曲市屋代遺跡ＳＤ7030（長野県埋蔵文化財センター2000）等で、

よく似た例が出土している。

5は小型の鉢である。外面調整は不明であるが、内面にはヨコハケとヨコナデの調整痕がみられる。

6は須恵器の壺（短頸壺）であるが、口縁端部と底部は欠損している。頸部は胴部に比べてかなり薄手な作りになっており、調整はロクロナデである。

7は須恵器の甕の口縁部である。口唇部がやや垂れるような形状をしている。遺存度が低く全体の形状は把握できない。8は甕の底部で、かなり厚みを持つ個体である。外面はケズリ、内面はナデの調整を受ける。

ＳＢ11遺物出土状態（北壁沿い）

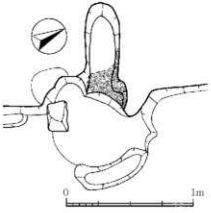


図108　ＳＢ11カマド微細図（１：30）

ＳＢ11遺物出土状態（拡大）

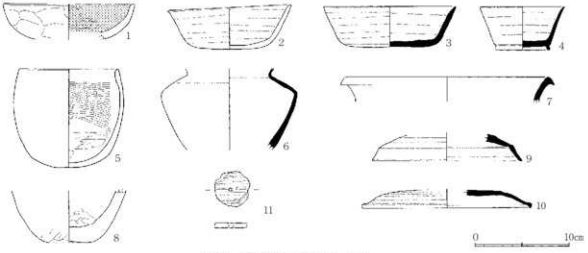


図109　ＳＢ11出土遺物（１：４）

9・10は須恵器の蓋である。9・10共にロクロナデによる整形で、内面に返しは持たない。9はやや高さがあり、稜も高い位置に見られる。10は9に比べると扁平な造りである。

11は土製の紡錘車で、土師器の甕を転用している。表面にはハケメ調整が残る。

以上より、本住居址は奈良時代初頭頃に属するものと考えられる。

15号住居（ＳＢ15）

【遺構】Ⅰ区北西壁際に位置しているが、ＳＢ14に東側を破壊されているため正確な規模は不明である。

遺構検出面から床面までは約20cmで、床面は貼床をせず、黄色の地山面をそのまま底面としている。しかし、南壁の立ち上がりは緩く、床面も起伏があり、目立った遺物もないなど、積極的に住居と断定できる要素は乏しい。ただし、ＳＢ14の北西コーナー付近にみられた焼土がＳＢ15に伴うものであるとすれば、ＳＢ15はカマドを伴う住居であった可能性も否定しきれないため、ここでは住居址として報告した。

【遺物】遺物の出土は僅少で、図化し得たものは須恵器蓋のつまみ部分のみであった。この遺物は、奈良時代の所産と見られるが、本住居址の時期を確定付ける要素としては乏しい。

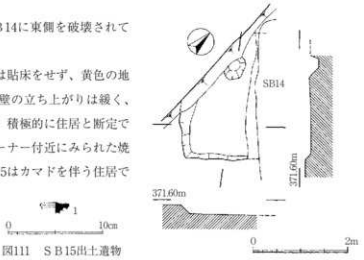


図110　Ⅰ区ＳＢ15（1：80）

図111　ＳＢ15出土遺物（1：4）

17号住居（ＳＢ17）

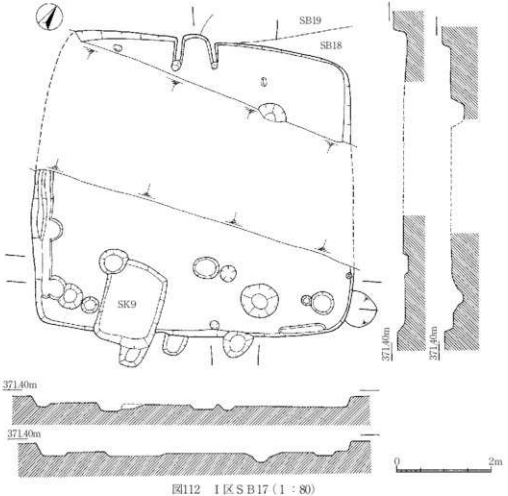


図112　Ⅰ区ＳＢ17（1：80）

【遺構】Ⅰ区南西に位置する一辺６ｍ程の隅丸方形を呈する住居で、中央部分が水路によって破壊されていたが、Ⅰ区内では最大規模の住居である。

水路北側は、遺構検出面から床面までは約20㎝で、北壁中央にカマドと、水路際に柱穴と想定されるｐｉｔを検出した。カマドは、両袖がやや「八」の字に広がり、大きな焚き口部を形成している。東袖石は被熱によってもろくなっていた。天井石は見受けられず、煙道も確認できなかった。

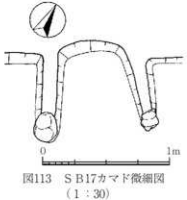


図113　ＳＢ17カマド微細図
（１：30）

カマド内部からは土器の破片が多数出土しているが、いずれも底面からはやや浮いている状態であった。これは、カマドの使用によって灰や土が堆積し、その上にカマドに据えられていた土器が壊れて覆い被さったものか、あるいはカマド廃絶時に破壊されたカマド本体の土が土器の下に流入したものと考えることができる。

カマド底面には、ＳＢ17のすぐ北側に位置するＳＢ19の壁のラインがはっきりと見えていた。ＳＢ17は、住居の東側でＳＢ19の他にＳＢ18とも重複しているため、ＳＢ17の東半分の床面は二つの住居の覆土に相当しており、全面的に黒色であった。

ＳＢ17完掘状態（南東から）

ＳＢ17カマド遺物出土状態

ＳＢ17カマド西脇遺物出土状態

ＳＢ17北壁沿い床面遺物出土状態

水路南側は、遺構検出面から床面まで約20㎝で、数基のｐｉｔと壁溝を、また南壁を切る形で別遺構のＳＫ９を、それぞれ検出した。壁溝は西壁と南壁の一部のみで認められたものの、他に確認はできなかった。水路北側ではカマドの周囲に比較的多くの遺物の出土がみられたが、水路南側では床面直上からまとまった遺物の出土はみられなかった。

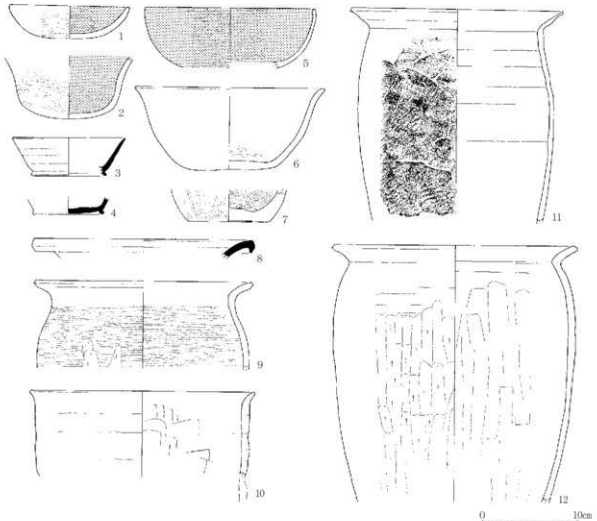


図114　ＳＢ17出土遺物（１：４）

【遺物】遺物は坏・鉢・甕が出土している。１・２・５は土師器坏で、いずれも内面あるいは外面にも黒色処理を受けている。１は内外面共にヨコヘラミガキの調整が施される。２は口縁部を欠損しており、鉢との区別をつけづらい。内外面共に粗いヨコヘラミガキの調整を受ける。５は、内外面に黒色処理が施された大型の坏である。調整は内外面共にヨコヘラミガキの調整を受ける。３・４は須恵器の高台付坏で、同一個体の可能性も考えられる。３は底部を欠損しているが、それ以外は遺存しており、ロクロナデによる調整である。４は底部のみで、底部はヘラ切りの後に高台を付け、ナデを施している。

６の鉢は全体的に器面が粗く、調整は不明であるが、内面には一部ヘラミガキの痕跡がみてとれる。

７～12は甕である。７は甕の底部で、内外面にはハケ調整を受ける。底面にはハケメのような痕跡もみてとれる。８は須恵器の甕の口縁部であるが、遺存度は低い。９は内外面にカキメ調整を施し、胴部外面にはタテケズリも加えられている。口縁部にはヨコナデが施される。10は明確な頸部が存在しない甕である。外面は粗い調整のため、輪積み痕を消し切れていない。内面には板ナデが施される。11はロクロ調整の甕で、胴部外面にはタタキ調整も加えられており、所々に縦方向のケズリもみられる。12は口縁部が短く強く外傾する甕で、胴部外面はタテヘラケズリ、内面はタテヘラナデの調整が施されている。また一部には被熱の痕跡も確認されている。

以上より、本住居址は奈良時代後半～平安時代初頭に属するものと想定される。

29号住居（ＳＢ29）

【遺構】Ⅱ区の南端、ＳＢ26の西隣に位置する。ＳＢ26とＳＢ29の間には撹乱坑が存在しており、両者の切り合い関係等については不明である。

ＳＢ29は、大半が発掘区域外に位置し、規模等の全容は不明であるが、住居址の北端の一部が確認・調査されている。調査区内においては、住居の北辺3.5m程が検出されたが、カマドや主柱穴等は確認できなかった。

床面からは、発掘面積の割に多数の土器類が出土している。この内、西側の端部付近からは長胴の甕（図116－4）が1点横たわり、その南東脇からは別個体の長胴甕2点分（同－5・6）がつぶれた状態で出土している。また、この他に北壁沿いにはさらに別の長胴甕（同－7・8）や内黒の坏（同－1）、須恵器の坏（同－2）等の土器が出土している。北壁沿いの土器類については、床面より5～10cm程浮いた状態で出土していることから、住居廃絶後、しばらくしてから廃棄された可能性も指摘される。

【遺物】図示し得た遺物は8点である。

1は土師器の坏である。断面はやや深みを有する半月状に近く、口縁端部が幾分肥厚する。内外面は共に横方向のヘラミガキで、内面は黒色処理される。

2は須恵器の無台坏である。ロクロの回転方向は右回転で、底部付近は静止ヘラ切り後、細かな粘土屑の付着が認められる。

3は脚付土器（土製品）の脚部である。3本の脚部が遺存するが、元々は4本の脚部が存在していたものとみられる。脚部はヘラケズリされ、表面は比較的粗雑な仕上がりとなっている。内面には黒色処理が施されている。覆土中からの出土である。

4～8は長胴甕である。この内、4と5の甕は遺存率が高く、口縁部から底部まで復元された。いずれの甕も完全に長胴化が進み、胴部は直線的となっている。摩滅で不明瞭なものを除き、全ての甕の外面調整は縦方向のヘラケズリとなっている。内外面共に、輪積み痕が明瞭に残るものが多い。

以上の遺物の様相から、本住居址は奈良時代初頭頃の所産と判断される。

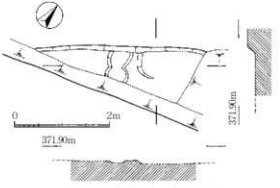


図115　Ⅱ区ＳＢ29（1：80）

ＳＢ29完掘状態（北西から）

ＳＢ29遺物出土状態（北西から）

ＳＢ29遺物出土状態（北東から）

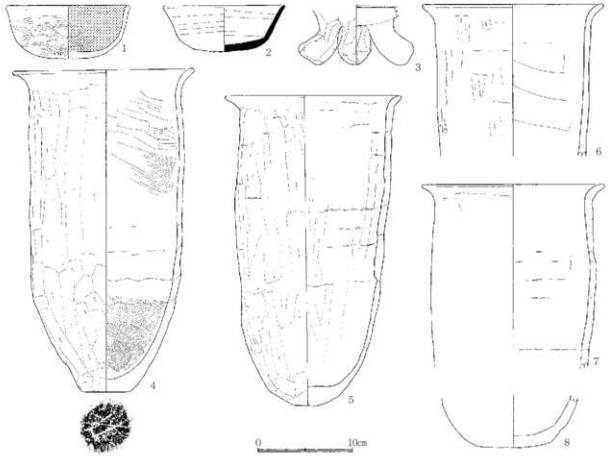


図116　ＳＢ29出土遺物（１：４）

32号住居（ＳＢ32）

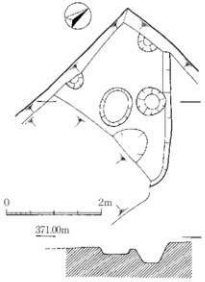


図117　Ⅲ区ＳＢ32（１：80）

図118　ＳＢ32出土遺物（１：４）

【遺構】Ⅲ区発掘区の北西隅に位置する。住居の北側～西側にかけての大部分は発掘調査区域外であり、南端部は旧建物の基礎工事に伴い破壊されていたため、住居全体の規模等は不明である。

遺構検出面から床面までは13cm程であり、比較的掘り込みは浅い。床面からは複数のｐｉｔが確認されたが、この内の幾つかはＳＢ32に伴う柱穴であるものと考えられる。なお、床面および柱穴内壁面には、多量の小礫が認められた。したがって、ＳＢ32は旧河川跡の砂利堆積層を掘り込んで構築されたものと理解される。

ＳＢ32完掘状態（南東から）

【遺物】図化し得た遺物は１点のみである。１は須恵器無台坏の底部片である。底部外面は左回転のヘラ切り後ヘラケズリが施される。

この他に土師器および須恵器片が少量出土しているが、小片が多く、詳細な年代を決定するには至らなかった。

②溝・旧河川

2号溝（ＳＤ2）

【遺構】Ｉ区北東に位置し、調査区北壁から南西に5.2m程伸びて、南方向に折れ曲がり、ＳＢ３の壁を一部破壊していた。また、溝の中間地点はＳＫ２によって一部破壊されていた。溝の上幅は概ね50cm、遺構検出面から底面までの深さは約30cmで、断面は逆台形状を呈していた。

検出当初はその形状と、南東に位置するＳＤ１や両溝間に位置するＳＫ５の配置から、弥生時代の周溝墓の可能性も想定された。しかし、覆土除去を開始すると、覆土中より拳大から人頭大の礫が多数出土すると同時に、須恵器の破片が複数出土した。これらの遺物の様相から、本遺構は周溝墓ではなく、奈良時代の溝であることが明らかとなった。

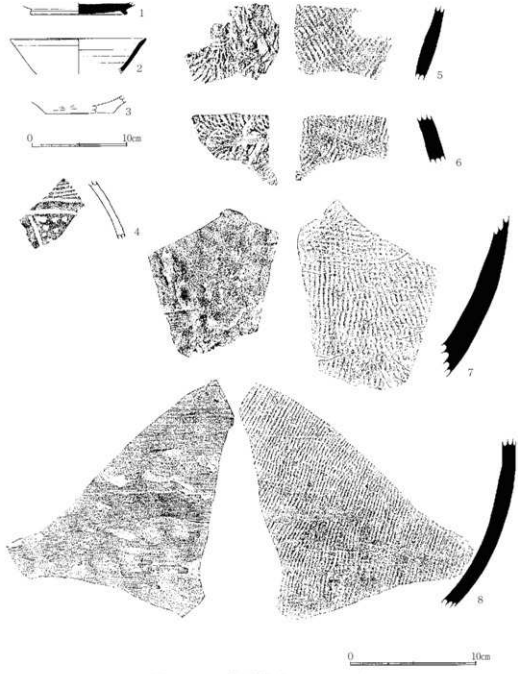


図119　ＳＤ２出土遺物（1：4・1：3）

ＳＤ２全景（南東から）

ＳＤ２遺物出土状態（南西から）

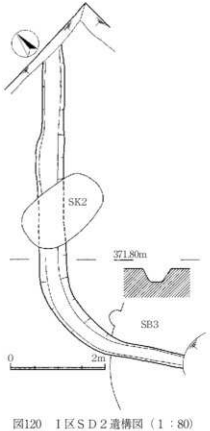


図120　Ⅰ区ＳＤ２遺構図（１：80）

【遺物】出土した遺物は破片が主であった。１は須恵器の高台付坏の底部である。ロクロナデの調整を受け、底部は回転ヘラ切りによる痕跡がみられる。２は須恵器の坏、もしくは鉢である。ロクロナデの調整を受け、赤焼けしているのが見受けられる。３は土師器の甕もしくは壺の底部片であるが、遺存度が低く、調整は不明瞭である。

４は弥生時代後期前葉吉田式の壺の胴部片で、ヘラ描き三角文の内部に押引列点文が施され、上部には櫛描文が施文されている。５～８は須恵器の胴部破片である。５・６は、外面に格子目のタタキ、内面には当て具痕がみられる。７は平行のタタキ調整を受け、内面には当て具痕らしきものはみられず、一部にナデが残るだけである。８は、７よりも幅の狭い平行のタタキ調整と、内面の調整に明瞭なハケメを施しているのが分かる。

以上より、本遺構は一部に弥生時代の土器片が混じるが、主たる遺物からすると奈良時代に属するものと考えられる。

４号溝（ＳＤ４）

【遺構】Ⅱ区の北壁沿い、ほぼ中央部から北東隅に「く」の字状に折れ曲がって走る。北東側ではＳＢ23と重複しており、ＳＢ23の南壁とほぼ平行している。溝の幅は、西側では約1.6mと広く、ＳＢ23と重複する北東部分では約80cmと幾分狭くなっている。溝は、西側で一部３段、その他は概ね２段に掘り込まれていることが明らかとなった。覆土は上層から下層まで一括して暗紫黒色土であり、レンズ状の堆積等は認められなかった。

ＳＤ４トレンチ壁面（南東から）

溝の底面付近からは、須恵器片・土師器片等が出土しており、古代に掘られた灌漑用の水路、もしくは居住地区画のための溝であったものと推定される。

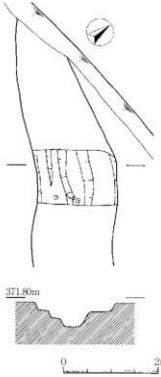


図121　Ⅱ区ＳＤ４（１：80）

ＳＤ４（ＳＢ23と重複部分）（北東から）

図122　ＳＤ４出土遺物（１：３）

【遺物】図示し得た遺物は１点のみであった。

１は須恵器甕の胴部破片である。外面は斜交するタタキが施されるが、内面に同心円状の当て具痕は認められず、当て具痕は完全にスリ消されている。

遺構の詳細な年代を決定付けるのは困難であるが、ＳＢ23との切り合い関係や出土した遺物の様相から判断して、本遺構は古代に入ってからの所産である可能性が高い。

10号溝（ＳＤ10）

【遺構】Ⅲ区のほぼ中央部から、北東部にかけて確認された上幅約90～100cm、下幅約70～80cm、深さ約15～25cmの断面逆台形を呈する溝である。北東側ではＳＫ12と切り合い関係を有し、南東側に行くに従い次第に浅くなってⅢ区のほぼ中央付近で収束している。発掘区内で確認されたＳＤ10の長さは10m程である。

溝の底面は比較的フラットで、遺構確認面からの深さは溝の幅の割に浅い印象を受ける。溝の内部、底面付近からは直径が10～数10cmの礫が複数出土した他、土器の破片類も出土している。土器の様相から、ＳＤ10は平安時代の所産であるものと判断される。

【遺物】図化した遺物は13点である。

１は須恵器無台坏、もしくは有台坏の坏部である。口径は12.0cmと小振りで、焼成は良い。ロクロの回転方向は不明である。

２は土師器甕の底部である。底部外面には、わずかに木葉痕らしき痕跡も認められる。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整が施される。

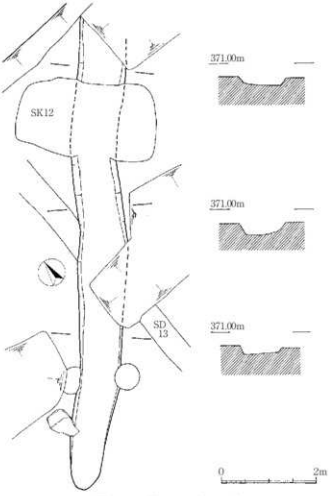


図123　Ⅲ区ＳＤ10（１：80）

3は土師器の甕である。外面は上から下へ縦方向のヘラケズリ、内面は胴部に明瞭なヨコハケが残る。

4は須恵器横瓶である。外面は斜格子状の平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕がほぼスリ消される。胴部の横幅は39.6cmに復元される。

5～10は須恵器甕もしくは壺の胴部破片である。これらは、外面に格子状のタタキ目を有するもの（8・10）、平行タタキを直交方向に施し偽格子状を呈するもの（6・7・9）、単純な平行タタキを施すもの（5）に分けられる。内面も、青海波が完全に残るものとそうでないもの、無文の当て具が用いられたものもある。

11～13は弥生時代中期、栗林式期の土器片で、混入品である。

以上の遺物の様相から、本遺構は平安時代の所産と考えられる。

ＳＤ10（南西から）

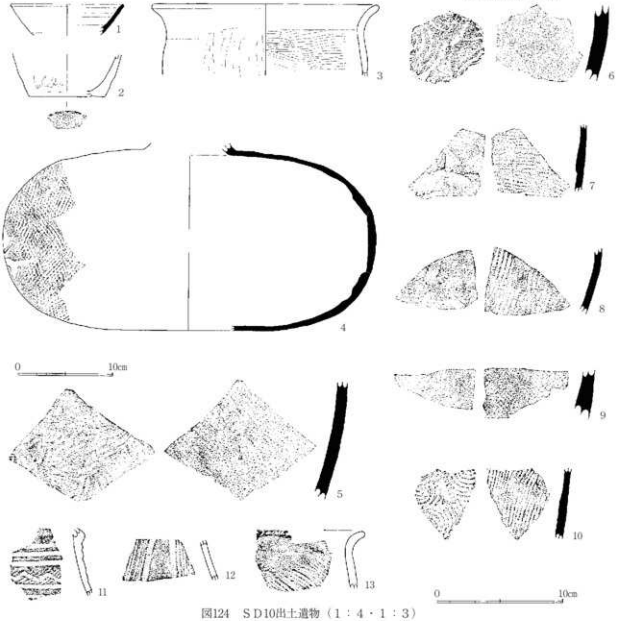


図124　ＳＤ10出土遺物（1：4・1：3）

旧河川

旧河川（北西から）

【遺構】Ⅱ区の中央部からやや東寄り、北西側から南東側に向けて発掘区を斜めに横切る幅約５ｍ前後の自然流路跡（旧河川跡）である。

遺構検出面から河川の底面までは15cm程で、覆土は直径１cm～10cm前後の砂利や礫で占められていた。恒常的に流れていた河川としては堆積物が浅く、近くを流れる河川の一時的な氾濫流路の一部である可能性も指摘できる。

覆土の砂利層に混じって、わずかではあるが遺物が出土している。土器の小片がほとんどであるが、遺物の様相から古代の流路の痕跡と想定できる。

③性格不明遺構

３号性格不明遺構（ＳＸ３）・７号土坑（ＳＫ７）

【遺構】Ⅰ区の中央北寄りに位置し、2.8×3.3mの隅丸方形状を呈する遺構である。当初はＳＢ７と切り合っている小型の住居と想定して掘り下げを行ったが、底面には貼床がみられず、地山面そのものであった。また、ｐｉｔを一基確認したが、カマドや炉の痕跡は確認できなかった。なお、北東隅の覆土中に一部焼土塊がみられたが、底面からは浮いた位置に相当し、容易に除去が可能であった。また、遺構の底面付近には被熱の痕跡は全く認められなかった。したがって、この焼土塊は本遺構には伴わず、後世の野焼き等の痕跡であると判断した。

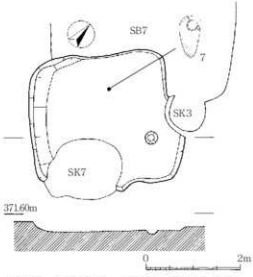


図125　Ⅰ区ＳＸ３・ＳＫ７遺構図（１：80）

この遺構で特記すべきは、遺構底面から翡翠製の垂飾りが出土したことである。この垂飾りが遺構底面直上付近から出土したことから、当初本遺構は縄文時代後期に構築されたものと想定した。しかし、その後の検討においては、出土遺物の多くがが古代に属するものであることが判明した。したがって、ＳＸ３は古代に構築された住居あるいは何らかの掘り込みの一部であり、翡翠製の垂飾りは覆土中に流入したもの、と判断するに至った。なお、ＳＸ３の調査中に、ＳＫ７が別遺構として存在していることが明らかとなったが、互いに関連する遺構の可能性もあることから、ここでは併せて報告する。

【遺物】出土遺物は坏・甕（土師・須恵）・垂飾りで、１～７はＳＸ３、８～10はＳＫ７から出土したものである。

１～３は須恵器の坏である。１はロクロナデの調整後、底部はヘラ切り→静止ヘラケズリ→ナデの順で調整を施している。２もロクロナデの調整であるが、底部を欠損している。３はロクロナデの調整後、底部は回転ヘラ切り→ナデの順で調整を施している。

４～６は甕である。４は土師器の甕の底部片で、外面はケズリ→ミガキ、内面はハケ→ナデの順で調整が施されているようだが、摩耗のため全体的に不明瞭である。また、底部には静止ケズリ→ナデが施されているとみられる。５も土師器の甕の底部で、外面はケズリ→ナデの順で調整され、内面はハケによる調整を受ける。６は須

恵器の甕で、胴部上半と底部を欠損している。ロクロナデによる調整の後、上部に櫛描波状文を加えている。

7は翡翠製の垂飾りで、上部を一部欠損しているが、形の整った両垂形を呈している。現存長2.2cm、最大幅1.1cm、厚さ5㎜で、断面は隅丸の台形である。片面穿孔で、穿孔部は上部中心よりやや側縁側に片寄っている。

8は須恵器の坏で、ロクロナデの調整を受ける。9は土師器の甕の底部と思われ、内外面共にミガキの調整を施している。10は土師器の甕で、胴部上半と下半は同一個体である。外面はカキメ、内面はロクロナデの調整を施し、内面の口縁部付近にはカキメがみられる。

ＳＸ３・ＳＫ７完掘状態（南東から）

ＳＸ３翡翠製垂飾り出土状態

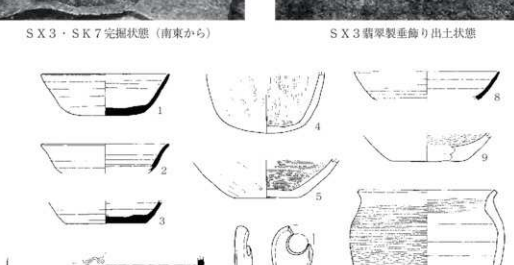


図126　ＳＸ３・ＳＫ７出土遺物（1：4・1：1（7））

6号性格不明遺構（ＳＸ6）・7号性格不明遺構（ＳＸ7）・8号溝（ＳＤ8）

【遺構】Ⅱ区のほぼ中央部に位置する。ＳＸ６および中央部の溝は全体が良好に遺存していたものの、ＳＸ７の西側は大規模な撹乱により破壊されており、詳細は不明である。

ＳＸ６は東西約5.2m、南北約3.6～3.8mの長方形を呈する。ＳＸ７は南北が4.0～4.3mで、東西の長さは不明であるが、ＳＸ６とほぼ同規模の長方形を呈する遺構であったものと推測される。ＳＸ６とＳＸ７は、上幅約60～70cm、長さ約4.0mの溝（ＳＤ８）で結ばれており、両者は溝を介してつながる一連の施設であったものと想定される。

なお、他の住居址の主軸がほぼ北西－南東方向を向くのに対し、ＳＸ６・ＳＸ７は長軸がほぼ東西方向を向いており、様相を異にしている点は注目される。

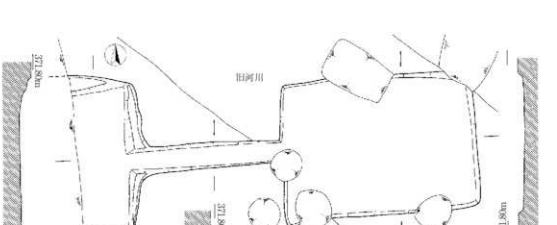


図127　Ⅱ区ＳＸ６・ＳＸ７・ＳＤ８（１：100）

ＳＸ６は、旧河川の堆積物（砂利・礫層）を掘り込んで構築されていた。遺構確認面から床面までは約15㎝で、覆土は上方から底面まで一括して暗紫黒色の粘質土であった。床面は明るいグレーおよび水色を呈していた。これは、ＳＸ６が構築される前に、地山が河川の影響によってグライ化していた結果と考えられる。床面には、柱穴と考えられるｐｉｔ類は一切確認されず、壁溝等の施設も存在していなかった。また、床面よりまとまった遺物の出土も認められなかった。覆土上～下層中より、古代の須恵器片が数点出土している。

ＳＸ６（ベルト除去前・北から）

ＳＸ６（ベルト除去後・北から）

ＳＸ７は、遺構確認面から床面までが約25㎝で、覆土は上方から底面まで一括してＳＸ６と等質の暗紫黒色粘質土であった。床面は地山の鮮やかな黄色を呈していたが、ＳＸ６同様、柱穴や壁溝は一切確認されなかった。ただし、ＳＸ６とは異なる点として、東壁および北壁側が、２～３段に掘り込まれていた点が挙げられる。段差部分は、幅20～30㎝程の平坦な面を有していた。段差の面上には、小ｐｉｔ等は認められず、特筆すべき遺物の出土状態も確認されなかった。ＳＸ７構築に伴い意図的に設けられた段差であるものと考えられるが、その用途や建築技術に関しては、今後の検討課題である。

ＳＸ６とＳＸ７を結ぶ溝（ＳＤ８）は、断面が上幅約65㎝・下幅約50㎝・深さ約25㎝の逆台形を呈し、底面は

ＳＸ７（ベルト除去前・北から）

ＳＸ７（ベルト除去後・北から）

全体的にほぼフラットであった。覆土は、ＳＸ６・ＳＸ７と同質の暗紫黒色粘質土一層であり、ＳＸ６・ＳＸ７とほぼ同時に、同様の課程を経て埋没したものと考えられる。この溝の底面とＳＸ６・ＳＸ７の底面は高さが一致し、なだらかに移行することからも、ＳＸ６・ＳＸ７は溝を介した一連の施設であり、同時期に営まれていたものとして理解することができる。なお、溝の底面からはｐｉｔ等は確認されていない。また、覆土や溝の底面・側面の様相から、湛水・もしくは流水していた痕跡も認められなかった。さらに、水等を通すためにトンネル状に掘られていたものでもなく、当初より上部が開口した溝状の施設であったものと想定される。

この溝も含めて、本遺構が全体としてどのような性格を有し、どのような役割を果たしていたのかは今のところ不明である。今後類例を集成し、具体的に検討していく必要があろう。

連結溝（ＳＤ８）セクション（東から）

ＳＸ７・ＳＤ８連結部セクション（南から）

ＳＸ６・ＳＸ７完掘状態（南から）

ＳＸ６・ＳＸ７完掘状態（西から）

【遺物】遺物の出土は僅少であり、破片資料も含めて図化し得た遺物は３点のみであった。この内、１・２はＳＸ６からの出土、３はＳＸ７からの出土である。いずれも、覆土中より出土している。

１・２は須恵器甕の胴部破片である。１は外面に平行タタキが施され、のちに横方向に帯状のナデが巡らされる。焼成は不良で、外面の摩耗が著しい。２は、外面に斜交する平行タタキが施される。内面は、１・２共に同心円状の当て具痕が明瞭に残っている。

３は、中世陶器の小皿（灰釉丸皿）の破片である。内外面に黄土色の釉薬がツケガケされるが、内面は一部釉が剥落している。

この他にも、小片のため図化には至らなかったが、有台坏の底部片や平安時代の灰釉陶器とみられる破片等が出土している。

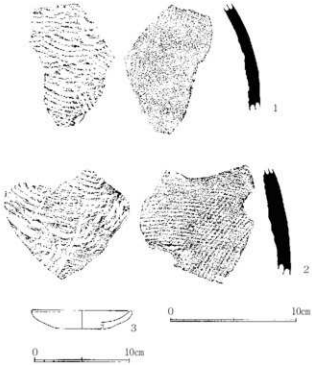


図128　ＳＸ６・ＳＸ７・ＳＤ８出土遺物（１：３・１：４）

以上の様相から、一部に中世陶器の混入がみられるものの、主体となる土器は古代の様相を示しているといえる。詳細な年代を特定するのは困難ではあるが、本遺構は平安時代前葉頃の所産である可能性を指摘することができる。

表４　古代遺構一覧表①

遺構名（記号）	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記
		形態・規模（南北×東西）	備考	重量（g）	実測数	特記	（石器・金属製品他）	（記号）
11号住居（ＳＢ11）	奈良	隅丸方形 一辺約５ｍ？	ＳＸ４が重複 ＳＢ12・13・22に重複	6,336	11			ＡＹＦＡ２ ＳＢ11
15号住居（ＳＢ15）	奈良？	隅丸方形？ 規模不明	ＳＢ14に重複	904	1			ＡＹＦＡ２ ＳＢ15
17号住居（ＳＢ17）	奈良～平安	隅丸方形 6.4×6.2m	ＳＫ９が重複 ＳＢ18・19・20に重複	14,112	12			ＡＹＦＡ２ ＳＢ17
29号住居（ＳＢ29）	奈良	隅丸方形？ 規模不明	—	8,430	8	三脚土器１あり		ＡＹＦＡ２ ＳＢ29
32号住居（ＳＢ32）	奈良～平安？	隅丸方形？ 規模不明	—	3,085	1			ＡＹＦＡ２ ＳＢ32
２号溝（ＳＤ２）	奈良	—	ＳＢ３・ＳＫ２に重複	2,508	8	吉田式土器片１あり		ＡＹＦＡ２ ＳＤ２
４号溝（ＳＤ４）	奈良～平安？	—	ＳＢ23・24に重複	1,430	1			ＡＹＦＡ２ ＳＤ４
10号溝（ＳＤ10）	平安	—	ＳＫ12に重複	6,730	13			ＡＹＦＡ２ ＳＤ10
旧河川	奈良～平安	幅約５ｍ	ＳＸ６が重複	1,620	0			検１— 40・62

表5　古代遺構一覧表②

遺構名（記号）	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記
		形態・規模（南北×東西）	備考	重量(g)	実測数	特記	（石器・金属製品他）	（記号）
7号土坑（SK7）	奈良～平安	楕円形 長軸1.6m 短軸1.3m	SX3に重複	420	3			AYFA2 SK7
3号性格不明遺構（SX3）	奈良～平安	隅丸方形？ 2.8×3.3m	SK7が重複	3,431	6		翡翠製垂飾1	AYFA2 SX3
6号性格不明遺構（SX6）	平安	長方形 3.7×5.2m	SX7とSD8で連結 旧河川に重複	2,380	2			AYFA2 SX6
7号性格不明遺構（SX7）	平安	長方形 4.3×約5m？	SX6とSD8で連結	1,190	1	中世陶器1あり		AYFA2 SX7
合　計				52,566	67			

4．中世の遺構と遺物

Ⅰ～Ⅲ区を通して、中世の所産の可能性が高い遺構は、4号性格不明遺構（SX4）のみであった。ただし、遺物は僅少であることから、今後さらに検討する余地を残している。

①性格不明遺構

4号性格不明遺構（SX4）

【遺構】Ⅰ区南東に位置し、幅約1.1mの溝状の遺構がSB11とSB13を壊す形で、北西～南東方向に確認された。遺構内、底面直上からは礫が大量に出土し、遺物の出土は少量であった。

【遺物】出土遺物で図化し得たものは、坏・壺・皿・土製円板である。1は内面に黒色処理を受けた坏である。外面は摩耗によって調整は不明であるが、内面はヨコヘラミガキの調整が施されている。

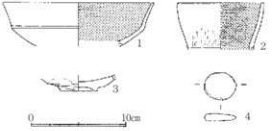


図129　SX4出土遺物（1：4）

2は直口壺の口縁部とみられる。外面はタテヘラミガキ、内面は黒色処理とヨコヘラミガキが施される。

3は中世陶器の皿の底部である。遺構底面の礫群の間より出土している。ロクロナデによる調整で、外面の一部と内面に灰オリーブ色の釉が掛かっている。高台付近は地の渋釉が露呈し、灰釉は掛かっていない。

4は土製の円板である。穿孔や土器の文様などはみられない。

遺構の性格自体は不明であるが、陶器の皿が遺構底面付近より出土している点から、本遺構が中世段階に構築された可能性が高いと判断した。なお、その他の遺物は覆土中への流入品と考えられる。

表6　中世遺構一覧表

遺構名（記号）	時代（期）	遺構		出土土器			その他出土遺物	遺物注記
		形態・規模	備考	重量(g)	実測数	特記	（石器・金属製品他）	（記号）
4号性格不明遺構（SX4）	中世	規模不明	SB11・13に重複	1,430	4			AYFA2 SX4
合計				1,430	4			

5．遺構覆土混入および遺構外出土遺物

（1）土器・土製品

1．縄文時代の土器・土製品（図130～132）

土器の様相

今回の発掘調査において縄文遺構は発見されておらず、出土遺物は全て検出面及び覆土からである。出土量は少なく全体の1～2％ほどである。そのほとんどが堀之内1・2式期に属する破片であり、これに先行する称名寺式期と、後続の加曽利B1式期の土器が残りを占めている。ほぼ完形な出土品は一点のみで、図化できる遺物は少ない。土器破片表面の文様の良好なものを、拓影による掲載とした。無文の粗製土器の出土も僅かながらみられるが、遺構に伴わない出土のため、明瞭な時期を決定するに至らないので掲載を避けた。

（第1群土器）5・6・8・9・29～34

後期初頭、称名寺式期に比定される土器を本群とした。

5は注口土器の飾りである。2㎜以下の砂を胎土に含み、この群の他の土器破片とは異にしている。8は鉢の口縁部である。6・9は「く」の字状に内屈した鉢の口縁部であり、6は沈線で描かれた楕円内部にLR縄文が充填されている。29～34はいずれも深鉢の一部であり、29・30は口縁部である。29は沈線により描かれた文様内に細い棒状の道具による刺突文が施されている。30は沈線で区画した図の部分にLR縄文を充填している。31～34までは、深鉢の胴部である。31は口縁部に近い部分であり圧痕隆帯を伴う。32・33は縄文の地紋に沈線を施している。34は沈線のみが施されている。

（第2群土器）2・38～72

堀之内1式期に比定される土器群である。

2は、胴部に沈線で渦巻文が描かれ、LR縄文が充填されている。38～53・57・58は鉢の口縁部である。38～53は、いずれも「く」の字状に内屈した口唇部に、幅広の沈線が施文されている。57は外面に1条の沈線がある。58は内湾口縁の鉢である。54は口唇部に沈線による刻みが入り、磨かれた胴部には斜めに走る沈線が施されている。55は、内屈した口唇外面に横方向に短い沈線が描かれ、胴部には縦方向の沈線にLR縄文が充填されている。56は押圧隆帯とLR縄文が施文されている。59・60は注口土器、61・62・71・72は鉢の土器破片であり、沈線が描かれている。63～70は、深鉢の胴部の破片である。64は沈線で区画されLR縄文が充填されているが、摩耗著しい。65～67・69・70は、LR縄文の地紋に沈線を施している。68は縦方向の沈線のみが施文されている。

（第3群土器）1・3・4・10・12・73～110・126～136

堀之内2式期に比定される土器群である。

1・73～83・86は深鉢である。73～77は、口唇部がわずかに屈曲し口縁部に1条、または2条の刻みをもつ細い隆帯がめぐり、「8」の字状貼付文を伴う。胴部上半分に磨消縄文で描出した意匠がめぐる。78～81・83は隆帯を伴う。82は小型の朝顔形深鉢であり、沈線とLR縄文が施されている。口唇部に小さな突起をもつ。86は、外面口唇部に細い押圧隆帯を伴い、胴部に沈線による文様があり、内面に刺突を伴う。3は無文の薄手の鉢である。4は注口土器に付く把手と考えられる。10は注口土器の注口部分であり、細い隆帯と「8」の字状貼付文がある。84・85・87～89は鉢の口縁部である。84は、内屈した口唇部に沈線に区画された部分をもち、刺突文が入る。85は表裏沈線が口唇部に施されている。87は、細く膨らんだ口唇部が押圧されており、下に刻みのある隆帯をもつ。88の外面は磨かれ、内面に折り返した口唇部に長い刺突文がある。89は口唇部内面に沈線で渦巻文が入る。90は不規則な沈線を複数施した注口土器の口縁部である。91は鉢のくびれから上の部分で、刻みのある隆帯

と「８」の字状貼付文をもつ。92も鉢の口縁に近い部分の破片であり、93は胴部が丸く膨らんだ鉢である。94～97は刻みのある隆帯を伴い、94・95は「８」の字状貼付文をもつ。98～107は深鉢の土器破片である。98～103・105は、沈線で描かれた区画とＬＲ縄文が施されている。104・106は沈線のみの施文である。108～110は、鉢の破片と考えられるが、第２群とするべきか。12・126～136は石神類型の土器であり、12は蓋のつまみと推定される。126・127・131は鉢の口縁、128は蓋であろう。132は小型の朝顔形深鉢、133～135は注口土器、136は深鉢の口縁に近い部分である。いずれも、細い沈線により文様が描かれた、丁寧な作りの薄手の土器である。

（第４群土器）119～125

加曽利Ｂ１式に比定される土器群である。

119は深鉢の口縁部であり、２条の沈線の間に左から右へ斜めの沈線が描かれている。120は、外面は磨かれ、内面に沈線が描かれている。121は外面に沈線、内面に１条の隆帯と沈線をもつ。120・121は、共に細かい突起が連続して付く浅鉢の口縁部である。122は外面に沈線と刻みが入る。内面は沈線のみ。123は外面は磨かれ、内面に沈線と刻みが入る。浅鉢の口縁に近い部分の破片である。124は深鉢の胴部と考える。125は外面は剥落しており意匠は定かでない。内面・口縁・口唇部に刻みが入り、下に整然とした刺突文が並ぶ。３条の隆帯を持つが、下の２条には刻みが入る。隆帯の間に穿孔が穿たれていて、穿孔に添うように沈線が描かれている。鉢の口縁部と思われる。

（第５群土器）11・13・16～28・35～37・111～118・137～142

第１群から第４群の時期に確定できないものを本群とした。

16～28は底部の網代痕である。時期・器種共に定かではないが、出土した網代痕の大半が、２本越え、１本潜り、１本送りである。35・36・37は深鉢である。35・36は、押圧隆帯の下に、櫛歯状工具によるしっかりした条線が見られる。36は口縁部に無文帯をもつ。37は大きな刺突文が入る。はっきりした時期は不明だが、称名寺式期から堀之内１式を大きく離れるものではないと考える。111～118は縄文のみを施文した深鉢で、111～114はＬＲ縄文、115はＲＬ縄文の口縁部である。116～118はＬＲ縄文の深鉢胴部である。堀之内１式から堀之内２式の間のものではないだろうか。137は、後期初頭称名寺式期に併行する三十稲場式土器の鉢胴部の破片と思われる。

138～142は、東北地方一円に広く分布が知られている後期中葉の土器であるが、長野市での出土は極めて希で、猪平遺跡（長野市教育委員会1994）に１例をみるだけである。多くは３単位の大形突起をもつ台付深鉢で、平行沈線を用いて描いた区画に刺突文が添う場合が一般的であるらしい。139～142は同一個体であると思われる。時期確定はできないが、金生遺跡（山梨県）では堀之内２式の頃、明専寺遺跡（飯綱町）では加曽利Ｂ１式に比定されている。本遺跡では共伴関係による時期決定はできないが、堀之内２式・加曽利Ｂ１式が共に出土しているため、この時期に位置付けたい。

土製品（７・13・14・15）

７はミニチュア土器で、沈線と縦に細い隆帯が施されている。底部近くにも細い隆帯が巡り、丁寧な仕上がりになっている。13は無文の耳栓で、ほぼ完形に近い。14・15は中実土偶である。14は○脚の脚部で、安定感がある。沈線による文様が施されている。15は胴部の一部で肩がはっている。乳房の痕跡がある。表裏共、沈線による文様がある。

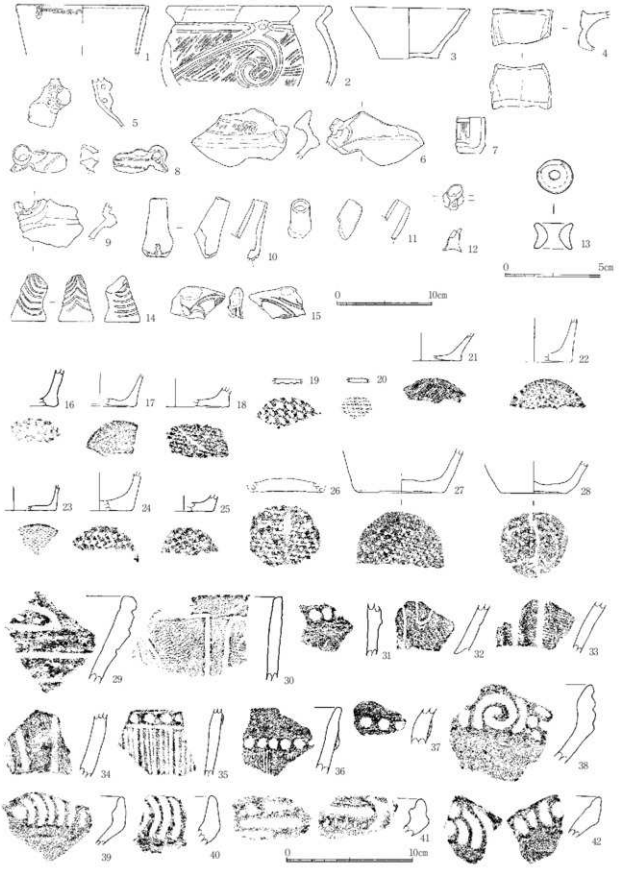


図130　縄文時代の土器・土製品①（1：4・1：2(13)・1：3）

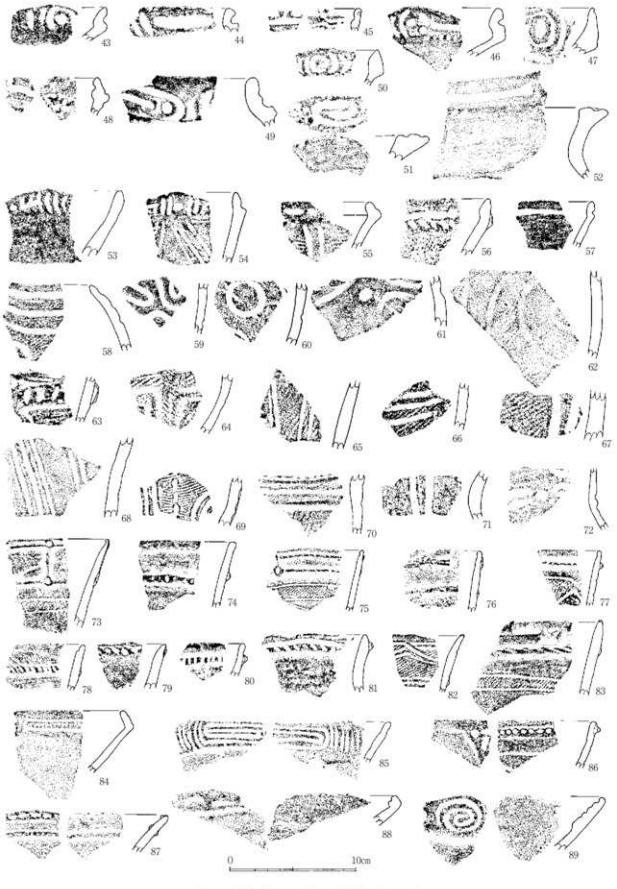


図131　縄文時代の土器・土製品②（1：3）

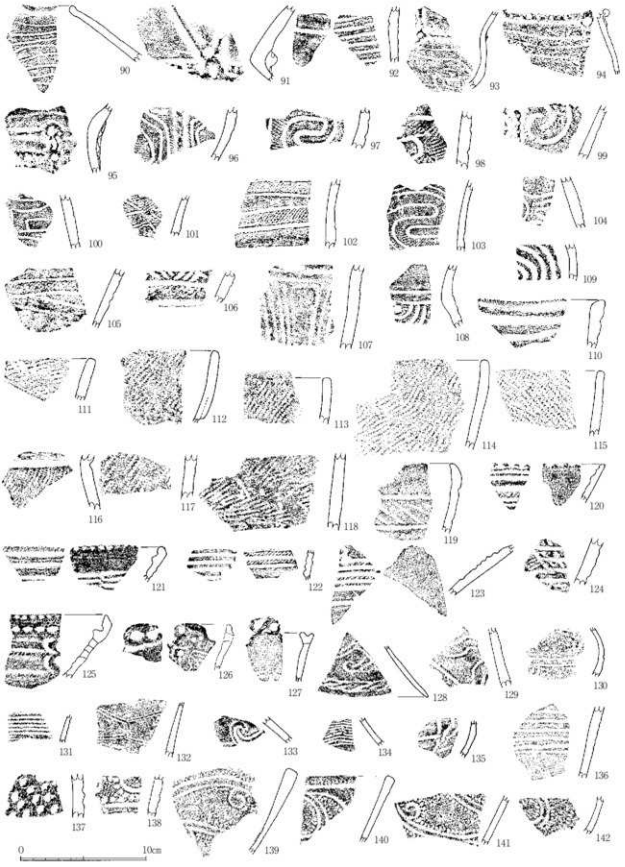


図132　縄文時代の土器・土製品③（1：3）

2．弥生時代の土器・土製品（図133～135）

a．壺（1～53）

1～5は壺の口縁部である。この内、1～3は、受け口状を呈するもので、外面には地文にＬＲの縄文が施され、その上からヘラ描山形文が施文される。山形文はジグザグ状に連続するものと、八の字状の山形文を繰り返して並べるものがある。

4・5は甕の器形に近い、壺の口縁部である。4は、口縁端部は丸く収まり、口縁部直下に無文帯を挟んで、ヘラ描横線文が複数段施されている。5は、口縁端部に連続する刻みが施され、無文帯を挟んで下部に凸帯を形成する。凸帯上には地文にＬＲの縄文、その上からヘラ描山形文を施している。

6～9は壺の頸部である。凸帯上にＬＲの縄文が施されるもの（6・9）や、刻みを施すもの（8）、ヘラ描横線文が施されるもの（7）などがある。凸帯には内側から外側に向かって押し出されるもの（6）と、貼り付けられるもの（7～9）の2種類がある。

10～50は壺の胴上部～胴下部である。この内、胴中部付近に、10は側面から穿孔される半円形の突起が、また11～14は円形の突起が添付されている。14は、ヘラ描による重三角文が施文される。重三角文の上方には、ヘラ描波状文が施されている。10も、突起の下方は重三角文が施文されているようである。11・13は、突起の上方に、ヘラ描横線文で区画された櫛描横線文が施される。12は、ヘラ描文の区画内を、ＬＲの縄文で充填している。

15～20は、ヘラ描横線文に挟まれた区画内に、連続する半月形の刺突文（押し引き列点文）が施される。刺突は、右回転に施されるものと左回転に施されるものがある。

21・22は、ヘラ描横線文の区画の中に、櫛描短斜線文が施されている。櫛描短斜線文の上方、あるいは下方には、櫛描横線文が施文されている。

23・24は、ヘラ描横線文と櫛描横線文が組み合わされたものである。

25は、地文にＬＲの縄文を施した後、ヘラ描横線文を櫛状に複数段施文したものである。上方のヘラ描横線文は、四角く収束しており、4本で一つの単位を形成していたものと想定される。

26～28は、胴上部から胴中部にかけて、ヘラ描横線文およびヘラ描山形文が施文されるものである。ヘラ描山形文の区画内には、地文にＬＲの縄文が認められる。山形文は、Ｖ字に近いものや、波状文に近いものなど、多様性に富む。26は、貼り付け凸帯上にもＬＲの縄文が施されるが、他の横線文間は地文の縄文を磨り消している。

29・30は、胴中部～胴下部に、ヘラ描重三角文が施文される。地文に縄文は認められない。

31～39は、ヘラ描横線文が主体となるグループである。地文のＬＲ縄文を、ヘラ描横線によって区画し、その一部を磨り消すもの（31～34・38）や、単にヘラ描横線のみを施文するもの（35～37・39）等がある。

40・41は、胴中部～下部にかけて、ヘラ描重山形文が施されている。40は、2条のヘラ描横線文を挟んで上下に重山形文が施されるが、全体的に文様は浅く、やや不明瞭である。41は、地文にＬＲの縄文を施し、その上から重山形文とヘラ描横線文を施文している。

42・43は、胴中部および胴下部付近に、ヘラ描による連弧文が施文される。42は、連弧文の上方にＬＲの縄文が認められる。

44は、ヘラ描横線文の間に櫛描波状文を施すものである。

45～50は、懸垂文が施文されるグループである。懸垂文の内部は、縦位の櫛描直線文が施される例が多い。ヘラ描文の外周を、刺突文（押し引き列点文）で囲むものもみられる。縦位のヘラ描山形文が施されるものもある。

51～53は、壺の底部である。いずれも胴部外面には縦方向のミガキ、内面はハケおよびナデ調整が施される。

壺に関しては、すべて弥生時代中期栗林式に比定される。古相～新相を呈するものまで、時期幅を有する。

図133　弥生時代の土器・土製品（壺）（1：3・1：4）

b．甕（54～97）

54は、検出面出土の甕である。口縁部～胴部下半まで復元することができた。口縁端部は工具による刻みが施され、弱い波状を呈している。胴部中位にも、工具による連続する刻み目が施されている。胴部上半には、櫛描波状文が巡らされているが、摩耗のため不鮮明である。

55・56は、甕の底部である。55は、外面に縦方向のミガキ、内面にもミガキが施されるが、方向等は不明瞭である。56は、小型の甕の底部である。外面にはハケメの痕跡が残り、内面はナデ調整となっている。

57～68は、甕の口縁部である。口縁部は、刻み等により波状を呈するもの（57～64）と、平縁のもの（65・66・68）、受け口状を呈するもの（67）の大きく3通りに分類される。

このうち、口縁端部が波状を呈するものには、工具によって連続する刻み目が施されるもの（59・60・62）、工具によるオサエで波状を呈するもの（57・58・61・63・64）がある。また、波状を呈するものの中にも、口唇部に縄文を施すもの（58・62・63）とそうでないもの（57・59～61・64）がある。胴部上位は、縦方向の櫛描羽状文が施されるもの（57）、櫛描波状文が施されるもの（63・64）、横方向のハケメ状工具の痕跡が残るもの（62）等がある。

平縁のものは、口唇部に縄文が施されるもの（66・68）とそうでないもの（65）がある。胴部上位は、櫛描波状文が施されるもの（65・68）、横方向の櫛描羽状文が施された後櫛描波状文が施されるもの（66）がある。

受け口状のもの（67）は、口唇部と受け口部外面にＬＲの縄文が施されている。受け口部外面にヘラ描文は認められない。胴部上位には、櫛描波状文が施されている。

69～97は、甕の胴部である。このうち、69～72および78～82には、肩部に工具による刻みが施されている。

69は、横方向の櫛描羽状文が施された後、羽状文の境界部分（肩部の粘土接合部）に刻みが施されている。70は、縦方向の櫛描羽状文が施された後、刻みが施される。71は、刻みの下方を縦方向の櫛描直線文で施文している。72は、横方向の櫛描羽状文の境界部分よりやや上方に、刻みが施されている。78は、櫛描山形文の下方に沿うようにして、山形に連続する刻みを入れている。79は、刺突の上方に櫛描波状文が施される。胴下部は、ハケメの後ミガキ調整が施されている。80も、縦方向の羽状文もしくは櫛描山形文の下方、粘土の接合部に連続する刻みを施す。81は、刻みの下方に、櫛描波状文を施した後、縦方向の櫛描直線文を施している。82は、刻みの上方に弱い櫛描波状文が認められる。

73～77は、櫛描羽状文のみが認められるグループである。このうち、73～76は横羽状文、77は縦羽状文が施される。

83・84は、櫛描斜線文、もしくは櫛描羽状文を施した後に、櫛描横線文を施文している。

85～87は、櫛描波状文のみが認められるグループである。

88～90は、櫛描斜線文、もしくは横方向の櫛描羽状文の後、櫛描波状文を施すものである。

91は、櫛描波状文の後、櫛描横線文を複数段施している。

92～97は、櫛描波状文を帯状、もしくは全面に施した後、縦位の櫛描直線文を施すグループである。

以上、甕に関しても、すべて弥生時代中期栗林式に比定される。肩部に刻みが施されるものや、横方向の櫛描羽状文のみが施されるもの、櫛描波状文ののち縦位の櫛描直線文を施すものまで、バラエティーに富んでいる。これらの様相においては、栗林式の古相を呈するものから新相を呈するものまで、幅があるといえる。ただし、栗林式に続く後期吉田式や箱清水式の甕は、全くといってよいほど確認することができなかった。これは、甕のみでなく壺に関しても同様のことがいえ、弥生時代における周辺地域の土地利用や、集落の変遷課程を探る上で、興味深い事実といえる。

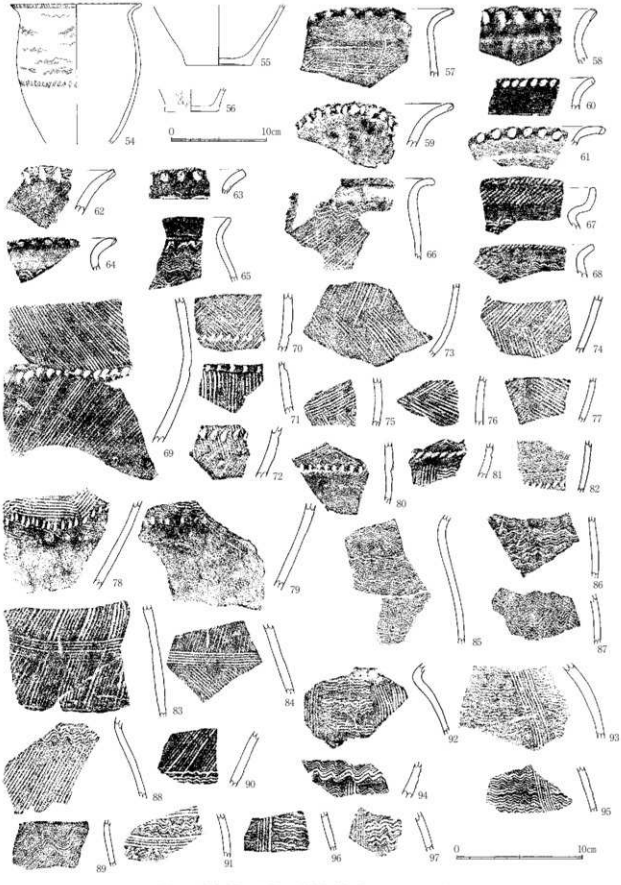


図134　弥生時代の土器・土製品（選）（1：4・1：3）

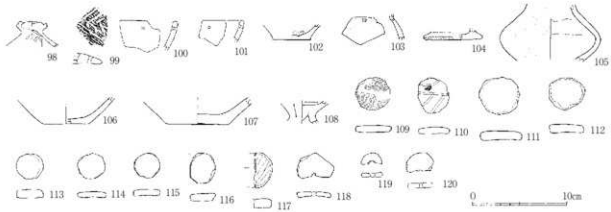


図135　弥生時代の土器・土製品（その他の器種）（1：4）

c．その他の器種（98～120）

98・99は、弥生時代中期栗林式の蓋と考えられる。98は、つまみ部上面に2方向の刺突が施されている。99は、地文にLRの縄文とヘラ描文が施され、2個一対の穿孔も認められる。

100～102は、小型の鉢である。100・101は口縁部で、100は内外面共に赤彩されている。いずれも穿孔が1ヶ所認められるが、元々は2個一対であったと推測される。102は底部で、底部を除く外面のみ赤彩されている。

103は、鉢もしくは小型の壺の頸部である。外面は赤彩され、頸部に1個所の穿孔が施されている。

104は、器種不明の土器、あるいは土製品である。底部を除いて内外面共に赤彩される。底部直上は、凸帯状に突出し、凸帯状の突出部端部には、連続する刻みが施されている。小型の高坏、もしくは装飾器台の一部等とも想定されるが、判然としない。

105は、小型の壺である。胴部外面が赤彩される。最大径は胴部下方に位置しており、下膨れ状を呈する。

106・107は、壺もしくは鉢の底部である。内外面共に赤色塗彩されるが、107は底部外面には赤彩されないのに対し、106は底部外面まで赤彩されている。

108は、高坏である。坏部と脚部の接合部付近のみの遺存である。外面、および坏部内面は赤色塗彩される。

109～116は、土製円板である。このうち、109・110・113・114は櫛描波状文や櫛描羽状文、ヘラ描文等が認められ、弥生時代中期の所産であるものと考えられる。この他については、所属時期が判然としないが、一括してここに掲載した。用途については、不明確である。

117～120は、有孔土製円板である。117は、ヘラ描文が認められることから、弥生時代中期に属する。この他については、所属時期が判然としないが、一括してここに掲載した。紡錘車等に利用されたものと考えられる。

これらの器種の内、赤色塗彩された土器の中には、弥生時代後期の吉田式や箱清水式に比定され得るものも存在している。しかし、総合的にみると、主体となるのはやはり弥生時代中期栗林式期のものであり、壺や甕の様相と一致している。

以上、遺構外出土、あるいは遺構覆土混入の弥生時代土器・土製品については、そのほとんどが弥生時代中期栗林式期に比定されるといえる。これは、今回の発掘調査区内において、弥生時代の遺構が中期栗林式の住居址が主体で、弥生時代後期の遺構が全く確認されなかったことにも関連しているものといえる。ただし、これらの栗林式の土器においては、古相を呈するものから新相を呈するものまで時間幅が認められる。弥生時代中期を通して、人々がこの地に一定期間住み続けていた可能性が高いことを示すものといえよう。

3．古墳時代以降の土器・土製品（図136・137）

1～51は、古墳時代以降の土器、あるいは土製品である。このうち、1～19は古墳時代の土器、41～51は古代以降の土器である可能性が高いが、須恵器の胴部破片については古墳時代に属するか、古代に属するかを断定するのが困難であるため、ここに一括して掲載した。

1・2は土師器坏である。1は、内外面共に横方向のヘラミガキが施され、内面は黒色処理される。古墳時代後期前葉に比定される。2は、1に比べ体部が深身を呈するものである。外面は調整不明瞭だが、内面には、横方向のヘラミガキおよび黒色処理が施される。古墳時代中期末葉～後期前葉に比定される。

3～7は、土師器高坏である。3は、内湾する高坏坏部で、外面には縦方向の粗いヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキが施される。古墳時代前期後葉頃の所産の可能性がある。4は、須恵器模倣形態の高坏坏部である。古墳時代後期前葉に比定されよう。5～7は脚部である。ハの字に大きく開くタイプ（5・7）と、棒状に近いタイプ（6）がある。6は、坏部内面が黒色処理される。

8は、須恵器の坏蓋である。口縁端部内側に、先端を欠損するものの、返りが認められる。古墳時代後期後葉（7世紀代）の所産と考えられる。

9は、須恵器甕の頸部である。櫛描波状文が、丁寧に施されている。古墳時代中期後葉の所産であろう。

10は、土師器の壺である。口縁部が内湾気味に立ち上がる。胴部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整。

11・12は土師器の鉢である。11は口縁部が外反しながら立ち上がり、12は口縁部が短く外方につまみ上げられる。11・12共に外面の調整は不明瞭だが、内面は11が板状工具によるナデ、12は横方向にミガかれている。

13～17は、甕の底部である。このうち、13は平底を呈するが、他は全て台付甕の台部と判断される。

18は、甑もしくは有孔鉢の底部である。底部の穿孔は単孔である。内外面共に、ナデ調整が施される。

19は、ミニチュア土器である。底部のみの遺存である。底径は3.9cmで、黒斑のため内外面黒色を呈する。

20～40は、須恵器の甕もしくは壺の胴部破片である。外面のタタキ目には、平行タタキのもの（21～25・27・28）、格子タタキのもの（20・26・29・30）、平行タタキが直交するもの（31）、平行タタキが斜交するもの（32・34～39）等がある。内面は、同心円状の当て具痕が半スリ消しされるもの（20・24・36）、明瞭に残るもの（26・32・35・38）、完全にスリ消されるもの（21・22・27・28・31・34・37・39）、無文の当て具が用いられるもの（23・25・30）等がある。古墳時代中期中葉～平安時代までの須恵器が含まれるものと考えられる。

41～45は、須恵器の坏身、あるいは坏蓋である。41は無台坏である可能性が高く、42は無台坏、43・45は有台坏である。このうち、42はいわゆる赤焼（生焼）須恵器であり、他は良く焼けて青灰色、あるいは暗青灰色を呈す。43の高台内側には、「大」の字状のヘラ描文字が認められる。高台は坏の屈曲部近くに位置している。坏底部における下方への突出度はさほど高くない。45の高台端部は外端接地で、高台径も43に比べて広いが、高台の位置は坏屈曲部よりやや内側に位置している。坏底部の下方突出度も低い。44は須恵器坏蓋で、宝珠のつまみが付く。つまみの径は広く扁平で、つまみ中央部の突出の度合いはさほど高くない。

46は、底部回転糸切りの土師器坏である。内面は黒色処理される。油カスが付着しており、灯明皿のように利用された可能性もある。平安時代の所産である。47は、ロクロ土師器の甕である。平安時代の所産と考えられる。

48は、方形を呈する不明土製品で、時期等詳細は不明である。49は、中世瀬戸・美濃焼の小皿（丸皿）の底部である。内外面には緑色を呈する釉がツケガケされており、内面底部には菊花の印花文が施される。底部外面には輪ドチの痕跡が認められる。高台は削り出し高台で、断面は緩やかな三角形を呈する。

50・51は、同一個体と考えられる須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面は当て具痕が完全にスリ消される。

以上の遺物の様相からは、今回確認された遺構群と概ね同時期のものが主体を占めるといえよう。

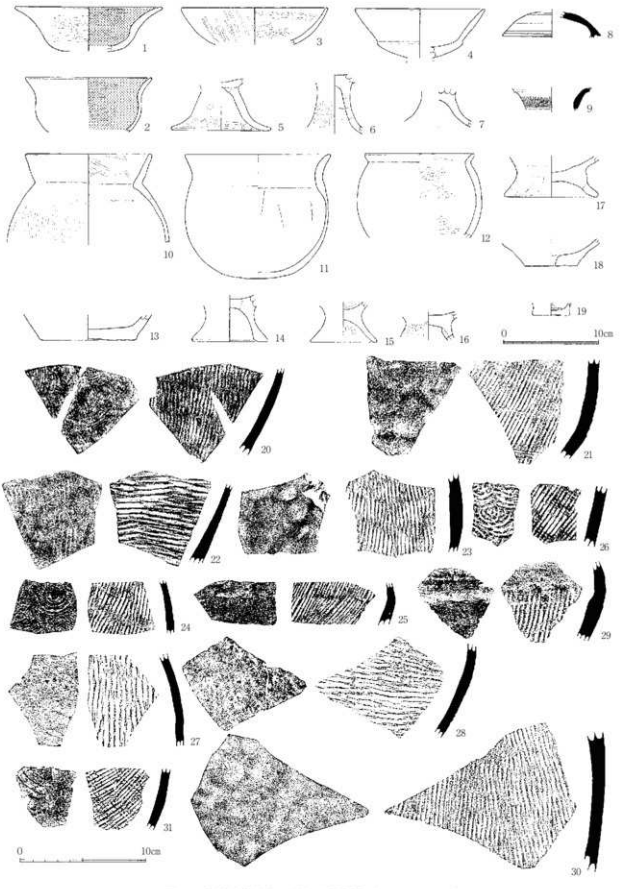


図136　古墳時代以降の土器・土製品①（1：4・1：3）

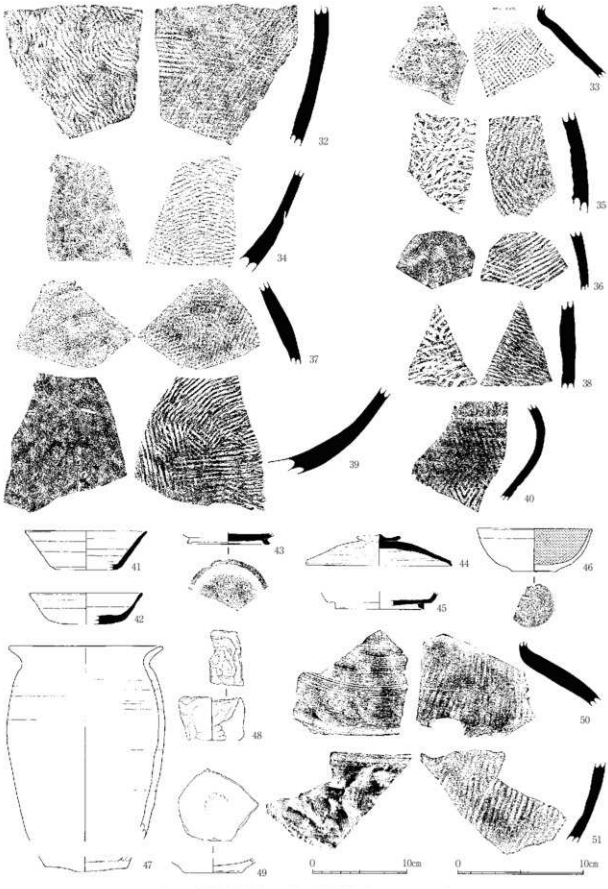


図137　古墳時代以降の土器・土製品②（1：3・1：4）

表7　遺構覆土混入および遺構外出土土器・土製品出土地表

図版番号	番号	遺構	層位	器種
縄文時代の土器・土製品				
130	1	ＳＢ44	覆土上層	深鉢
〃	2	検出面	—	鉢
〃	3	ＳＢ41	床直	鉢
〃	4	ＳＢ23	覆土上層～床直	注口土器
〃	5	ＳＤ10	覆土	注口土器
〃	6	ＳＢ40	覆土上層～床直	鉢
〃	7	ＳＢ43	覆土上層～床直	ミニチュア土器
〃	8	ＳＢ10	覆土下層～床直	鉢
〃	9	ＳＢ33	覆土	鉢
〃	10	検出面	—	注口土器
〃	11	ＳＢ10	覆土上層	注口土器
〃	12	ＳＢ25	覆土下層～床直	壺
〃	13	検出面	—	耳栓
〃	14	ＳＢ19	覆土上層	土偶
〃	15	検出面	—	土偶
〃	16	ＳＢ４	覆土上層	
〃	17	ＳＢ４	覆土上層～床直	
〃	18	ＳＢ７	覆土上層～床直	
〃	19	ＳＢ12・13	覆土上層	
〃	20	ＳＢ12・13	覆土上層	
〃	21	ＳＢ23	覆土上層～床直	
〃	22	ＳＢ21	覆土上層～床直	
〃	23	ＳＢ35	覆土上層～床直	
〃	24	ＳＢ40	覆土上層～床直	
〃	25	ＳＢ41	覆土上層～床直	
〃	26	ＳＫ４	覆土	
〃	27	検出面	—	
〃	28	検出面	—	
〃	29	ＳＢ25	覆土上層～床直	深鉢
〃	30	ＳＸ３	覆土上層～床直	深鉢
〃	31	検出面	—	深鉢
〃	32	ＳＢ37	覆土上層～床直	深鉢
〃	33	ＳＢ７	覆土上層～床直	深鉢
〃	34	ＳＢ35	覆土上層～床直	深鉢
〃	35	ＳＢ31	覆土上層～床直	深鉢
〃	36	ＳＢ18	覆土上層～床直	深鉢
〃	37	ＳＢ10	覆土上層	深鉢
〃	38	ＳＫ２	覆土上層	鉢
〃	39	検出面	覆土	鉢
〃	40	ＳＢ13	覆土下層	鉢
〃	41	ＳＢ45	覆土上層～床直	鉢
〃	42	ＳＢ22	覆土上層～床直	鉢
131	43	ＳＢ22	覆土上層～床直	鉢
〃	44	検出面	—	鉢
〃	45	ＳＢ７	覆土上層～床直	鉢
〃	46	ＳＢ14	覆土上層～床直	鉢
〃	47	ＳＢ３	覆土上層～床直	鉢
〃	48	ＳＸ３	覆土上層～床直	鉢
〃	49	ＳＢ14	覆土上層～床直	鉢
〃	50	ＳＢ12	覆土上層～床直	鉢
〃	51	検出面	—	鉢
〃	52	ＳＢ４	覆土上層～床直	鉢
〃	53	ＳＢ22	覆土上層～床直	鉢
〃	54	ＳＢ35	覆土上層	深鉢
〃	55	ＳＢ31	覆土上層～床直	深鉢
〃	56	ＳＢ２	覆土上層～床直	深鉢
〃	57	ＳＢ22	覆土上層～床直	鉢
〃	58	検出面	—	鉢
〃	59	ＳＢ12・13	覆土上層	注口土器
〃	60	ＳＢ33	覆土上層～床直	注口土器
〃	61	ＳＢ35	覆土上層～床直	鉢
〃	62	ＳＤ10	覆土	鉢
〃	63	ＳＢ11	覆土上層～床直	深鉢
〃	64	ＳＤ13	覆土	深鉢
〃	65	ＳＢ37	覆土上層～床直	深鉢
〃	66	ＳＢ21	覆土下層	深鉢
〃	67	検出面	—	深鉢
〃	68	ＳＢ４	覆土上層	深鉢
〃	69	ＳＢ１	覆土下層	深鉢
〃	70	ＳＸ３	覆土	深鉢
〃	71	検出面	—	鉢
〃	72	検出面	—	鉢
〃	73	検出面	—	深鉢
〃	74	ＳＢ35	覆土上層～床直	深鉢
〃	75	ＳＢ17	覆土上層～床直	深鉢
〃	76	ＳＢ13	覆土上層～床直	深鉢
〃	77	ＳＢ15	覆土上層～床直	深鉢
〃	78	ＳＢ11	覆土上層～床直	深鉢
〃	79	ＳＢ４	覆土上層	深鉢
〃	80	ＳＢ７	覆土上層	深鉢
〃	81	ＳＢ11	覆土上層～床直	深鉢
〃	82	ＳＢ１	覆土上層～床直	深鉢
〃	83	ＳＢ20	覆土上層～床直	深鉢
〃	84	ＳＢ１	覆土上層～床直	鉢
〃	85	ＳＤ13	覆土	鉢
〃	86	ＳＢ36	覆土上層～床直	深鉢
〃	87	ＳＫ12	覆土	鉢
〃	88	ＳＫ12	覆土	鉢
〃	89	ＳＢ17	覆土上層～床直	鉢
132	90	ＳＢ11	覆土上層～床直	注口土器
〃	91	ＳＢ７	覆土上層	鉢
〃	92	ＳＸ３	覆土上層～床直	鉢
〃	93	検出面	—	鉢
〃	94	ＳＤ４	覆土	鉢
〃	95	ＳＢ31	覆土上層～床直	注口土器
〃	96	ＳＢ13	床直	注口土器
〃	97	ＳＢ13	覆土下層	注口土器
〃	98	ＳＢ６	覆土上層～床直	深鉢
〃	99	ＳＤ13	覆土	深鉢
〃	100	ＳＢ43	覆土上層～床直	深鉢
〃	101	ＳＢ１	覆土上層～床直	深鉢
〃	102	ＳＸ４	覆土	深鉢
〃	103	ＳＢ10	覆土上層～床直	深鉢
〃	104	ＳＤ11	覆土	深鉢
〃	105	ＳＢ25	覆土上層～床直	深鉢
〃	106	ＳＤ13	覆土	深鉢
132	107	ＳＢ23	覆土上層～床直	深鉢
〃	108	検出面	—	鉢
〃	109	ＳＢ22	覆土上層～床直	鉢
〃	110	ＳＢ10	覆土上層	鉢
〃	111	ＳＢ７	覆土上層～床直	深鉢
〃	112	ＳＢ33	覆土上層～床直	深鉢
〃	113	ＳＢ43	覆土上層～床直	深鉢
〃	114	検出面	—	深鉢
〃	115	検出面	—	深鉢
〃	116	ＳＢ35	覆土上層～床直	深鉢
〃	117	検出面	—	深鉢
〃	118	ＳＢ33	覆土上層～中層	深鉢
〃	119	ＳＢ４	覆土上層	深鉢
〃	120	ＳＢ８	覆土上層～床直	鉢
〃	121	ＳＢ33	覆土上層	鉢
〃	122	ＳＢ14	覆土上層	鉢
〃	123	ＳＢ３	覆土上層～床直	鉢
〃	124	ＳＢ41	覆土上層～床直	深鉢
〃	125	ＳＢ22	覆土上層～床直	鉢
〃	126	ＳＢ35	覆土上層～床直	鉢
〃	127	ＳＢ５	覆土上層	鉢
〃	128	ＳＢ36	覆土上層～床直	壺
〃	129	検出面	—	鉢
〃	130	ＳＢ２	覆土上層～床直	注口土器?
〃	131	ＳＢ13	覆土上層	鉢
〃	132	ＳＢ24	覆土上層～床直	深鉢
〃	133	ＳＢ41	覆土上層～床直	注口土器
〃	134	ＳＢ13	覆土上層	注口土器
〃	135	ＳＸ３	覆土上層～床直	注口土器
〃	136	ＳＢ４	覆土上層	深鉢
〃	137	ＳＢ33	覆土上層～床直	鉢
〃	138	検出面	—	深鉢
〃	139	ＳＢ40	覆土上層～床直	深鉢
〃	140	ＳＢ33	覆土上層	深鉢
〃	141	ＳＢ36	覆土上層～床直	深鉢
〃	142	ＳＢ11	覆土上層～床直	深鉢
弥生時代の土器・土製品				
133	1	ＳＢ４	覆土上層	壺
〃	2	ＳＢ14	覆土上層～床直	壺
〃	3	ＳＢ40	覆土上層～床直	壺
〃	4	ＳＤ５	覆土	壺
〃	5	検出面　北側試掘（ＳＢ４・９）	覆土	壺
〃	6	ＳＢ35	床直	壺
〃	7	ＳＢ４	覆土上層	壺
〃	8	ＳＢ45	覆土上層～床直	壺
〃	9	ＳＢ８	覆土上層～床直	壺
〃	10	ＳＢ１	覆土上層	壺
〃	11	ＳＢ４	覆土上層	壺
〃	12	ＳＢ38	覆土上層～床直	壺
〃	13	ＳＢ45	床直上	壺
〃	14	ＳＢ36・37	覆土上層～床直	壺
〃	15	ＳＢ１	覆土上層～床直	壺
〃	16	ＳＸ１	覆土上層	壺
〃	17	ＳＢ28	覆土	壺
〃	18	ＳＢ36	覆土上層～床直	壺
〃	19	ＳＢ７	覆土上層～床直	壺
〃	20	ＳＢ13	覆土上層	壺
〃	21	ＳＢ11	覆土上層～床直	壺
〃	22	ＳＢ28	覆土	壺
〃	23	ＳＢ１	覆土下層	壺
〃	24	ＳＢ43	覆土上層～床直	壺
〃	25	ＳＢ１	覆土上層～床直	壺
〃	26	ＳＢ13	覆土下層	壺
〃	27	ＳＢ７	覆土上層～床直	壺
〃	28	ＳＢ７	覆土上層	壺
〃	29	ＳＢ41	覆土上層～床直	壺
〃	30	ＳＸ３	覆土上層～床直	壺
〃	31	ＳＢ４	覆土上層	壺
〃	32	ＳＤ３	覆土	壺
〃	33	ＳＢ４	覆土上層	壺
〃	34	ＳＢ28	覆土	壺
〃	35	ＳＸ４	覆土	壺
〃	36	ＳＢ35	覆土上層～床直	壺
〃	37	ＳＢ33	覆土上層～中層	壺
〃	38	検Ｐｉｔ109	覆土	壺
〃	39	ＳＢ６	覆土上層～床直	壺
〃	40	ＳＢ６	覆土上層～床直	壺
〃	41	検Ｐｉｔ110	覆土	壺
〃	42	ＳＢ１	覆土下層	壺
〃	43	ＳＢ13	覆土下層～床直	壺
〃	44	ＳＢ41	覆土上層～床直	壺
〃	45	ＳＢ33	覆土上層～床直	壺
〃	46	ＳＢ41	覆土上層～床直	壺
〃	47	検Ｐｉｔ30	覆土	壺
〃	48	ＳＢ１	覆土上層	壺
〃	49	ＳＸ１	覆土上層	壺
〃	50	ＳＢ45	覆土下層	壺
〃	51	ＳＢ４	覆土上層	壺
〃	52	ＳＢ４	覆土上層～床直	壺
〃	53	ＳＢ８	覆土上層～床直	壺
134	54	検出面	—	甕
〃	55	ＳＢ35	覆土上層～床直	甕
〃	56	検出面	—	甕
〃	57	ＳＢ４	覆土上層	甕
〃	58	ＳＢ11	覆土上層	甕
〃	59	ＳＤ１	覆土	甕
〃	60	ＳＢ33	覆土上層～床直	甕
〃	61	ＳＢ35	覆土上層	甕
〃	62	ＳＢ８	覆土上層～床直	甕
〃	63	ＳＢ40	覆土上層～床直	甕
〃	64	ＳＢ１	覆土上層～床直	甕
〃	65	ＳＢ33	覆土上層～中層	甕
〃	66	ＳＢ35	覆土上層～床直	甕
〃	67	ＳＢ33	覆土上層～中層	甕
〃	68	ＳＢ36	覆土下層	甕
〃	69	ＳＢ１	覆土上層～床直	甕
134	70	ＳＢ４	覆土上層～床直	甕
〃	71	ＳＢ33	覆土上層～床直	甕
〃	72	ＳＢ45	覆土上層～床直	甕
〃	73	ＳＢ35	覆土上層～床直	甕
〃	74	ＳＢ35	覆土上層～床直	甕
〃	75	ＳＤ３	覆土中層	甕
〃	76	ＳＢ43	覆土上層～床直	甕
〃	77	ＳＢ44	覆土上層	甕
〃	78	ＳＤ１	覆土	甕
〃	79	ＳＤ１	覆土中層	甕
〃	80	ＳＢ44	覆土上層～床直	甕
〃	81	検出面　北側試掘（ＳＢ４・９）	—	甕
〃	82	検出面	—	甕
〃	83	ＳＢ36	覆土上層～床直	甕
〃	84	ＳＢ14	覆土上層～床直	甕
〃	85	検Ｐｉｔ71	覆土	甕
〃	86	ＳＢ40	覆土上層～床直	甕
〃	87	ＳＢ35	覆土上層	甕
〃	88	検出面　北側試掘（ＳＢ４・９）	—	甕
〃	89	ＳＢ35	覆土上層～床直	甕
〃	90	ＳＢ13	覆土下層～床直	甕
〃	91	検出面	—	甕
〃	92	ＳＢ４	覆土上層～床直	甕
〃	93	ＳＸ１	覆土上層	甕
〃	94	ＳＢ13	覆土下層～床直	甕
〃	95	ＳＢ１	覆土上層～床直	甕
〃	96	ＳＢ４	覆土上層～床直	甕
〃	97	ＳＤ11	覆土	甕
135	98	ＳＢ17	覆土上層～床直	壺
〃	99	ＳＢ33	覆土中層	壺
〃	100	ＳＢ32	覆土下層	鉢
〃	101	ＳＢ45	覆土上層～床直	鉢
〃	102	ＳＢ１	覆土上層～床直	鉢
〃	103	ＳＢ１	覆土上層～床直	鉢
〃	104	ＳＢ35	覆土上層～床直	不明
〃	105	ＳＢ８	覆土上層～床直	壺
〃	106	ＳＢ35	覆土上層	壺?
〃	107	ＳＢ６	覆土上層～床直	壺?
〃	108	検出面	—	高坏
〃	109	ＳＢ13	覆土下層	土製円板
〃	110	ＳＢ17	覆土上層～床直	土製円板
〃	111	ＳＸ３	覆土上層	土製円板
〃	112	ＳＢ20	覆土上層～床直	土製円板
〃	113	ＳＢ43	覆土上層～床直	土製円板
〃	114	ＳＢ13	覆土下層	土製円板
〃	115	ＳＢ１	覆土上層～床直	土製円板
〃	116	ＳＢ38	覆土上層～床直	土製円板
〃	117	ＳＢ20	覆土上層～床直	紡錘車
〃	118	ＳＢ１	覆土上層～床直	紡錘車
〃	119	ＳＢ１		紡錘車
〃	120	ＳＢ１	覆土上層～床直	紡錘車
古墳時代以降の土器・土製品				
136	1	検Ｐｉｔ		坏
〃	2	ＳＢ42		鉢
〃	3	検出面	—	高坏
〃	4	検出面	—	高坏
〃	5	検出面	—	高坏
〃	6	検出面	—	高坏
〃	7	ＳＫ２		高坏
〃	8	ＳＤ11		蓋
〃	9	検出面	—	碗
〃	10	検出面	—	壺
〃	11	検出面	—	鉢
〃	12	検出面	—	鉢
〃	13	ＳＤ11		甕
〃	14	検出面	—	台付甕
〃	15	ＳＢ25		台付甕
〃	16	検出面	—	台付甕
〃	17	ＳＢ25		台付甕
〃	18	検出面	—	甑?
〃	19	検出面	—	ミニチュア
〃	20	ＳＢ25	床直	甕
〃	21	ＳＤ13	覆土	甕
〃	22	ＳＢ11	覆土上層～床直	甕
〃	23	ＳＢ23	覆土上層～床直	甕
〃	24	ＳＢ１	覆土下層	甕
〃	25	ＳＢ12・13	覆土上層	甕
〃	26	ＳＢ13	覆土下層～床直	甕
〃	27	検出面	—	甕
〃	28	ＳＤ５	覆土	甕
〃	29	ＳＤ６	覆土	甕
〃	30	ＳＢ14	床直	甕
〃	31	ＳＢ14	覆土上層～床直	甕
137	32	ＳＢ28	覆土	甕
〃	33	ＳＸ４	覆土	甕
〃	34	検出面	—	甕
〃	35	検出面	—	甕
〃	36	ＳＢ５	覆土上層～床直	甕
〃	37	ＳＢ43	覆土上層～床直	甕
〃	38	ＳＢ43	覆土上層～床直	甕
〃	39	ＳＢ40	覆土上層～床直	甕
〃	40	ＳＢ17	覆土下層	甕
〃	41	ＳＤ13	覆土	無台坏
〃	42	検出面	—	無台坏
〃	43	検出面	—	有台坏
〃	44	ＳＢ25	覆土上層～床直	蓋
〃	45	検出面	—	有台坏
〃	46	検出面	—	坏
〃	47	検出面	—	甕
〃	48	検出面	—	不明土製品
〃	49	検出面	—	皿
〃	50	ＳＫ７	覆土	甕
〃	51	ＳＢ７ ＳＸ３	覆土上層～床直 覆土上層	甕

（2）石器・石製品・その他の遺物

1～37は、石器・石製品、およびその他の遺物である。

1～20は打製石鏃の製品および未製品と考えられる。このうち、1～16が製品、17～20が未製品とみられる。

1～8は、無茎鏃である。いずれも、縄文時代の所産と判断される。このうち、1～3は、平面形がほぼ正三角形を呈する、いわゆる三角形鏃である。石材はすべてチャートである。縄文時代中～後期の所産と判断される。4は、平面形が正三角形に近いが、基部にはわずかに抉りが認められる。石材は、幾分グレー～黒味掛かるものの、透明感のある良質な黒曜石で、信州産の黒曜石である可能性が高い。5は、平面形が二等辺三角形を呈する。基部はほぼ直線状を呈する。チャート製。6は側縁部も含め、全体に平面形が丸味を呈する。石材はチャートである。7は基部が内湾し、抉り部を作出したものである。1方の返し先端は欠損している。抉り部は直線的で、三角形を呈する。石材はチャート製。縄文時代中期後葉頃の所産の可能性がある。8は、円脚鏃と長身鏃の中間形態を呈する石鏃の一部分である。類例は、諏訪湖の湖底遺跡として著名な諏訪市曽根遺跡（戸沢1983）等で認められる。石材は乳白色の玉髄で、他の石鏃とは明らかに異質である。曽根遺跡は縄文時代草創期の遺跡として名高いが、本例は1点のみの出土であるため、どの時期に比定されるかは断定困難である。

9～16は、有茎鏃である。いずれも、弥生時代の所産である可能性が高い。9は、側縁部が幾分内湾する。先端部と茎部を欠損する。石材はチャート製である。10・11は返しが鋭く尖らず、側縁部がやや外方に向かって膨らみ、丸味を帯びる。いずれも流紋岩製である。12は、元々返しが鋭角に尖るタイプと判断されるが、両側共に欠損している。チャート製である。13・14は、側縁部が丸味を有し、全体として平面形が釣り鐘形に近い。抉りは浅く、茎も短い。13が安山岩製、14がガラス質の安山岩製である。15は、細身の有茎鏃である。先端部および、茎の端部が欠損している。安山岩製。16は、基部側縁が丸味を帯びるタイプのものである。石材は、赤み掛かった鈍い黄土色を呈し、いわゆる「黄玉」（鉄石英）と考えられる。佐渡から搬入された石材の可能性がある。

17～20は、石鏃の未製品と考えられる。石材は、安山岩のものが多い。18は、石錐の未製品の可能性もある。

21は、石錐である。錐部のみの遺存である。錐部は棒状を呈するタイプで、石材は流紋岩である。

22は、打製石斧である。上半部が欠損している。両側縁がほぼ平行し、短冊形を呈するものと想定される。石材は、安山岩である。23は、打製石斧の未製品の可能性がある。蛇紋岩製で、両側縁部からの打撃がみとめられるが、刃部付近は原礫面を呈し、加工の痕跡が認められない。

24・25は磨製石斧である。いずれも蛇紋岩製で、縄文時代の所産と判断される。24は刃部のみの遺存で、刃部には使用に伴う損傷が認められる。25は小型の磨製石斧である。両側縁が基部側に向かって先細り、表裏面が器軸の中央に向かって胴張り状を呈する。刃部は欠損して遺存しない。断面は隅丸方形を呈する。

26は砥である。縦型と横型の中間形態、すなわち斜刃を呈する。石材は、流紋岩と考えられる。

27・28は弥生時代の磨製石包丁である。このうち、27は製品の破片資料で流紋岩製、28は未製品の破片資料で安山岩製である。27は、刃部が直線状を呈し、上部には片面からの穿孔が1個所認められる。穿孔は2個一対であったものと推測される。28は、刃部が弧状を呈し、両側縁部に剥離調整痕が残る。穿孔は認められない。

29は、弥生時代の扁平片刃石斧である。小型品で、ノミ状石器に近い。安山岩製である。

30～32は、安山岩製の凹石である。このうち、30は完形品で、平面形がほぼ隅丸の正三角形状を呈する。SB25の床面より出土している。31は、裏面にも凹みが認められる。32は長さ6.6cmの小型品である。

33は安山岩製の敲石である。表面には被熱痕も認められる。34は台石である。表面は磨かれて平滑であった。

35・36は砥石である。35は板状の砥石で結晶片岩製、36は断面台形状の砥石の破片で、流紋岩製である。

37は近世以降のキセルの吸い口部分で、本体の木質部（竹の可能性が高い）が一部遺存している。

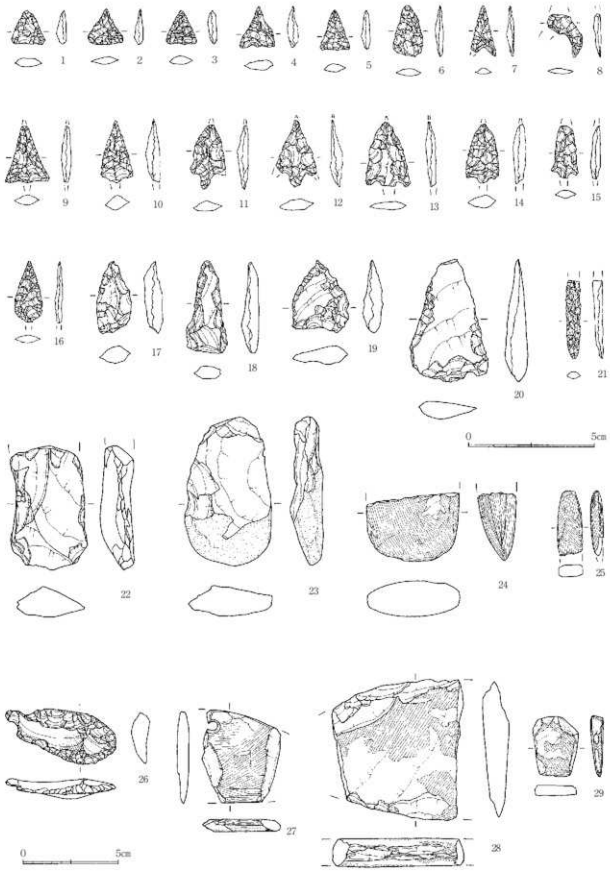


図138　石器・石製品・その他の遺物①（2：3・1：2）

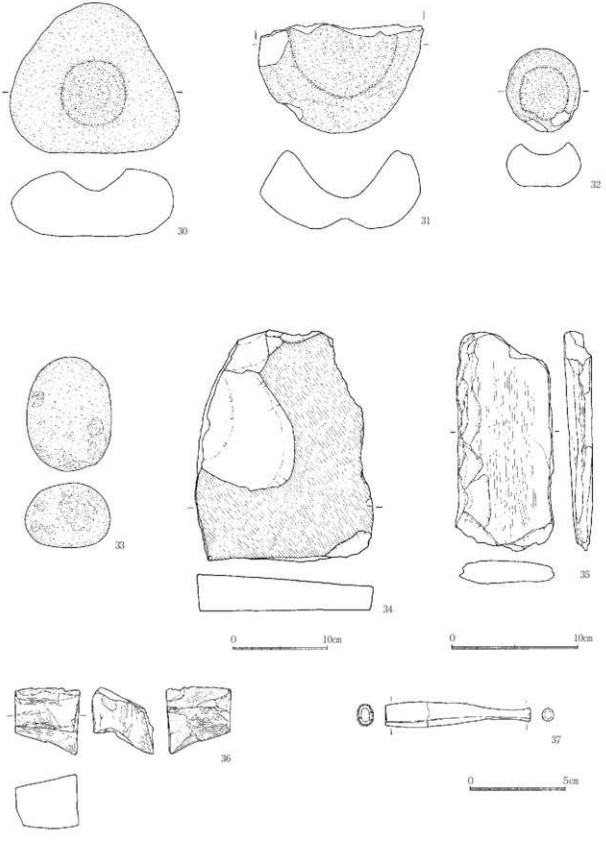


図139　石器・石製品・その他の遺物②（1：3・1：4(34)・1：2(37)）

表8　出土石器・石製品・玉類観察表

図面番号	No.	種別	材質	長さ・幅・厚さ			重さ(g)	出土遺構	備考
				長さ	幅	厚さ			
11	1	打製石鏃	流紋岩	2.6	(1.5)	0.45	(1.24)	SB3（覆土下層）	先端部欠損・基部欠損
〃	2	打製石鏃未製品	流紋岩	3.6	2.6	0.7	6.71	SB3（覆土上層～床直）	
〃	3	打製石鏃未製品	流紋岩	4.3	2.4	1.0	8.76	SB3（覆土下層）	
69	57	臼玉	滑石	(直径)0.5	—	0.28	0.11	SB25（覆土上層）	
〃	58	土製管玉	土	1.5	(直径)0.73	—	0.86	SB25（覆土上層）	
126	7	装身具（垂飾）	翡翠輝石	(2.2)	(1.1)	0.5	(1.5)	SX3（床直上）	
138	1	打製石鏃	チャート	1.4	1.3	0.4	0.62	SB10（覆土上層）	
〃	2	打製石鏃	チャート	1.4	1.4	0.35	0.47	SD4（覆土）	
〃	3	打製石鏃	チャート	1.3	1.2	0.4	0.5	SB13（覆土下層～床直）	
〃	4	打製石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.66	SB13（覆土下層）	
〃	5	打製石鏃	チャート	1.6	1.2	0.35	0.47	SB11（覆土上層～床直）	
〃	6	打製石鏃	チャート	2.0	1.2	0.3	0.72	SB4（覆土上層）	
〃	7	打製石鏃	チャート	2.0	(1.0)	0.3	(0.34)	SB13（覆土下層）	基部欠損
〃	8	打製石鏃	玉髄	(1.7)	(1.4)	(0.3)	(0.36)	SB3（覆土下層）	脚部のみ残存する(1/2)
〃	9	打製石鏃	チャート	(2.25)	1.8	0.4	(1.19)	SB28（覆土）	先端部欠損・茎部欠損
〃	10	打製石鏃	流紋岩	(2.4)	1.3	0.6	(1.17)	SB33（覆土上層～床直）	茎部欠損
〃	11	打製石鏃	流紋岩	(2.55)	(1.4)	0.45	(1.22)	SX6（覆土上層～床直）	先端部欠損・茎部欠損
〃	12	打製石鏃	チャート	(2.7)	(1.6)	0.5	(1.48)	SB35（覆土上層）	先端部欠損・脚部欠損
〃	13	打製石鏃	安山岩	(2.6)	1.8	0.4	(1.62)	SB45（覆土上層～床直）	先端部欠損・茎部欠損
〃	14	打製石鏃	ガラス質安山岩	(2.4)	1.3	0.5	(1.55)	SB3（覆土下層）	先端部欠損・茎部欠損
〃	15	打製石鏃	安山岩	(2.1)	(1.1)	0.4	(0.79)	SB17（覆土上層～床直）	先端部欠損・茎部欠損
〃	16	打製石鏃	鉄石英	(2.4)	1.1	0.3	(0.66)	SB23（覆土上層）	茎部欠損
〃	17	打製石鏃未製品	安山岩	2.9	1.4	0.75	2.9	SB42（覆土上層～床直）	
〃	18	打製石鏃未製品	安山岩	3.7	1.65	0.7	3.62	SB3（覆土上層～床直）	
〃	19	打製石鏃未製品	チャート	2.9	2.3	0.8	4.11	SB23（覆土下層～床直）	
〃	20	打製石鏃未製品	安山岩	4.9	3.1	0.9	10.95	SB12（覆土上層～床直）	
〃	21	石錐	流紋岩	(3.1)	(0.6)	(0.4)	(0.79)	SB7（覆土上層～床直）	上部（基部）欠損
〃	22	打製石斧	安山岩	(6.6)	(4.1)	(1.8)	(55.68)	SB25（覆土上層～床直）	頭部欠損
〃	23	打製石斧未製品？	蛇紋岩	7.9	4.6	1.7	81.3	SB20（覆土）	
〃	24	磨製石斧	蛇紋岩	(3.6)	(4.9)	(2.1)	(50.64)	Ⅱ区検出面	刃部に使用による損傷有（潰れ・摩耗）頭部欠損（残存部1/3）
〃	25	磨製石斧	蛇紋岩	(3.4)	1.3	0.65	(5.42)	SB45（覆土上層～床直）	刃部欠損
〃	26	石匙	流紋岩	6.1	2.7	1.1	12.95	SB14（覆土上層～床直）	
〃	27	磨製石剋丁	流紋岩	(4.2)	(4.9)	(0.65)	(18.46)	SB7（覆土上層～床直）	残存部1/4
〃	28	磨製石剋丁未製品	安山岩	(6.9)	(7.5)	(1.5)	(114.95)	Ⅱ区検出面（覆土）	残存部1/3
〃	29	扁平片刃石斧	安山岩	3.2	2.4	0.7	6.94	Ⅲ区検出面	
139	30	凹石	安山岩	11.9	13.5	6.1	999.39	SB25（床直上）	裏面に凹有
〃	31	凹石	安山岩	(8.7)	(13.1)	(6.5)	(674.03)	SB5（覆土上層）	裏面に凹有・残存部1/2
〃	32	凹石	安山岩	6.6	5.8	4.1	155.01	SB12・13（覆土下層）	
〃	33	敲石	安山岩	9.0	6.7	5.1	443.36	1区検出面（覆土）	被熱痕有
〃	34	台石	安山岩	24.5	18.8	4.1	2,795.42	SB28（床直上）	付着物有
〃	35	砥石	結晶片岩	17.3	7.8	2.2	397.48	SB1（覆土下層）	付着物有
〃	36	砥石	流紋岩	4.5	3.4	2.3	34.57	SB17（覆土上層～床直）	

※長さ・幅・厚さ・重さ：残存する部分の値で、欠損品は（　）で表す。

表9　SB3出土流紋岩製石核・剥片・砕片出土状況・接合関係表

出土位置	種別	材質	重さ(g)	出土層位	備考
北西側壁溝内（壁溝1）	石核1点・剥片47点	流紋岩	334.61	覆土下層	この内3点の剥片が覆土出土の石核と接合
	砕片29点	流紋岩	10.87	覆土下層	
南西側壁溝内（壁溝3）	石核1点・剥片68点	流紋岩	354.64	覆土下層	
	砕片78点	流紋岩	59.24	覆土下層	
住居内覆土上層～床直	石核2点・剥片32点	流紋岩	616.82	覆土上層～床直	この内1点の石核が北西側壁溝（壁溝1）内出土の剥片3点と接合
	砕片3点	流紋岩	3.83	覆土上層～床直	

第Ⅳ章　結　　語

1．浅川扇状地遺跡群における遺跡立地の変遷と吉田古屋敷遺跡の位置付け

今回の調査においては、遺構こそ確認されなかったものの、縄文時代後期の遺物類をはじめとして、弥生時代中期の竪穴式住居群、古墳時代中期後葉～古墳時代後期末葉（７世紀代）にかけての竪穴式住居群、そして奈良～平安時代にかけての竪穴式住居群と、長期に渡る人々の生活痕跡を確認することができた。中でも、弥生時代中期の住居址群と古墳時代後期を中心とする住居址群はその密度が高く、吉田古屋敷遺跡周辺に当時の主要な集落の一つが形成されていた可能性を指摘することができる。

図140は、吉田古屋敷遺跡の位置する浅川扇状地遺跡群の時期別遺跡立地変遷図である。これをみると明らかなように、縄文時代においては浅川や駒沢川といった主要河川に沿うような形で集落が点在していた様相が窺える。今回の調査では縄文時代の遺構は全く確認されなかったが、縄文時代後期に属する遺物は比較的多く出土しており、同じ吉田古屋敷遺跡の隣接する発掘調査地点では、縄文時代中期に遡る住居址や、後期の住居址といった遺構が複数確認されている。したがって、吉田古屋敷遺跡周辺地域は、浅川にほど近い緩傾斜地上に形成された縄文時代中期～後期の集落の一つであったものと想定することができる。

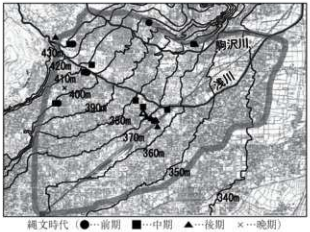
弥生時代においては、今のところ前期の遺跡は全く確認されていないが、中期（栗林式期）に至って、標高360～370m付近と、400～410m付近にまとまって集落が営まれる。中でも、今回の調査地点周辺は縄文時代に引き続いて遺構分布の密度が高く、弥生時代中期においても主要な集落の一つが形成されていたことは想像に難くない。ただし、今回の調査区では西側に向かうに従い遺構の数が激減し、やがて住居址が確認されなくなることから、今回の調査地点が弥生時代中期における集落の西端部に相当していた可能性も指摘される。なお、今回の調査地点では全くと言って良いほど確認されなかったが、弥生時代後期後葉・箱清水式期の遺跡も周辺に複数認められており、栗林式期とは対照的に扇状地の西側に遺跡の分布が偏る傾向が認められる点も注目される。

古墳時代になると、遺跡はさらに数を増し、古墳時代後期に至っては確認された住居址の数が爆発的に増大する。古墳時代前期の遺跡は、概ね標高360～380m付近と、400～410m付近に広く分布しており、扇端部の平林東沖遺跡でも遺構が確認されるようになる。古墳時代中期には、前期に比べ遺跡の数が幾分減少すると同時に、扇状地の北側に立地が偏る傾向も認められるが、標高的には前期と比べてもさほど大きな違いは認められない。古墳時代後期には、再び扇状地の南西側にも広く遺跡が確認されるようになるが、やはりその多くは標高360～380m付近と、400～410m付近にまとまっており、列状に分布する傾向が認められる。古墳時代終末期（７世紀代）に至っては、その数は減少するものの、同様の標高付近に列状に遺跡が分布している。

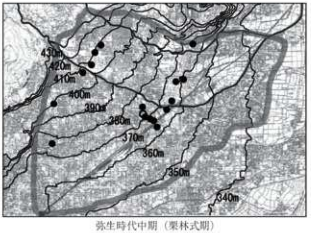
奈良・平安時代においては、その傾向が一層顕著となり、南西～北東、あるいは北方向にかけて、大きく二列の遺跡分布ラインが認められる。あたかも、当時の主要道路の位置と方向を表しているかのようにも見える。

これらの遺跡の分布は、あくまで本調査が行われた遺跡を元にしていることから注意する必要があるが、標高360～380m付近と、400～410m付近に遺跡が集中する傾向は、いずれの時代においても概ね共通しており、遺跡の立地を考える上でも、また当時の集落の拡がり等を考える上でも、一つの参考とはなり得よう。

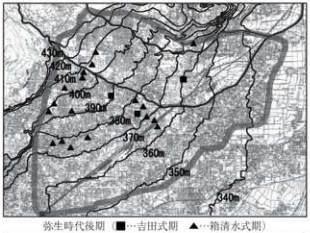
以上、今回の調査によって、吉田古屋敷遺跡周辺地域が、途中断続期間が認められるにせよ、縄文時代から現代まで続く人々の居住域・生活域であったことが再確認された。吉田地域周辺は、浅川扇状地遺跡群全体からみても遺跡の存続期間が長く、人々の主要な生活地域であったことは間違いない。扇状地ならではの水はけの良さや豊富な地下水、日当たりの良さや地形等、様々な理由が想起される。今後、周辺地域のみではなく、長野盆地全体や長野県域全体といった、巨視的な眼で吉田古屋敷遺跡の特徴を明らかにしていくことも重要であろう。



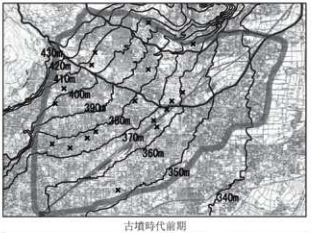
縄文時代（●…前期　■…中期　▲…後期　×…晩期）



弥生時代中期（栗林式期）

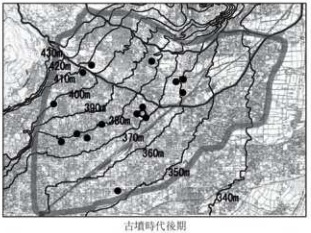


弥生時代後期（■…吉田式期　▲…箱清水式期）



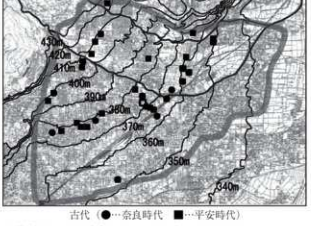
古墳時代前期

古墳時代中期



古墳時代後期

古墳時代終末期（7世紀代）



古代（●…奈良時代　■…平安時代）

図140　時期別遺跡立地変遷図（白ヌキ記号がA－2地点・1：80,000）

2．ＳＢ25住居内出土土器配列状態について

Ⅱ区ＳＢ25の住居内からは、カマド内およびカマド西脇・住居北西隅部・同北東隅部・同南東隅部より、多量の土器が良好な遺存状態を保ったまま、特徴的な配列状態を有して出土した。また、住居北西隅部からは、土器群に伴って鉄製の刀子や滑石製の臼玉、土製の管玉等も出土している。これらの遺物は一括性が高く、周辺地域の古墳時代中期末～後期初頭の土器群を代表する重要な資料といえる。

住居址や土坑といった遺構内から多数の土器が出土する例は、周辺地域でも多く認められるが、その出土状態に規則性や特異性が認められる例はそれほど多くはない。ここでは、それらの類例を提示し、比較することによって、ＳＢ25内出土の土器群の性格や意味合い等、今後さらに検討を深めるための叩き台としたい。

a．住居址内出土の土器配列例

今回の調査で確認されたＳＢ25のように、住居址内から多数の土器が特徴的な状態を有して出土した例は、吉田古屋敷遺跡の位置する浅川扇状地遺跡群内の幾つかの遺跡で報告されている。

①本村東沖遺跡57号住居址（長野市教育委員会1993）

一つ目の例としては、吉田古屋敷遺跡から直線で2㎞程西へ行った位置に所在する、本村東沖遺跡57号住居址が挙げられる。本村東沖遺跡では、弥生時代後期および古墳時代中期～後期を中心として、合計100軒以上もの竪穴式住居が確認されている。

この内、5.1×4.7mの隅丸方形を呈する57号住居址では、カマドの東側、住居の北西奥壁際に沿う形でほぼ同じ形態の高坏が4点、逆位に伏せられた状態で出土した。高坏の手前側（南側）には、土師器の坏類や鉢類・須恵器の坏身といった小型の土器類が多数出土しており、中には高坏と同様に伏せられた状態のものもあった。土器列の最東端部付近には、大型の甕が潰れた状態で出土しており、土器列の西側、カマドの東袖脇には小型の甕や鉢が3点、三角形を成すように並べられていた。また、この3点の土器の北東側からは、かなり浮いた位置ではあるが、坏が2点、重ねられた状態で出土している。カマドの内部には小型の甕が2点、東西に並べて据えられており、この内の西側の甕の上にはさらに別の甕が1点重ねられていた。カマドの西袖脇からは、大型の甕が1点出土している。

これらの土器群と、今回の調査で出土したＳＢ25の土器群とを比較した場合、幾つかの相違点と共通点が挙げられる。まず相違点としては、住居内における出土位置が異なっている。ＳＢ25では住居の3隅にまとまって土器類が並べられていたが、本村東沖例では住居の隅部ではなく、住居の奥壁（北西壁際）側に並べられていた。ただし、住居の壁際に近い位置から出土しているという点では、共通性も認められる。

続いて、本村東沖例では、4点の高坏をはじめ複数の土器が伏せられた状態であったのに対し、吉田古屋敷ＳＢ25例で意図的に伏せられた状態の土器は、カマド支脚に用いられた甕の底部（図63－48）と、北西隅部の土器群において最下段に置かれた甕の上半部（図64－45）の2点のみであった。

さらに、器種の違いを挙げることもできる。本村東沖例では高坏の出土が目立つのに対し、吉田古屋敷ＳＢ25例では、高坏は北西隅部・北東隅部では1点も認められず、カマドの西袖脇と住居の南東隅付近からそれぞれ1点ずつの計2点のみが出土している。南東隅部ではＳＤ9による破壊のため、本来はもっと多くの高坏が置かれていた可能性もあるが、南東隅部にかろうじて遺存していた高坏は正位の状態で出土しており、カマドの西脇の高坏も逆位に伏せられていたとは断定し難い点で、やはり様相が異なっているといえる。

この他、本村東沖例では土器群の中に須恵器の坏身と坏蓋がそれぞれ1点ずつ含まれていたのに対し、吉田古屋敷ＳＢ25例では須恵器は1点も出土していない。また、吉田古屋敷遺跡ＳＢ25例では、北西土器集中区から鉄

製の刀子や滑石製の臼玉、土製の管玉といった祭祀的要素の強い遺物も出土しているが、本村東沖57号住居址例ではそのような遺物は１点も出土していない。

共通点としては、土器の遺存状態が比較的良い、という点が挙げられる。吉田古屋敷ＳＢ25例においては、土器の配列後に意図的に打ち割られたとみられる確実な例は確認されず、残り具合は概して良好であった。本村東沖例においても、４点の高坏は坏部と脚部がそのまま接合した状態で遺存しており、カマドの東脇やカマド内部の甕類も遺存状態は良好であった。ただし、割れた状態で出土した土器については、配列後に何らかの破砕行為が行われた可能性が全くないわけではないため、今後破砕痕等をさらに詳しく検討する必要がある。

続いて、同様の器種や大きさの土器が、ある程度まとめられた状態で出土している点が挙げられる。具体的には、本村東沖例では４点の高坏が奥壁に沿うような形で近接して並べられており、その手前に小型の坏や鉢類がまとめて並べられている。吉田古屋敷ＳＢ25例においても、住居の北西隅部、２列の土器群の北側に坏類が多く並べられ、南側に小型の甕と甑、さらにその南側にほぼ同じ大きさの鉢が３点、まとめて置かれている。住居の北西隅部に小型の器種が多く認められるのに対し、住居の北東隅部に大型の壺２点が近接して置かれている点も注目される。両遺跡例において、土器群の南、あるいは西側延長方向上に３点の中型の土器が三角形状に並べられている点も、偶然の可能性もあるものの、示唆的なものを感じさせる。

この他、カマド内部に甕が複数据えられている点も重要である。本村東沖例では、甕が２点東西に並べて据えられており、いわゆる「二口」のカマドであったことが分かる。吉田古屋敷ＳＢ25例では、カマド内から甕が４点出土しており、その出土状態からやはり二口以上のカマドであった可能性が指摘された。このように、カマドの調理施設が複数認められる、という点でも共通性が指摘できる。なお、カマドについては、石組の焚き口部の構造もよく似ており、数の多寡の違いこそあれカマドの袖脇に土器が置かれている点でも共通性が認められる。

以上のように、本村東沖遺跡57号住居址と、吉田古屋敷遺跡ＳＢ25の住居内出土土器群においては、幾つかの相違点と共通点が認められることが分かる。細部においては多くの違いが認められるものの、巨視的にみると住居内に意図的に配列された土器群という点で共通性を有しているといえ、両者の性格等を考える上で、重要な出土例といえる。なお、本村東沖57号住居址出土の土器群は、その形態や供伴した須恵器の様相等から５世紀末～６世紀初頭に位置付けられており、吉田古屋敷遺跡ＳＢ25の所属時期とほぼ同時期である点も注目される。

②柳田遺跡３区５号住居址（長野市教育委員会1992）

二つ目の例としては、同じ浅川扇状地遺跡群の柳田遺跡３区５号住居址が挙げられる。柳田遺跡は、吉田古屋敷遺跡から北東へ1.1km程離れた場所に位置しており、弥生時代中期から平安時代に至る遺構が確認されている。

この内、３区５号住居址は一辺4.2mの隅丸方形を呈する住居址で、多量の炭化材と土器群が出土している。これらの土器群は、炭化材の下（下層）から出土したものと、上（上層）から出土したものの大きく２群に分けられる。この内、下層から出土した土器群は、住居址南隅のほぼ床面直上より一括して出土している。その出土状況から、「あたかも棚の上に置かれていた土器群が一時に落下したかのような状況」であったと報告されている。

この住居址南隅における土器群も遺存状況が良好で、小型高坏・小型器台・短頸壺・小型丸底坩・鉢等、計10点程が集中して出土している。器種別における配置については、南東側端部に大型の甕が位置し、その北西側に斜め下方を向いて倒れた小型器台および小型高坏が並ぶ。そして、小型高坏の坏部と重なる形で、下方より小型丸底坩が出土している。さらに北西側には、短頸壺が２点隣接して出土しており、この内の１点は逆位の状態で出土している。東側の短頸壺の北西脇には、小型器台の脚部が短頸壺を覆うように、倒れた状態で出土している。逆位となった短頸壺の北西側、やや離れた位置にもう１点の小型高坏が正位の状態で出土し、そのさらに北西側、

30cm程離れて小型器台が1点、倒れた状態で出土している。土器群の最南東端部に大型の器種が位置し、その北西側、壁に沿って小型の器種が多数並んでいる点は特筆される。

なお、これらの土器の多くは横倒し、あるいは逆位の状態で出土しており、元々床面に正位の状態で置かれていたものが単に倒れただけとは考えにくい。当初から上記のような状態で床に置かれたか、あるいは報告者の指摘するように、棚状の施設から落下した可能性も想定される。いずれにせよ、これらの土器が良好な遺存状態のまま、一括して出土している点は注目される。また、出土位置も上層の土器群のように住居内の広範囲に渡ってではなく、住居の壁際、かつ隅部からまとまって出土している点にも、特別な意味合いが感じられる。

これらの土器の様相から、柳田遺跡3区5号住居址は古墳時代前期、布留2式期に比定されている。吉田古屋敷遺跡SB25とは時期的に大きな隔たりがあるが、住居の隅部、壁際という土器群の出土位置と、小型器種が大きく破壊することなく良好な状態で、まとまって出土しているという点には、共通する要素が認められる。

③本堀遺跡2号住居址（長野市教育委員会1992）

三つ目の例として、同じ浅川扇状地遺跡群内の本堀遺跡2号住居址が挙げられる。本堀遺跡は前述の柳田遺跡と隣接する遺跡で、弥生時代中期から中世にかけての遺構が確認されている。

この内、2号住居址は3分の1が調査区外であるが、1辺が5.6m程の隅丸長方形を呈するものと想定されている。本堀遺跡2号住居址においては、住居の「北壁と西壁際の覆土中層より、あたかも配列されたような状況で小型丸底壺を中心とする土器群が出土している」と報告されている。なかでも、西壁際からの土器の出土が顕著である。最南端部に高坏の柱状部が1点、坏部側を西壁側に向けて倒れた状態で出土し、その北側に向かって小型丸底壺→甕→小型丸底壺の順で配列し、そのさらに北側、1m程の位置から小型丸底壺が数点並んでいる。

器種別による意図的な並べ分けが存在するかは定かではないが、本村東沖例のように、意図的に土器を伏せて置かれたような様相は認められない。元々正位か、あるいは横倒しの状態で置かれたものと想定される。

これらの土器群の様相から、本堀遺跡2号住居址は古墳時代中期でもカマド出現以前の住居址として位置付けられているが、小型丸底壺の形態や屈折脚高坏の様相から、概ね古墳時代中期前葉～中葉頃の所産と判断される。

本堀遺跡2号住居址例が他の例と大きく異なるのは、出土した層位が床面直上ではなく、覆土の中層から出土しているという点である。このことから、報告者は「住居址廃絶後の自然埋没のある過程において、これらの土器を供献するような何らかの祭祀行為」の存在を推測している。

覆土中層からの出土という大きな違いがあるものの、これらの土器群も壁際に沿って並べられたような状態で出土しているという点では、吉田古屋敷遺跡SB25例や、他の例とも共通性が認められるといえよう。

b．住居址以外の遺構出土の土器配列例

住居址以外の遺構から土器が配列された状態で出土する例も、吉田古屋敷遺跡の周辺地域において散見される。ただし、住居内出土の土器群と、住居以外の遺構内出土の土器群とでは、その性格や意味合いが幾分異なっている可能性もあるため、ここでは概観するに留める。

①水内坐一元神社遺跡（長野市教育委員会2006）

吉田古屋敷遺跡から東へ3km程離れた小島・柳原遺跡群水内坐一元神社遺跡は、弥生時代後期を中心とする集落遺跡で、弥生時代中期から奈良・平安時代に渡る遺構・遺物が確認されている。

この内、1号性格不明遺構として、古墳時代中期後半代の土器集中が確認されている。これらの土器群においては、南北約1.4m・東西約1.1mの範囲に、土師器の坏・高坏・甕などが規則的に配置されていた。ここで特筆

されるのは、土器群の列が北西～南東方向を意識して形成される点と、坏を逆位に伏せた状態で、二重に重ね置いている点である。また、南西隅に大型の甕が配置され、その手前（北東側）に高坏類、さらにその手前側に坏類というように、器高を意識した配列になっている点も特筆される。

吉田古屋敷遺跡ＳＢ25例とは、正位であるか逆位であるかという違いこそあるものの、坏類を２重に重ねている点や、北西隅部では北西～南東方向に列が形成されている点、さらに北西隅部では配列の奥側（壁側）に器高の高い甕や鉢が置かれ、その手前に器高の低い鉢や坏類が置かれるという、器高が意識されている点でも共通性が認められる。時期的にも吉田古屋敷ＳＢ25と比較的近似するため、重要な出土例といえる。

②徳間本堂原遺跡（長野市教育委員会1995）

吉田古屋敷遺跡から北東へ２km程離れた浅川扇状地遺跡群徳間本堂原遺跡では、縄文時代～平安時代にかけての遺物・遺構が出土している。古墳時代においては住居址３軒の他、全径が約16.4mの円墳１基、土坑墓が１基発見されているが、この内の第１号古墳の周溝内底部付近より、２つの土器集中区が確認されている。

２つの土器集中区は、いずれも坏のみから構成されている。この内、北側の第一土器集中区では、坏が７点、周溝の底部付近に並べ置かれていた。７点の内、南側の３点と西側の１点が逆位の状態で出土しており、残る３点は正位の状態で出土している。

南側の第２土器集中区においては、坏が５点まとまって出土している。この内、３点の坏は逆位の状態で、入れ子状に重ねられて出土しており、残る２点も逆位に伏せられた状態で出土している。

これらの土器群には若干の時間差が存在し、第２土器集中区の方が第１土器集中区に対して後出する可能性が高いものとみられる。同時に、この時期差が、複数埋葬に伴うそれぞれの葬送祭祀の存在を示す可能性も指摘されている。時期的には、共に古墳時代中期後半に位置付けられており、土器を積み重ねるという点で吉田古屋敷遺跡ＳＢ25例と共通性が認められる。同時に、器種の面においてそれぞれ坏が主体となっている点も注目される。

③高畑古墳群１号墳・３号墳・４号墳・29号墳（長野市教育委員会2007）

吉田古屋敷から南西へ約15km離れた篠ノ井遺跡群は、千曲川の自然堤防上に展開する弥生時代後期～中世までの、大規模な複合遺跡である。この内、高畑古墳群は古墳時代前期末～中期後半にかけての円墳を主体とする古墳群で、長野盆地の沖積地において確認された古墳時代中期を中心とする古墳群として特筆される。

これらの古墳の多くは、墳丘のマウンド部分が削平されてほとんど残存していなかったが、周溝が明瞭に確認されている。この内、中期後半代に築造されたと考えられる１号墳・３号墳・４号墳・29号墳では、周溝底面、あるいは周溝底面の地山の上に盛土を施した後、多量の土器が設置・供献されていた。これらの土器の配置方法は古墳によって様々で、共通する配列意識は認められないが、いずれも設置後に意図的に破砕された可能性が高い点で共通している。特筆されるのは、①３号墳において周溝の周回方向に合わせて土師器の高坏が２列で逆位に設置され、その高坏の内部からも、同様に逆位に伏せた坏が入れ子状をなして出土した点②４号墳と29号墳では土器集中区内で土器が幾つかのまとまり（群）を有して配置されており、群単位で器種構成・配列・破砕が異なっている点③29号墳では群単位によって器高と正面観が意識されている可能性が高い点④いずれの古墳においても高坏や坏類といった小型の供献土器類が主体を成すと同時に、１号墳を除く３基の古墳において大型の壺が土器群の端部付近に１点置かれている点⑤４号墳では土器群に伴って周溝底に朱が分布していた点等である。

正位か逆位かという違いがあるものの、土器を入れ子状に積み重ねる点や、正面観が意識されている可能性が高いという点では、吉田古屋敷遺跡ＳＢ25例とも共通性が認められ、興味深い。

以上、吉田古屋敷遺跡の周辺地域にみられる特殊な土器出土状態の例について概観してきたが、住居内・住居以外を問わず、様々な特性と共通性・非共通性等が明らかとなってきた。

ＳＢ25例も含め、これらの出土例に認められた共通性・非共通性としては、

①住居の中央付近では土器配列が認められず、住居の壁際付近に配列される場合が多い

②配列される土器群は、坏類や高坏類・小型壺類といった、いわゆる小型の供献土器が主体となる

③土器の配列の際に、積み重ねる（入れ子にする）例と、そうでない例がある

④土器を配置する際に、正位の状態で置く場合と、意図的に逆位に伏せて置く場合がある

⑤土器を配列する際、器種ごとにまとまり（群）をもたせて配列される場合がある

⑥土器を配列する際、１列に配置される場合と、２列以上に配置される場合がある

⑦土器の器高と正面観が意識されて配列される例も認められる

⑧祭祀色の強い遺物（玉類やミニチュア土器類・金属製品や朱等）を伴う場合と、そうでない場合がある

等が挙げられる。

当然、時期差や遺構の性格の違い等も考慮に入れねばならないが、このような土器配列状態の類例を概観する限りでは、これらの土器群は何らかの祭祀に伴って用いられた供献土器である可能性が高いといえる。吉田古屋敷遺跡ＳＢ25例についても、祭祀的な意味合いの強い玉類や刀子・ミニチュア土器が土器群に伴って出土している点も含め、積み重ねられて列状をなす特徴的な出土状態や、住居の隅部にまとめて土器を配列している点等は、他の供献土器群の例と通じるものが認められる。具体的に、住居の内部においてどのような場面で祭祀が行われたのか、また何のために祭祀が行われたのか等については、今後さらに検討する必要があるが、一つの可能性としては、住居廃絶に伴って住居内で祭祀が行われた例とみることも可能であろう。なお、住居内に土器が配列された例が、現段階で浅川扇状地遺跡群内の遺跡に複数みられる点も、興味深い事実といえる。

〈〈主要参考文献〉〉

戸沢充則　1983「曽根遺跡」『長野県史考古資料編　全１巻(3)　主要遺跡（中・南信)』　pp. 438～444

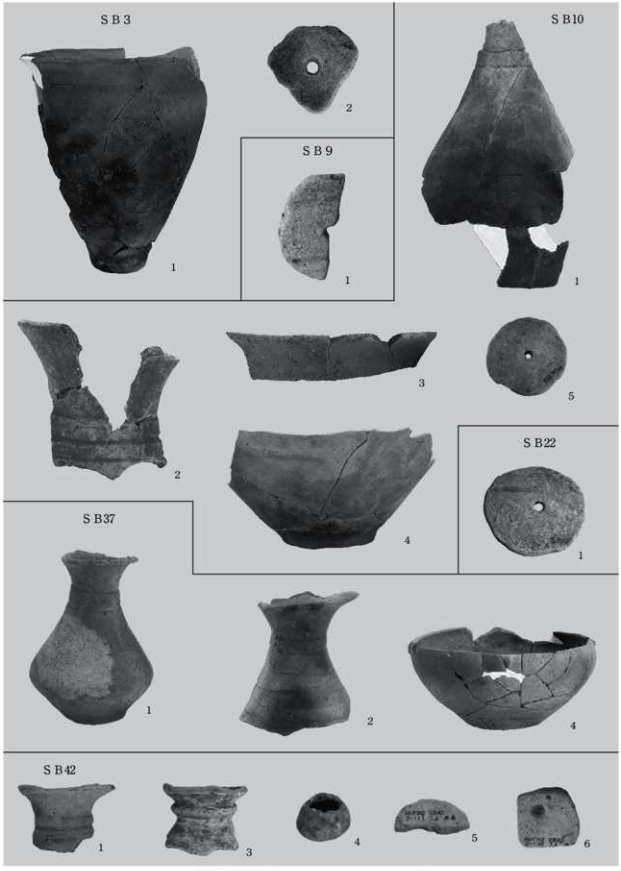
長野市教育委員会　1980『三輪遺跡』　1988『宮崎遺跡』　1992『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』　1992『小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅱ』　1993『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』　1994『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』　1995『浅川扇状地遺跡群　徳間本堂原遺跡』　1997『浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡』　2005『浅川扇状地遺跡群　桐原宮西遺跡・権現堂遺跡(2)・吉田古屋敷遺跡(2)・返目遺跡』　2006『浅川扇状地遺跡群　吉田町東遺跡(2)』　2006『小島・柳原遺跡群　水内坐一元神社遺跡(4)』　2007『浅川扇状地遺跡群　平林東沖遺跡』　2007『篠ノ井遺跡群(6)』　2007『浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡(4)　田牧居畑遺跡(2)』

長野県埋蔵文化財センター　1994『県道中野豊野線バイパス　志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書－長野県中野市内－栗林遺跡』　1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４－長野市内その２－松原遺跡』　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書８－長野市内その６－村東山手遺跡』　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12－長野市内その10－榎田遺跡』　2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28－更埴市内その７－更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡)』

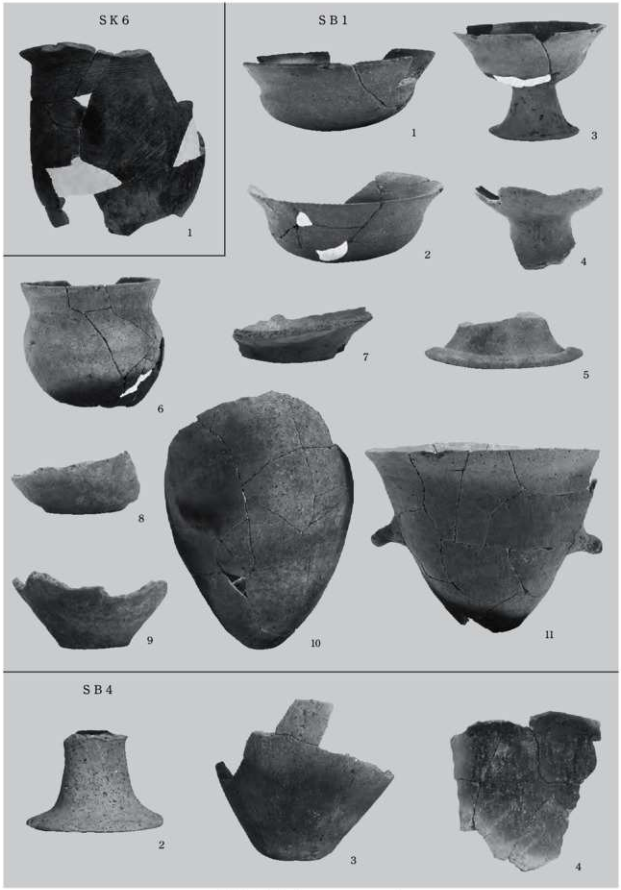
小諸市教育委員会　1994『石神遺跡群　石神』

牟礼村教育委員会　1980『明専寺・茶臼山遺跡』

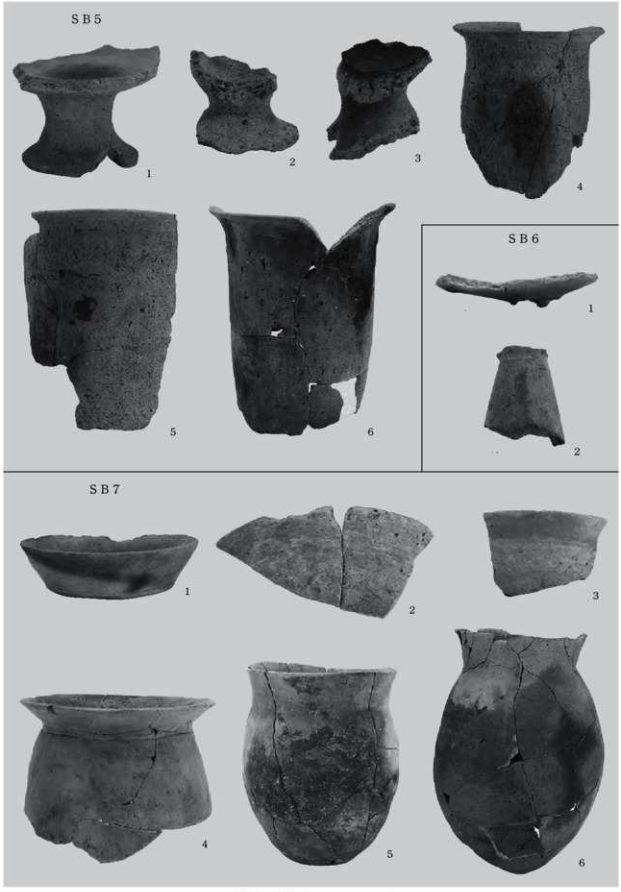
主要遺物写真図版（縮尺不同）



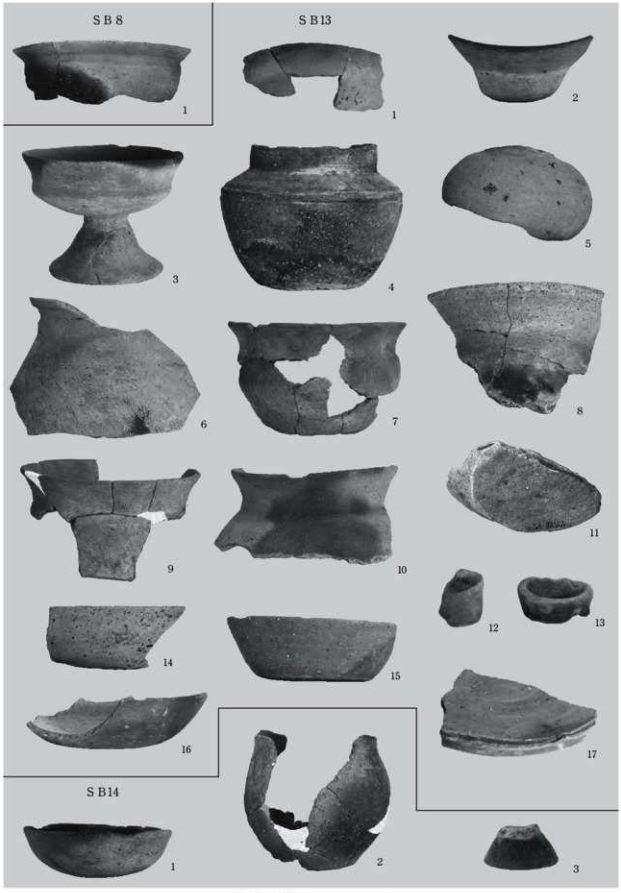
遺構出土遺物（SB3・9・10・22・37・42）



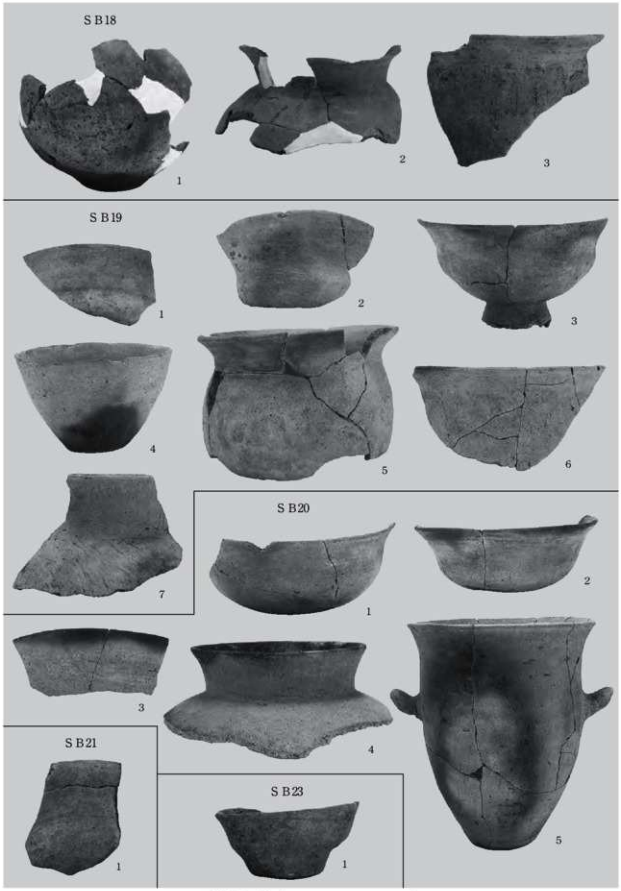
遺構出土遺物（SK6・SB1・4）



遺構出土遺物（SB5・6・7）



遺構出土遺物（ＳＢ８・13・14）

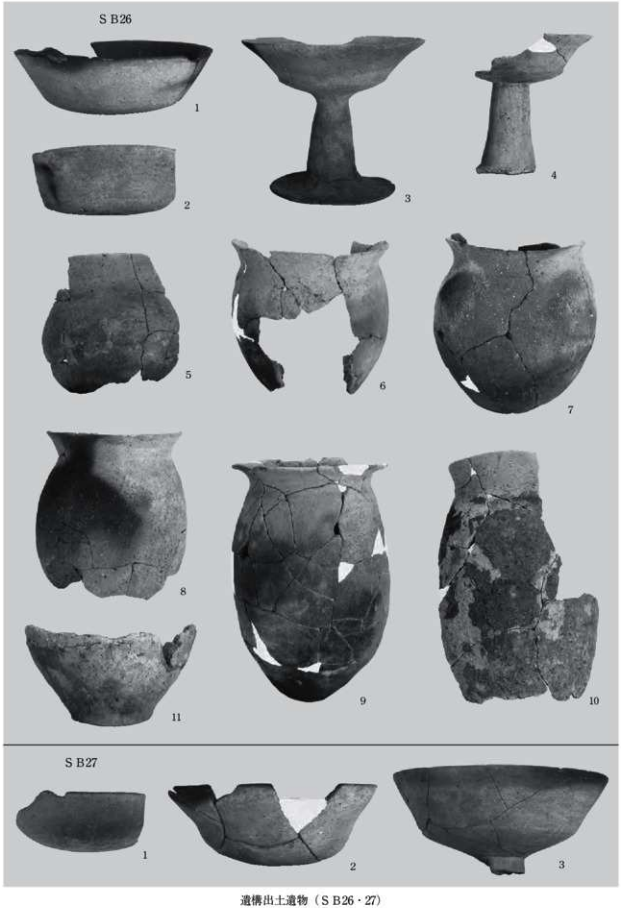


遺構出土遺物（SB18・19・20・21・23）

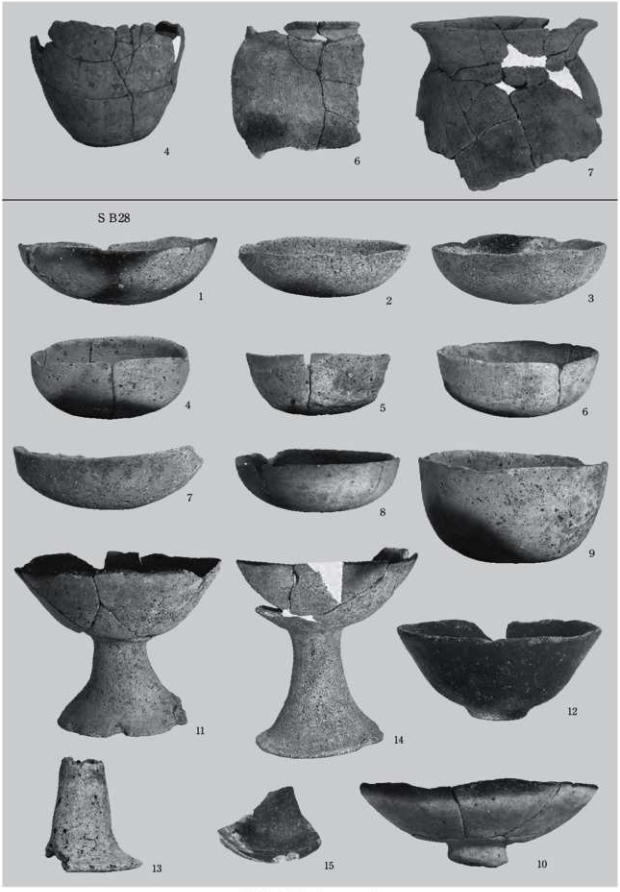
遺構出土遺物（SB25）

遺構出土遺物（ＳＢ25）

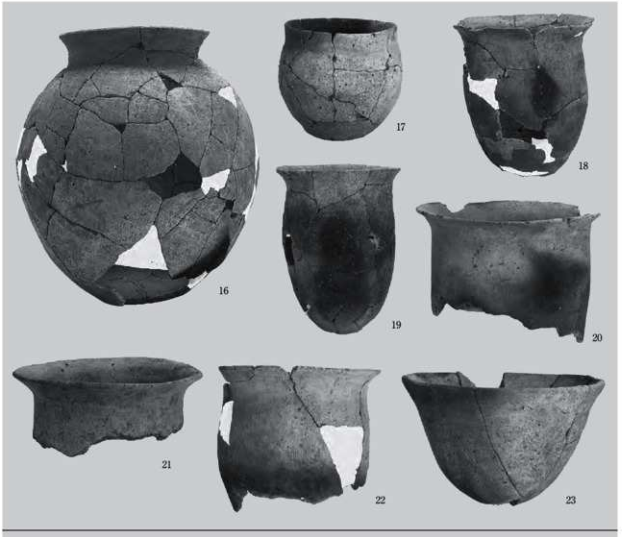
遺構出土遺物（ＳＢ25）

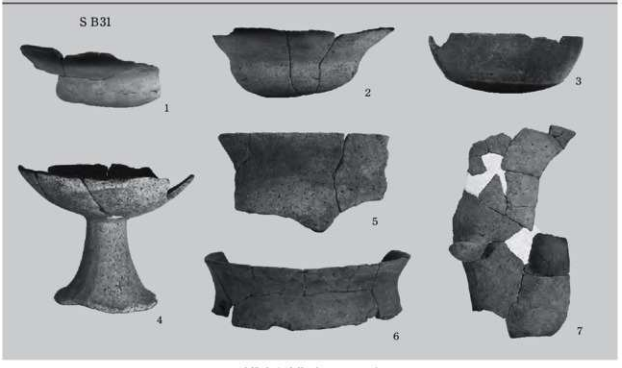


遺構出土遺物（S B26・27）

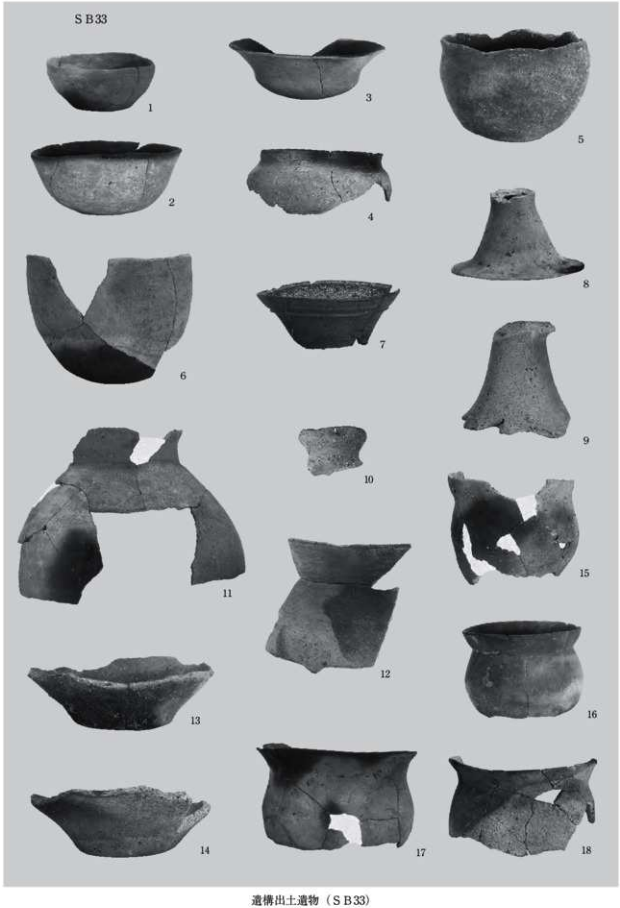


遺構出土遺物（S B27・28）

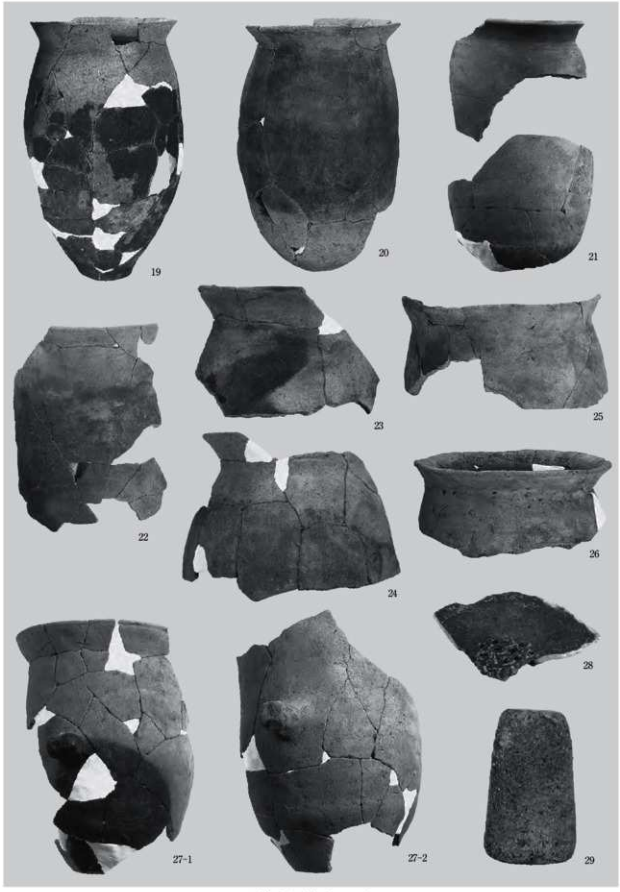




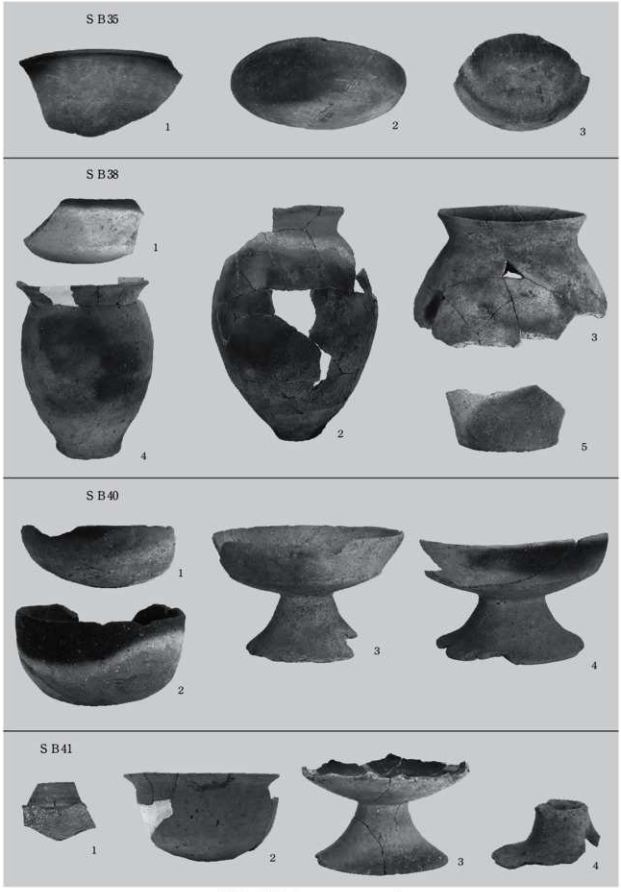
遺構出土遺物（S B28・31）



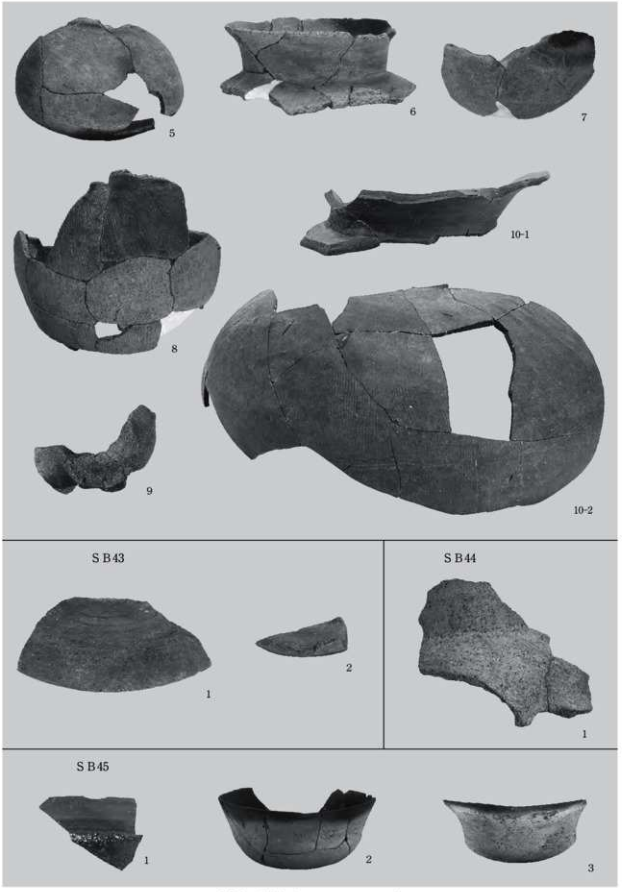
遺構出土遺物（SB33）



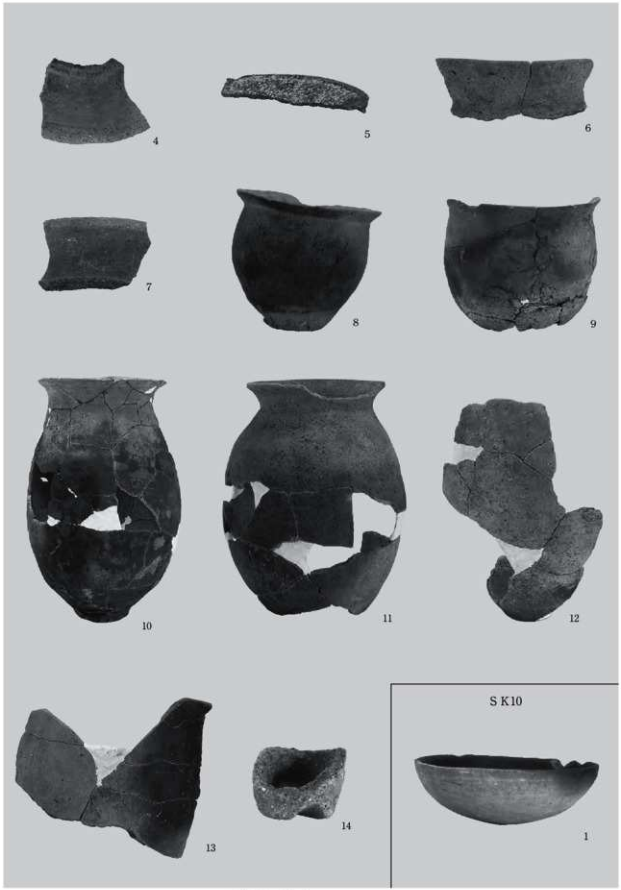
遺構出土遺物（ＳＢ33）



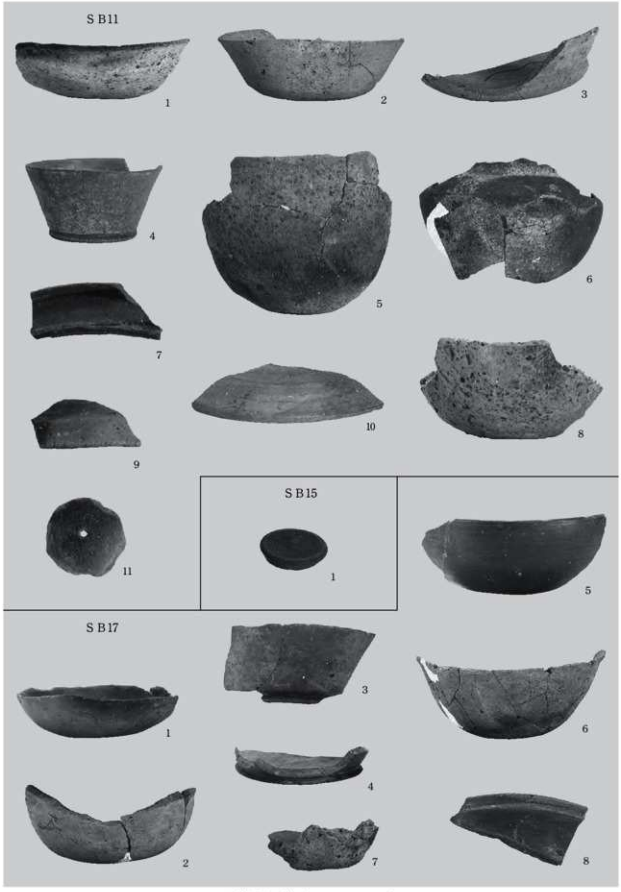
遺構出土遺物（SB35・38・40・41）



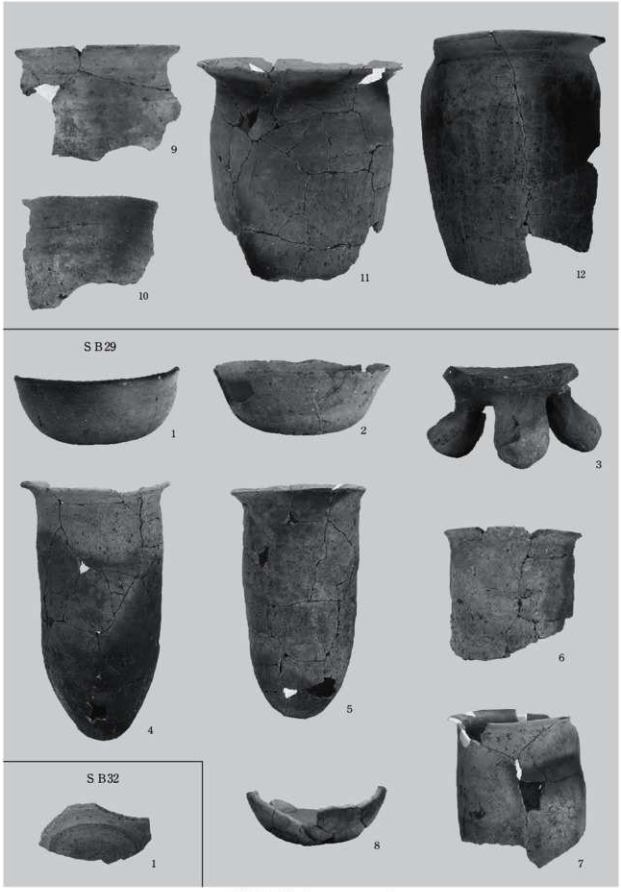
遺構出土遺物（SB41・43・44・45）



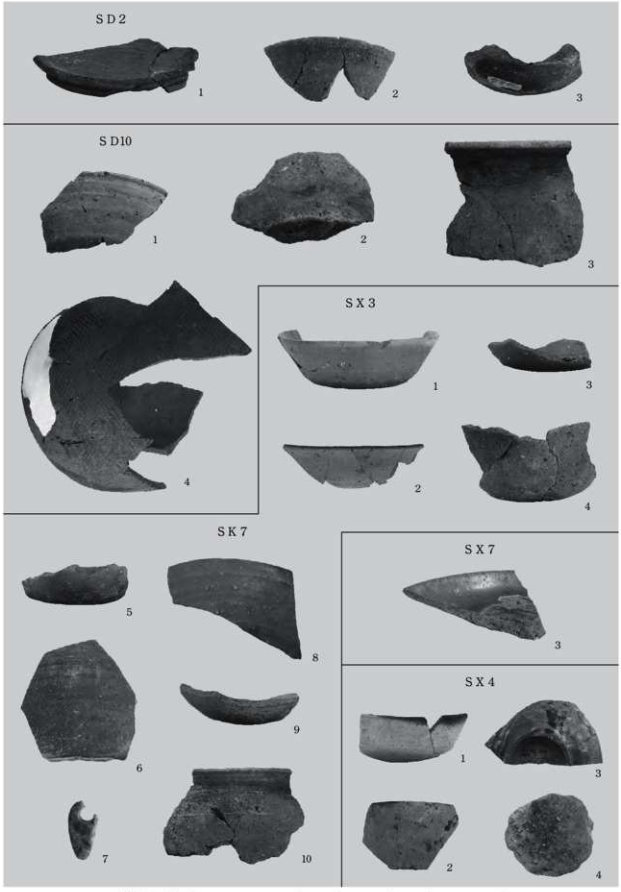
遺構出土遺物（SB45・SK10）



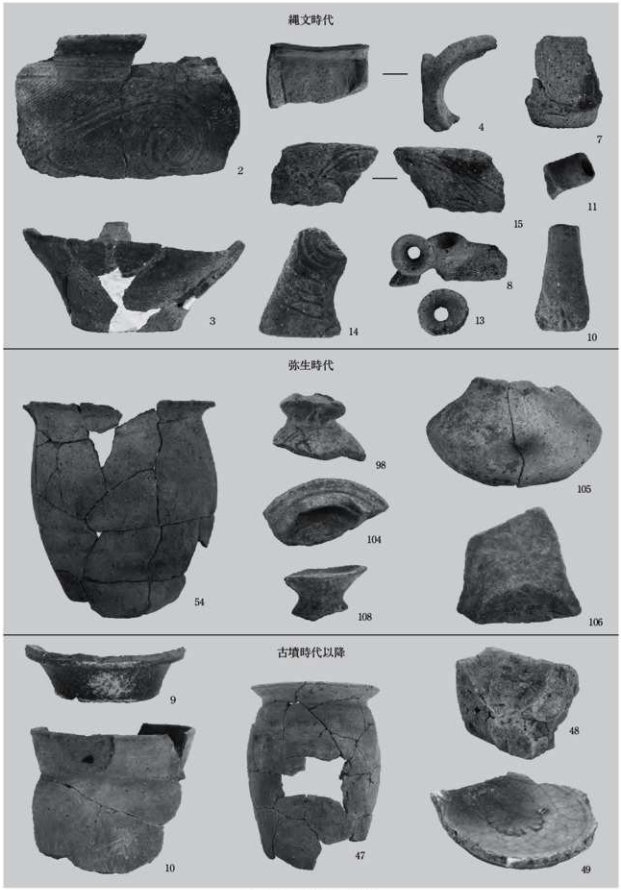
遺構出土遺物（S B11・15・17）



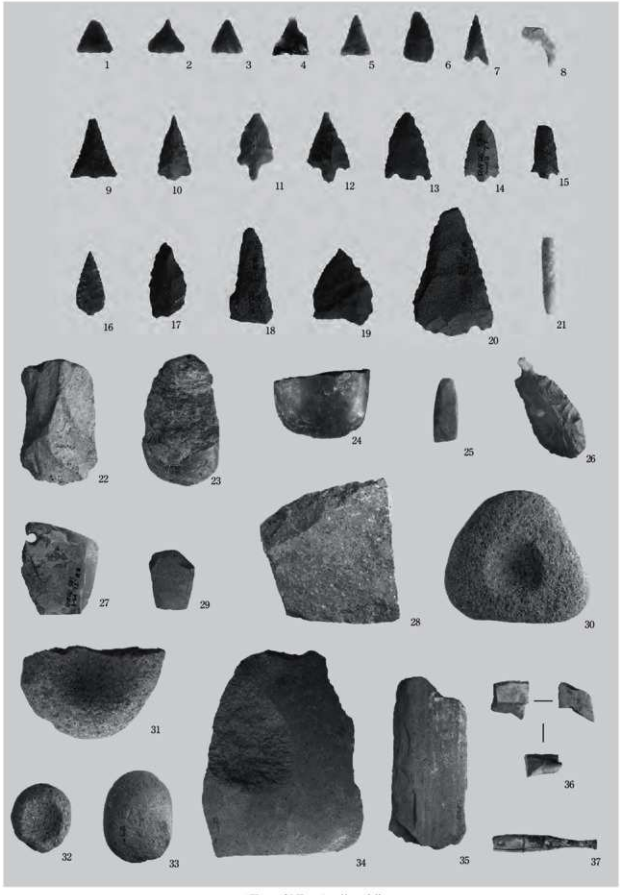
遺構出土遺物（S B17・29・32）



遺構出土遺物（ＳＤ２・10・ＳＸ３（１～７）・ＳＫ７（８～10）・ＳＸ７・４）



覆土混入・遺構外出土遺物



石器・石製品・その他の遺物

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　よしだふるやしきいせき
書名	浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡(5)
副書名	北長野駅前Ａ－２地区市街地再開発事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第120集
編著者名	宿野隆史・小池勝典・柴田洋孝・向山純子
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026-284-0004
発行年月日	2008（平成20）年３月21日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道跡番号	°′″	°′″			
吉田古屋敷遺跡(5)	長野県長野市吉田３丁目811-2ほか	20201	Ａ－087	36°40′4″	138°13′16″	20061124～20070711	1,720㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田古屋敷遺跡(5)	集落	縄文時代（後期）	なし	縄文土器（称名寺式・堀之内１・２式・加曽利Ｂ１式等） 土製品（土偶・耳栓等） 石器（石鏃・石斧・石匙等）	翡翠製垂飾
		弥生時代（中期）	竪穴住居　9 土坑　2	弥生土器（栗林式土器） 石器（石鏃等） 石核・剥片類	石器製作の痕跡（ＳＢ３）
		古墳時代（中期後葉～後期末葉）	竪穴住居　29 土坑　1	土師器・須恵器 鉄製品（刀子１） 玉類（管玉１・臼玉１）	配列された土器群（住居内祭祀？）（ＳＢ25）
		古代	竪穴住居　5 溝　4 土坑　1 性格不明遺構３	土師器 須恵器	

長野市の埋蔵文化財　発掘調査報告書一覧

1968年　第１集　『狐遺長原古墳群』
1976年　第２集　『浅川西条』
1978年　第３集　『中村道跡』
　　第４集　『塩崎遺跡群』
1979年　第５集　『塩崎遺跡群（２）』
1980年　第６集　『三輪遺跡－付木内堂一元神社遺跡』
　　第７集　『田中沖遺跡』
　　第８集　『篭ノ井遺跡群』
　　第９集　『四ツ屋遺跡（第１～３次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（３）』
1981年　第10集　『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
　　第11集　『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年　第12集　『浅川扇状地遺跡群　－牟礼バイパスＡ・Ｅ地点』
1983年　第13集　『浅川扇状地遺跡群廻田遺跡・
　　川田条里の遺構・石川条里の遺構』
1984年　第14集　『石川条里の遺構（２）・上駒沢遺跡』
　　第15集　『箱清水遺跡（２）』
1985年　第16集　『石川条里の遺構（３）・（付上駒沢遺跡）』
1986年　第17集　『浅川扇状地遺跡群　－牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点』
　　第18集　『塩崎遺跡群Ⅳ　市道松節－小田井神社地点遺跡』
1987年　第19集　『土口将軍塚古墳　－重要遺跡確認緊急調査－』
　　第20集　『三輪遺跡（２）』
　　第21集　『芹田小学校遺跡』
　　第22集　『長野吉田高校グランド遺跡』
1988年　第23集　『横田遺跡群　富士宮遺跡』
　　第24集　『塩崎遺跡群Ⅴ　竪屋敷遺跡』
　　第25集　『小島柳原遺跡群　南川向遺跡』
　　第26集　『東番場遺跡』
　　第27集　『小柴見城跡』
　　第28集　『宮崎遺跡』
　　第29集　『浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡』
　　第30集　『地附山古墳群』
　　第31集　『町川田遺跡』
1989年　第32集　『中条遺跡』
　　第33集　『鶴前遺跡』
　　第34集　『石川条里遺跡（４）』
　　第35集　『篭ノ井遺跡群Ⅱ』
1990年　第36集　『屋地遺跡Ⅱ』
　　第37集　『篭ノ井遺跡群Ⅲ』
1991年　第38集　『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（３）』
　　第39集　『塩崎遺跡群（６）・石川条里遺跡（５）』
　　第40集　『松原遺跡』
　　第41集　『小島柳原遺跡群　中俣遺跡・
　　浅川扇状地遺跡群　押鐘遺跡・榎田遺跡』
1992年　第42集　『田中沖遺跡Ⅱ』
　　第43集　『南宮遺跡』
　　第44集　『塩崎遺跡群（７）』
　　第45集　『石川条里遺跡（６）』
　　第46集　『篭ノ井遺跡群（４）』
　　第47集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・
　　本堀遺跡・柳田遺跡・稲荷遺跡』（２分冊）
　　第48集　『小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅱ』
1993年　第49集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（４）』
　　第50集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』
　　第51集　『松原遺跡Ⅱ』
　　第52集　『田牧居屋遺跡』
　　第53集　『岩崎遺跡』
　　第54集　『古町遺跡流入堰』
　　第55集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢新町遺跡Ⅱ』
　　第56集　『上見林遺跡』
　　第57集　『石川条里遺跡（７）』
　　第58集　『松原遺跡Ⅲ』
　　第59集　『史跡松代藩主真田家墓所』
1994年　第60集　『篭平遺跡・宮ノ下遺跡』
　　第61集　『栗田城跡（２）』
　　第62集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（５）・
　　小島柳原遺跡群　上中島遺跡』
　　第63集　『松原遺跡Ⅳ』
　　第64集　『小島柳原遺跡群　宮西遺跡』
　　第65集　『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスＢ地点遺跡（２）』
　　第66集　『石川条里遺跡（８）』
1995年　第67集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』
　　第68集　『栗田城跡（３）』
　　第69集　『浅川扇状地遺跡群　徳間本堂原遺跡』
　　第70集　『八幡田沖遺跡』
　　第71集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡（２）・吉田町東遺跡』
　　第72集　『塩崎遺跡群（８）・石川条里遺跡（９）』
　　第73集　『松代城跡』
　　第74集　『松代城跡Ⅱ』
1996年　第75集　『浅川扇状地遺跡群　吉田四ツ屋遺跡・
　　三輪遺跡（６）・栗岡原遺跡』
　　第76集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢城跡・
　　小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅲ』
　　第77集　『浅川扇状地遺跡群　松ノ木田遺跡』
　　第78集　『布施原１号古墳・２号古墳』
　　第79集　『柏尾南遺跡』
1997年　第80集　『小島・柳原遺跡群　木内堂一元神社遺跡Ⅱ』
　　第81集　『屋花川扇状地遺跡群　村南遺跡』
　　第82集　『浅川扇状地遺跡群　松ノ木田遺跡Ⅱ』
　　第83集　『下箕ケ谷遺跡』
　　第84集　『浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡』
　　第85集　『上丸反遺跡』
　　第86集　『屋花川扇状地遺跡群　寺村遺跡』
1998年　第87集　『長野遺跡群　西町遺跡』
　　第88集　『小島柳原遺跡群　木内堂一元神社遺跡Ⅲ』
　　第89集　『屋花川扇状地遺跡群　屋張城跡』
　　第90集　『西前山古墳』
　　第91集　『屋花川扇状地遺跡群　西方遺跡・中沢城館跡』
　　第92集　『松原遺跡Ⅴ』
　　第93集　『栗岡原遺跡（２）・田中沖遺跡Ⅲ』
　　第94集　『浅川扇状地遺跡群　小板屋遺跡』
1999年　第95集　『緒内遺跡群　高野遺跡』
2000年　第96集　『南宮遺跡Ⅱ』（第１分冊・遺構編）
2001年　第96集　『南宮遺跡Ⅱ』（第２分冊・遺物編）
　　第97集　『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』
　　第98集　『川田氏館跡・岩崎遺跡Ⅱ』
　　第99集　『浅川扇状地遺跡群　徳間榎田遺跡』
2002年　第96集　『南宮遺跡Ⅱ』（第３分冊・考古編）
　　第100集　『四ツ屋遺跡Ⅱ』
　　第101集　『篭ノ井遺跡群（５）』
2003年　第102集　『浅川扇遺跡（２）・恵出遺跡　三合塚西古墳・
　　石川条里遺跡（10）』
2004年　第103集　『篭ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群辰巳遺跡・
　　浅川扇状地遺跡群本郷前遺跡』
　　第104集　『浅川扇状地遺跡群　天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡』
　　第105集　『浅川扇状地遺跡群　榎田遺跡（２）』
2005年　第106集　『緒内遺跡群　南条遺跡』
　　第107集　『屋花川扇状地遺跡群　西方遺跡（２）』
　　第108集　『浅川扇状地遺跡群　桐原宮西遺跡・権現堂遺跡（２）・
　　吉田古屋敷遺跡（２）・返且遺跡』
　　第109集　『松代城下町跡』
　　第110集　『松代城下町跡（２）』
　　第111集　『石川条里遺跡（11）・浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡（３）・
　　浅川扇状地遺跡群　上長畑遺跡』
2006年　第112集　『浅川扇状地遺跡群　吉田町東遺跡（２）』
　　第113集　『小島・柳原遺跡群　木内堂一元神社遺跡（４）』
　　第114集　『松代城下町跡（３）』
　　第115集　『善光寺門前町跡』
2007年　第116集　『平林東沖遺跡』
　　第117集　『篭ノ井遺跡群（６）』
　　第118集　『吉田古屋敷遺跡（３）』
　　第119集　『吉田古屋敷遺跡（４）・田牧居屋遺跡（２）』

長野市の埋蔵文化財第120集

浅川扇状地遺跡群

吉田古屋敷遺跡(5)

平成20年3月14日　印　刷
平成20年3月21日　発　行

編集
発行　長野市教育委員会
　　長野市埋蔵文化財センター

印　刷　信毎書籍印刷株式会社